



校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第1号

令和3年4月12日

4月1日校長として赴任しました山崎誠です。また、校長室だよりの名前もなにも決めておりませんが、情報発信の一つとして、当面は学校のホームページで発行していきたいと思っております。

最初は始業式での話を掲載します。次号は、入学式の式辞を掲載予定です。

始業式での話（抜粋・一部改変） *始業式では割愛した部分を一部掲載しています。

今年度のスタートにあたり、これまでの合い言葉（凡事徹底、日々新生、志あるところに道はある）をもとに、新たな合い言葉を作りました。

『小さな挑戦、小さな善行、確かな志 ～自立した大人となるために～』 です。

「自立は自ら立つと書きますが、自らを律する自律も含んでいます。この言葉を選んだのは、みなさんに自立した18歳として高校を卒業してほしいからです。しかし一言で自立と言っても人それぞれとらえ方が違うし、現在の状況も違います。必ずしもすべてが自分できるようになるという意味でもありません。自立とはなにか各自で考えてください。自分にとって自立した姿はどういう姿なのか、その姿になるには何が足りなく、何をしなければいけないのか。

これからの学校生活の様々な場面で、成長するチャンス、挑戦するチャンスがあると思います。しかし、自分が意識していないとそのチャンスや挑戦はただのイベントで終わってしまいます。

また、凡事徹底、あたりまえのことをあたりまえにする中で、つまりしっかりとした生活を送る中で、そのチャンスは見えてきます。

だからこそ、常に自立と言う言葉を、キーワードとして意識してほしいと思います。

そして「小さな挑戦、小さな善行、確かな志」に込めた意味から、みなさんに二つお願いがあります。

一つ目は、小さな挑戦であってもいいので、明日の自分に会うのが少しでも楽しみになるようなことを日々意識し取り組んでもらいたいです。「日々新生」、本当に小さいことでもかまいません。例えば、10分ほど勉強時間をいつもより長くしよう、そんな小さな挑戦・変化でいいのです。成長は変化の結果です。学習でも、部活動でも、家庭での生活でも何でもいいです。それを考え、失敗を恐れず取り組むことがそれぞれの自立につながると信じています。なによりも学校は、挑戦し失敗からも学ぶ場所です。たとえば、カーネルさんは、1,009回も営業で断られたそうです。挑戦し、あきらめず、志をもってそれを続けることが大事です。マラソンも、完走には、まずはスタートラインにたつこと、1歩を踏み出すこと、それが大事です。

二つ目は、小さな善行。一日一善という言葉がありますが、ほかの誰かを思ってなにかをすることで、他者を尊重する、気遣う気持ちが育ちます。廊下のゴミを拾う、そんな小さなことでいいのです。マスクの着用や手指消毒、検温など、自分のためにも、みんなのためにも徹底する。それも気遣いの一つです。気遣いができると、応援される存在になります。応援は自分の成長、成功にもつながります。一人一人にその気持ちがあれば、いじめもない、安心・安全な学校となるはずですよ。

水泳の池江選手が「出口の見えないトンネルはない」という医師の言葉を信じて病魔と闘ったと言っておられました。今のような世の中だからこそ、確かな志をもってほしい。志は、小さいか大きいかは関係ありません。確かな志はぶれない自分をつくります。

なによりも学校は、夢と絆を育むところです。仲間共に、自分の夢や志を実現できるようがんばってください。それでは、皆さんが今を大切に、一生懸命取り組み、気概に富んだ一年になることを願って、始業式にあたっての話とします。



校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第2号

令和3年4月13日

今回は、入学式の式辞を掲載します。

校長室だよりの名前はまだ決まりませんが、今後の掲載内容を考えながら、いずれつけたいと思います。

令和3年度入学式 式辞（抜粋・一部改変） *本校・分校で共通するところのみ掲載しています。

春の風が、学校に花の匂いや鳥のさえずりを運んでくれる今日の良き日、令和3年度の入学式を執り行うことができますことは、本校関係者一同大きな喜びです。学校を代表し、深く感謝申し上げます。

本来であれば、同じ式場に来賓の方々のお臨席を賜り、また在校生も一緒に皆さんの入学を盛大に祝福するところですが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、このような形の入学式挙行となることをどうかご理解ください。

ただ今、入学を許可いたしました新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

在校生、教職員一同、皆さんの入学を心から歓迎いたします。

保護者の皆様におかれましても、お子様の御入学おめでとうございます。これまでお子様を育ててこられました皆様に敬意を表しますとともに、私ども教職員に課せられた責任の重さに、身の引き締まる思いでございます。

皆さんは、この伝統ある高校の生徒として、本日その第一歩を踏み出すわけですが、ここでの3年間で、皆さんは社会のどこかを支える、なくてはならない人へと成長していくことになります。

そして、この三刀屋高校が、皆さんの成長するステージとなるのです。

折しも先月東日本大震災から10年が経ちました。

新型コロナウイルスが未だ収束しない中、あらためて心に浮かんだ言葉が、「夢と絆」です。

北朝鮮に24年間も拉致され、2002年に帰国された蓮池薫さんがその著書や講演で次のようなことを語っておられます。

「拉致されて北朝鮮に連れてこられ、将来の夢を描くこともできない。家族も友達もまったくいない北朝鮮で、自由もなく、絆もないことにただただ絶望した。」

今私たちががんばっているのは、夢や絆があるからです。東日本大震災からの復興にも夢と絆が欠かせませんでした。夢と絆を大きく育むのが学校です。夢と絆を抱けること、持てることに感謝し、高校3年間でそれぞれの夢と絆をさらに育み、成長して欲しいと思います。そういう思いを込めて

「小さな挑戦、小さな善行、確かな志 ～自立した大人となるために～」という言葉を送り、式辞としたいと思います。これを学校での合い言葉とすることにしました。

人は何もせずに成長することはできません。成長のためには挑戦することが必要です。

小さな挑戦でいいのです。成功しようが失敗しようが、挑戦を通し人は成長します。

だからこそ、学校は、「安心して挑戦し失敗からも学ぶことができる場所」でないといけないと思っています。そして、それぞれが確かな志をもち、あきらめず続けることが大事です。

小さな善行という言葉をつけたのは、自分以外の誰かのためになにかをしようという気持ちや思いやりをいつも持っていて欲しいからです。

廊下のゴミを拾う、なんでもよいのです。それは、誰かが気持ちよく廊下を歩くための行いであり、自分以外の誰かを大切にすることです。マスクの着用もそうです。

マナーは、相手のためにもあることと同じです。相手を気遣う気持ちが、絆のある学校をつくっていくことにつながります。それは、安心安全な環境の中で、学べる学校であることにもつながります。また、挑戦し、成長する過程で得た自信や矜持を次への挑戦と、人への優しさに使える人であって欲しいと思います。

最後に、保護者の皆さまに、お話しいたします。

家庭と学校が協力・連携し、教育に当たることが、何よりも大切なことは、言うまでもありません。連携には、「連絡を密に取り合って、一つの目的のために一緒に物事をする。」と言う意味があります。なにとぞ学校を信頼していただき、家庭と学校との風通しを良くしながら、お子様の成長に向け、一緒に取り組みたいと思いますので、よろしくお願ひします。

3年後の卒業式の際、ここにいる新入生が、心身ともに自立した18歳の大人に成長し、そしてこの高校に来て本当によかったと思ってもらえるよう教職員が一丸となって尽力することをここにお誓ひ申し上げ、式辞といたします。



○校長室だよりの名前を「絆」とすることにしました。

先日、地域の方からお便りをいただきました。内容の詳細は、ご本人の許可を得ていないのでここでは紹介できませんが、三刀屋高校の生徒の活動に対するお褒めと応援の言葉で綴られていました。こうして、高校の教育活動に関心と期待を寄せただけけることは、生徒はもちろん、教職員も大いに励みになるところです。

このお手紙に、「絆」と書かれた書が同封されていました。高校と地域・ご本人との「絆」を感じて書かれたものです。ちょうど、入学式の式辞等で、学校は「夢と絆」を育むところであると話をしたところでした。これを縁と感じ、「絆」を校長室だよりの名前にすることにしました。タイトルの題字は、同封されていました書載せています。

今後、学校の内外で絆を広げ深めていくことで、ますます三刀屋高校、掛合分校の教育活動が充実したものとなり、そのことで生徒、教職員、保護者、地域の方々に多くの幸が降り注ぐことを願って、この題字を使っていきたいと思ひます。

○「挨拶」の大切さ

4月も中旬となり、部活動の各種大会が始まっています。

放課後、いくつかの部活動を見学にいきました。どの部活動においても、生徒たちが大きな声で、「こんにちは」と挨拶をしてくれます。見学する者にとっては、邪魔にならないか恐る恐る近づいているのですが、挨拶一つで、受け入れられた気持ちというか、見学しても大丈夫、ここにいて大丈夫という気持ちにさせてくれました。分校から本校に練習に来ている生徒が、わざわざ近づいて来て挨拶してくれたこともありました。朝の「おはようございます」の一言が、お互いの朝の微妙な心理的な距離感を一気に縮めてくれるのと同じです。安心安全な学校・環境づくりには、まずは「挨拶」からだと感じたところでした。



○校長室だより・・・

(隠岐)西郷岬灯台から西郷湾を臨む⇒



校長室だよりをどう思うかで、なにをねらいに出すのか、はずかしながら自分の中でまだはつきりしていないのが実情です。教頭時代の最初の2年間でご一緒した、当時の隠岐養護学校の野津保校長先生が、校長室だよりを出しておられ、あらためてどういうねらいで出されていたか読み返してみました。校長室だよりの名前は「^{かんてき}閑適の窓から」。管理職勤務も、特別支援学校勤務も、単身赴任もはじめで不安と緊張の中で着任した時に、校長先生から「新着任のみなさまへ」という^{かんてき}お手紙とともに「閑適の窓から」44号をいただきました。そこには、「仕事の周辺部分(直接日々の仕事の話題は取り上げない)や隠岐の話題などをひまつぶしに書き、ひまつぶしに読んでもらうのを原則としています」と書かれていました。そして、「すべてがバラ色というわけにはいきませんが、失敗やまちがいをおかしながら、みんなできりよい職場をつかって、できりよい実践を作り出すことができればよいなと思っています。」と綴られていました。その言葉で安心した気持ちになるとともに肩の力が抜けた感じがしたのを覚えています。令和3年度の重点目標等で、本校・分校共に「～安心して失敗できる学校～ 安心・安全な学びの環境づくり」を掲げたのは、この時の思いが一つあるのだと思います。3年間で133号出され、45号からを楽しみに読んだことを思い出します。手書きのやさしい字で紙の色を毎号変えてあるのも気遣いだったと思います。そして毎回必ずすべての教職員の机に置いて回っておられました。今思えばそれをきっかけに話をしたり声かけをしたりするなかで、報告や相談をしやすい雰囲気をつくっておられたのだと思います。

合い言葉にした「～自立した大人となるために～」の“自立”について、「閑適の窓から」で触れておられる号があります。そこには「自立していくということは、必死になっている自分の積み重ねである。と同時に、必死になっている自分に必ず寄り添ってくれている他者を忘れてはならない。自立は誰の手もかりず一人でがんばるという意味ではなく、他者の存在をよりどころにして自分でがんばることととらえるものだと思う」と書かれていました。合い言葉にした「小さな挑戦、小さな善行」に込めた思いに通じるとあらためて思うとともに、知らず知らずと校長先生の言葉や学校経営等から学んでいたことを実感しました。そのあと転勤した当時の松江東高校の永瀬校長先生が掲げておられた^{みち}合い言葉「自立への道程」でも同じ思いや学校経営に出会いました。そうした出会いがあって今の自分があるのだと感謝するとともに、「職場は一将の影」という言葉をかみしめているところです。

次号では、『教員研修』という本の“師の教え”というコーナーで紹介されていた「人を信じるということは、裏から疑うということ」という言葉に触れて、私なりに考えたことを書きたいと思います。



○信じるとは・・・

伐採前の分校のメタセコイア3本⇒



『教員研修』(2019.12)の“師の教え”の欄に、「人を信じるということは、裏から疑うこと」という言葉がのっていました。投稿された方は小学校の校長先生で、中学1年生の頃に担任から授かった言葉だそうです。その言葉の意味をずっと追いついて、今は、「人を信じるには、もし信じる方向にことが現れないとき、人を助け実現するための手立てを用意することが大切である」と捉えていると書かれて

いました。例えば、学校で生徒が希望する進路に向けてがんばっていたら、その実現に向けた努力の軌跡を信じ、その手助けをするのが教員の役割であるという意味でしょうか。



この言葉を自分なりに考え、その考えを、今年度最初の分校職員会議で、「うちの子にかぎって」という話で一部説明しました。本校では時間がなく話せなかったため、この校長室だよりで少しその意図を説明します。

「生徒(子ども)を信じるということが、その生徒(子ども)の成長や変化の把握をしないことにつながってはいけません。生徒は常に小さな挑戦を繰り返し小さな変化の積み重ねの中で自立に向けて日々成長をしている。だから、良い意味で生徒の事を疑って欲しい。小さな変化を見逃さず、褒めたり、認めたり、慰めたり、助けたりして欲しい」。そんな話を、2年前の教育センター部長時代に、たしか11年目研修の閉講式で話をしました。

テレビドラマなどで、子どもが悪いことをして呼び出された時の保護者の常套句に、「うちの子にかぎって」という言葉を耳にすることがあります。「ここであなたの言われる“うちの子”とは、いつの時点での子どもの姿ですか?」と言いたくなることがあります。言いたいことは、いつも生徒(子ども)の成長や変化に目を向けて欲しいということ。そして、うまくいっている時は褒め、目指す夢に向かってうまくいかず、志や決意が揺れているような時は、教員や保護者はそっと手助けをして欲しいということです。また、教員は学校での成長や変化を、保護者は家庭での成長や変化を相互に連絡を密にして伝え合い、お互いで「うちの子にかぎって」とか「Aさんは大丈夫とっていました・・・」というようなことを言わないような連携をして欲しいという意味で、「うちの子にかぎって」と言わせないという話をしました。家庭と学校との連携において大切なのは、目的を共有することであり、かつ対話が重要であることは言うまでもありません。そういう意味でも、PTA活動はとても大切と考えています。

今放送している月9のドラマ「イチケイのカラス」で同じようなセリフがありました。「疑うことは信じること」、「信じることは相手を知って初めてできること。疑って真実を知ることで初めてどういう人間か知ったから信じることができた」「単に信じることは知ることの放棄」。そんなセリフだったと思います。

情報化社会にあって、主体性を育み、疑うことで自分から真実を、正しいと判断できる情報を取捨選択できることが大事だと思います。なによりも、自分にとって都合のいい情報のみで判断しないことが大事です。



○対話とは・・・

三刀屋高校遠景⇒

『島根県の合戦』(いき出版 2018)で幕末期の「隠岐騒動」を担当したのをきっかけに、「対話」について考え学校広報誌に寄稿したことがある。ちなみに、雲南に関係するところでは、戦国期の「三刀屋丸城籠城戦」や「地王峠の戦い」などが収録されている。

隠岐騒動は、松江藩の預かり地となっていた幕領である隠岐国が、明治維新を期に、島民たちの決起によって松江藩の郡代を島



から退去させ、自治政府を樹立した出来事である。隠岐騒動が、『レ・ミゼラブル』で描かれた時代の出来事である、世界的に有名な革命的都市自治体政府であるパリ・コミューンよりも早いことはあまり知られていない。隠岐騒動では、島民が追放する郡代を乗せた船に餞別(せんべつ)として米や酒を積んだと伝わっている。革命的な行動であるのに郡代の命を奪わずに追放したことと合わせ、隠岐古典相撲に流れる精神を垣間見ることができる。

コミュニケーションには、「対話による合意形成」という意味もある。世界に先駆けた自治政府が隠岐で樹立できた要因は、誰かに扇動(せんどう)されたり、暴発したりしたのではなく、隠岐国を良くしたいという強い思いのもと、納得いくまで島民同士の対話がおこなわれ、その上で成された合意のもとで統一した行動をとったこと。さらに、相手(郡代)ともねばり強い交渉(対話)をおこなったことにあると考えている。

「グローバル企業のような多様な人材がいる組織では意思決定が逆に早い。それは、バックボーンが異なる人が集う場では、数字・ファクト・ロジックで議論するしかないので忖度などない合理的で素早い意識決定がなされるからである。」とライフネット生命創業者の出口治明氏は、あるインタビューで話しておられた。これからのグローバル社会においては、合意形成を導くためになされる対話の中で、エビデンスが重要視されていくことは確かだと思うが、対話が人と人の会話である限り、そこには感情や思いというものがあるし、それを忘れてはAIと同じになってしまうことを忘れてはならない。

笑顔は、人間にとって最初に獲得するコミュニケーションである。それぞれの心の中にある「私、よくがんばった。」「私ってすてたもんじゃない。」という“今の自分に対する素直な満足感や肯定感”が笑顔の源ともなっている。そのためには、エビデンスに基づく会話をしながらも、自分自身が尊重される感覚が大事であるし、だからこそ相手のことを尊重し認め合うことが大事である。

しかし、対話の中で前向きでない言葉が出ることは当然ある。相談においては、「悩みを話すことは、悩みを離すこと、手放すこと」とも考えるそうだが。対話においては、結論を急ぎ過ぎず、またすべてを論理的に合理的に解決していこうとするのではなく、宿題として残すくらいの余地が大事であると考えている。それが語り合うことであり、これからのグローバル社会において捨てるはいけない部分ではないだろうか。余地のない合意形成は、ファシズム的にもなりかねない。つまり、対話においては、相手の意見を受け止め、互いを尊重し合うことに加え、心と会話に余裕を持つことが重要と考えている。

「主体的・対話的で深い学び」が、令和4年度の高校1年生からはじまる学習指導要領の中でうたわれている。全国の各高等学校においては、すでにこうした授業が浸透しつつある。そんな今だからこそ、対話の意味を自分なりにしっかりと考えるべき時だと考える。

※今回の校長室だよりは、松江東高校教頭時代に寄稿した原稿を加筆・修正したものです。

★「校長室だより」は、学校ホームページに不定期掲載しています。ぜひ学校ホームページをご覧ください。



○台湾研修

中正紀念堂(中華民国初代總統蔣介石の顕彰施設)⇒

新型コロナウイルス感染症の終息が未だ見えない中、昨年度に続き、残念ながら今年度も台湾研修旅行を中止とすることになりました。楽しみにしていた生徒に対して本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。



交流活動を予定していた台湾の真理大学の担当者からは、「コロナの影響で活動を中止せざるを得ないことはとても残念ですが、来年状況が改善されたら、交流の再開ができることを心から祈念しています。」というお言葉をもらっています。台湾との「絆」までが切れたわけではないことに感謝しつつ、生徒のみなさんには、台湾への関心を持ち続け、いつかは訪れて欲しいと願っています。

私は、2度ほど台湾を訪れたことがあります。1度目は今から25年ほど前で、台湾全土を1周しました。2度目は20年ほど前で、台湾の中学校で教員をしている友人を訪ねて行きました。2度とも訪れたのが、故宮博物館と中正紀念堂です。北京にある故宮博物館にも行ったことがあります。関心がなければなぜ同じ名前の博物館があり、収蔵品も違うのかもわからないと思います。旅行で訪れて歴史や現実を肌で感じたことで、知識としてではなく、実感として台湾を理解できたと思っています。蔣介石の享年にちなんだ89段の階段がある中正紀念堂。これほどの規模の個人の顕彰施設を国が建てるのは、日本では考えにくいことかもしれません。そうした、文化や歴史認識の違いを知り、考える契機とすることが海外を研修旅行先とする意義の一つです。

文化的な違いが、経済的あるいは政治的な利害と結びついた時、文化が紛争や摩擦を激化させる種となることは歴史や現実が物語っています。だからこそ、文化を理解していくことは、平和を守ることにもつながります。

昨年お亡くなりになった台湾の第4代総統の李登輝氏の自伝を読んだことがあります。うろ覚えですが、いわゆる本省人としてはじめて総統になった、日本が台湾を植民地支配していた時代に京都大学に在籍したこともある李登輝氏の中学校時代の出来事が印象に残っています。遠足で台北に行く前日の夜、父親に欲しいものがあるかと聞かれ、「百科事典」と答えたため、父親が悲しそうな顔をしたそうです。今はインターネットでいろんなことを簡単に調べることができますが、当時はそういうわけにはいきません。百科事典は相当に高価なものです。翌朝出発の見送りに姿のなかった父に対して申し訳ない気持ちになったそうです。しかし、バスに乗り込んだあと窓をたたく音が……。そこには、一晩中親戚を回って頭をさげてかき集めたしわくちゃのお金を握った父の姿があったそうです。子どもの将来のために、勉学のために、親としてなんとかかしたいと思って行動した父の姿を忘れることはできなかったと思います。ドラマ「北の国から'87 秘密」のラストシーンで、純が手にした泥のついた1万円札を思い出すのは私だけでしょうか。

親が残したい財産とは、お金でなく、教育でつく力など人には奪えないものだと思います。だから、今回中止とした台湾研修旅行の経費、次年度1年生から導入される予定の生徒一人一台端末の経費など多大な保護者負担をしてもらうことに対し、保護者の思いや願いを今一度考えないといけないと思っています。



○台湾

映画「千と千尋の神隠し」を思わせる台湾の九份⇒

台湾に2度ほど訪れたことがあることは、第7号で触れたところですが、今回はその時のことを少しお話したいと思います。

はじめての訪問は、25年ほど前でした。台湾桃園国際空港(当時は蒋介石にちなみ中正国際空港)に降り立ち、高雄、知本温泉、花蓮、台北で泊まる4泊5日の台湾1周でした。植生だけでなく、高雄では台風が直撃したこともあって、北回帰線が通る緯度の

低い南の国であることを実感しました。知本温泉では、持ち帰り用の温泉タオルがあり、各地の土産店などで日本語が通じる年配の方に何人もお会いしたことで合わせて、戦前日本が統治支配をしたことを痛感しました。

花蓮では、「阿美文化村」での民族舞踊ショーを鑑賞しました。台湾には、蒋介石率いる国民党とともに1949年頃台湾に渡った人、清朝の時代に渡ってきた人、鄭成功で有名な明の末期に渡ってきた人、アミ族などもともと台湾に住んでいた人など一口に台湾人といっても多くの人がいることを知りました。ダイバーシティという言葉が一般化していますが、1990年代はまだまだこれからでした。アイヌ民族からはじめて国会議員となった萱野氏により旧土人保護法の廃案が提案され、「アイヌ文化振興法」が制定されたのがこの頃だったと思います。「ダイバーシティ」が、多様性やそれを認め受容することに対して、それをどう活かすか個人レベルで考えること、最終的にはすべての人の利益になることを目指す考え方が「インクルージョン」だと捉えています。インクルージョン(inclusion)は直訳すると包括という意味です。人間の多様性を尊重し、障がいのある子どもも障がいのない子どもも共に教育を受けるインクルーシブ教育は、共生社会において最も大事な教育の一つです。

自ら中学校中退やトランスジェンダーであると公表した台湾のオードリー・タン氏は、2016年に35歳という若さでデジタル化の担当大臣に任命され、台湾の新型コロナウイルスの感染対策を成功に導いた人物として世界中の注目を集め、「世界一受けたい授業」にも出演されました。このことが象徴するように、ダイバーシティ、インクルージョンが台湾で浸透しているのは、台湾には様々な人々がいることを認めてきたからかもしれません。台湾で出会う人はみんなやさしいと感じました。これは、多様な人を受け容れていく社会だからかもしれません。



台湾では、心の知能指数といわれるEQが重視される国というのも納得できます。

写真の九份には2度目に訪れました。写真を見て、台湾はすべてがこんなところと思ひ込む人もいないかもしれません。訪れる前は私もその一人でした。日本では「付度」という言葉にも象徴されるよう、相手の感情を読んで行動することがよくあります。それが思い込みであって、場合によっては偏見につながることもあります。それを防ぐためにもいろんなことに興味をもち、感じて、触れて、疑問をもち、考えていくことが大事だと思います。課題解決学習の本質はそこにあると思っています。





校長室だよりはHPに不定期連載しており、内容により全校あるいは学年単位で保護者あて配布もしています。

○台湾2

台北では古いエリアにある迪化街^{でしかがい}⇒

5月16日の山陰中央新報に「台湾からニーハオ！」という記事がありました。迪化街に雑貨店を開いた日本人女性が、たくましく暮らす台湾の人や、活気ある町の表情を伝える連載です。

その記事の中に、第8号で触れた「台湾の人はやさしい」という印象が私だけではないと思ったところがありました。作者は、「台湾人は情が厚く、自分が正しいと思うとちゅうちょなく突き進む」と評されて

います。台湾では、電車で人に席を譲るのはあたりまえで、作者の息子さんが新生児の頃、子連れで電車に乗った時ひと固まりの客が一斉に立ち上がったそうです。すぐ降りるからと断っても、「あんたのためじゃない」と腕まで引っ張って座らされたそうです。それは、自分にいい気分を充電して去っているようであっても、決して恩着せがましくなかったそうです。こうした「小さな善行」が、台湾では人から人へと伝染していき、見知らぬ人から受けた親切をどこかで返したくなっていくのだと書かれていました。

同じようなことをカナダで経験したことがあります。バンクーバーで路線バスに乗った時、年配の方が乗車してこられ、バスに乗っていたほとんどの人が一斉に立ち上がったのです。なにが起きたのかとびっくりしたと同時に、座っているのがほぼ自分だけという状況に気づくのにも時間がかかりました。

また、職場の有志で京都を旅した時のこと、満員のバスに子連れの妊婦さんが乗ってこられました。窓側に座っていた当時の私の上司(教育センター所長)が間髪入れず「こちらにどうぞ」と席を立たれました。通路側に座っていた私は状況把握が遅く席を立つのが遅れ、動く車内で妊婦さんを誘導するはめになりました。上司は、満員バスの中で誰か困っている人はいないか常に気働きをされていたのだと思います。

一畑電車で松江に通勤していたある日、電車がほぼ満員の時がありました。私の斜め前の乗客が荷物を置いていた座席スペースに無理やり座った若者がいました。私とは対面の位置に座った彼の荷物にはネームタグがついており、メッセージが添えてありました。「この子には障がいがあり発作を起こすことがあります。その際はちゅうちょせずに119番するか母親の携帯に連絡をください」という内容だったと思います。席を譲るべきなのはなにも年配の方や妊婦さんだけではないと知ると同時に、母親がそのメッセージを書いた思いを想像しました。

震災後に何度か東北を旅し、自然な気遣いに癒されたことがあります。荷物を抱え列車を待っていると、旅人が長旅で座れるようにという思いからか、列の先頭にいた高校生が自分の場所と交代しますと声をかけてくれたことがありました。旅行者であろう夫婦に席を譲る地元の年配の女性グループを目にしたこともありました。

震災直後に東北旅行に誘われ断ったことがあります。理由は、「震災のあった東北にお金を落としてあげないといけない。だから旅行に行こう」と誘われたからです。「してあげる、してもらう」感じに違和感を覚えたのです。障がい者に対する合理的配慮の提供が求められています。しかし、「してあげる、してもらう」関係での提供では意味がありません。共生社会においては、自然に心からお互いを応援したり支援したり助けたりする関係が構築できないといけないと思っています。助け合い、励まし合い、支え合い…合い(愛)のあふれる社会へ…





○感謝

地域の方が定期的に校長室へ生けに来てくださいます。感謝！⇒

5月17日に県高校総体の壮行式を本校で行いました。グラウンドでの実施を計画していましたが、雨天のため規模を縮小して体育館での実施となりました。

校長挨拶では、4つのK(言葉)をキーワードに話をしました(追加改変あり)。

まず「結果」。試合である限り結果が必ずつきます。結果を恐れることなく、これまで努力してきた成果を思う存分試合で発揮してもらいたい。

次に、「感動」。ひたむきがんばる姿は周囲に感動を与えます。努力を重ねた日々と自分を信じ勝利をめざしてがんばって欲しい。勝利しても「謙虚」である「気遣い」も大事です……。

3つめに、「感謝」。これまで支え合った仲間。そして保護者、部顧問など指導等に関わった方々、応援してくださる地域の方、県総体開催に尽力されている競技関係者などいろんな人に感謝の念をもってもらいたい。

最後に、「軌跡(過程)」。栄光(勝利)は、伝統をつかってこられたOBや伝統を受け継ぐ後輩、また感謝すべき人たちに送るものかもしれません。勝負がつく瞬間は一瞬です。その一瞬の喜びのために日夜努力してきたと思います。勝利の瞬間であろうが、負けて試合が終わった瞬間であろうが、一生懸命がんばったものにしか見えない風景があります。その風景は、努力した軌跡と、そこで培ってきたものがあればあるほど違って見えるはずです。その一瞬見える風景が、これからの将来の支えになると思うので、しっかりその風景を見てきて欲しい。

着任式などで話をしましたが、50歳になってから隠岐の島ウルトラマラソンなどいくつかのマラソン大会に出ています。沿道での応援や大会の関係者・ボランティアの人たちへの感謝の気持ちから、ゴール後には振り返って脱帽しお礼の挨拶(お辞儀)をするようにしています。しかし、するようにしているくらいだから、忘れることもあります。忘れた時は、どんなにゴールまでがんばった自分がいても、自分しか見えてなかったことに反省です。

隠岐の島ウルトラマラソンは、感動が駆け巡って島を一周します。最後の10km、空港のある岬付近になると、沿道から「お帰りなさい」と声がかかります。この言葉一つで、疲労がやわらぎ、気持ちが暖かくなります。言葉で返す元気がなく、会釈で応えるのですが、心の中では「ただいま」「ありがとうございます」と言っています。

今、シラスリボン運動が広がりつつあります。私も、ネームタグにつけて入れています。これは、コロナ禍で生まれた差別、偏見を耳にした愛媛の有志がはじめたプロジェクトです。ホームページによると、シラス色のリボンや専用ロゴを身につけて、「ただいま」「おかえり」の気持ちを表す活動で、リボンやロゴで表現する3つの輪は、地域と家庭と職場(もしくは学校)とのことです。「ただいま」「おかえり」と言いあえるまちなら、安心して検査を受けることができ、ひいては感染拡大を防ぐことにつながるという思いからはじまった運動とのことです。

総体に出場し、いろんな感情や思いを抱えて帰って来る選手に「おかえり」とあたたかく迎える家庭、地域、学校。「ただいま」「ありがとう」と言う選手たち。帰るところがあるからがんばれる。学校においては、それが安心安全な学校、認め合い、励まし合う学校、そんな合いのあふれる学校の姿かなと思っています。





○晴耕雨読

5/11 分校の農業体験(田植え)の様子⇒

図書館だよりの発行にあわせ、本・読書について書いてみました。

高校時代、一番成績が振るわず苦手だったのが国語でした。大学受験に失敗した時に、1年間はニュース以外のテレビ番組は見ず、その時間を読書に充てる誓いを立てました。といっても、そう簡単に本を好きになれるものでもありません。そこで、小学生のころ読んで面白かった



『ぼくのおじさん』の著者北杜夫の本を読むことにしました。なかでも読み入ったのが『どكتورまんぼう青春記』でした。戦中戦後の過酷な時代の学生生活の話なのに、なぜかこの小説を読み終えた時には、大学生になりたいという気持ちが自分の中で強くなっていたことを覚えています。これがきっかけで、北杜夫の著書をすべて読みました。夏頃には、受験勉強を怠ける口実に本を読むくらいになっていました。そうなると、他の著者・著書にも興味が出始め、当時難解な評論文の出題で受験生を悩ました小林秀雄をはじめ、近現代の作家の本を週1〜2冊のペースで読みました。『アンネの日記』では、将来を夢見れることの幸せを痛感しました。新聞に連載される小説も読み、そのついでに社説や天声人語なども習慣として読むようになっていました。

北杜夫氏は10年ほど前に亡くなりました。その報を受けて、東京に行った折に、自宅(*住所非公開)付近を散策しました。再三出てくる自宅やその近隣の空気を肌で感じたいと思ったからです。散策しながら、著書を通じて、自分の生き方や考え方を、著者と、そして自分自身と対話していたのだと感じました。将来を思い悩んだ受験の時期だからこそ、いろんな先人と対話したいと思い、読書にはまったのだとあらためて思いました。

その数年前、公開されている司馬遼太郎の自宅(記念館)に行きました。20代〜40代は、歴史関係の本を読み漁ったのですが、彼の著書は避けてきました。司馬史観とも言われる彼の歴史観に引っ張られてはいけなかったからです。しかし、1冊読んだだけで、自分の歴史観のなさを思い知りました。歴史を知ることに重きをおき、一番大事な歴史から学び、そして考えることをしていなかったのです。

ここ数年は、柳美里さんの私小説をかなり読みました。人間のどろどろした部分が多いのですが、そのことで自分の内面のさらに深層とも向き合えた気がします。最近『JR上野駅公園口』が全米図書賞を受賞されたことでも話題になりました。彼女は、東日本大震災を契機に、福島第一原子力発電所に近い南相馬市に移住されています。私も震災後に行きましたが、あの時の光景は忘れることができません。

人は、なにかの解決策を求めて本を読むことがあります。でも、解決策をその本の中に見つけるのではなく、本を通して自分の中に見つけるものだと思います。

これからも、いろんな先人と対話するため、本を読み、そしてその町に出かけていければと思います。生徒のみなさんには、まずは身近な地域の歴史的な場所に行くことをおすすめします。手前味噌ですが、そんな時に(確か分校の)着任式でお話した『島根県の歴史散歩』を参考にしてもらえれば幸いです(笑)。

なお、ここで触れた本などを図書館で紹介するコーナー等を今後つくってもらう予定にしています。



○思いを胸に・・・

鳥根県高校総体の様子⇒

昨年度中止になった高校総体が、今年度は開催され無事終わりました。大会運営をされた関係者のみなさまをはじめ、開催を信じて日々努力してきた選手のみなさん、それを支えてきた指導者や保護者、そして地域の方々に拍手と感謝の気持ちを送りたいと思います。三刀屋高校及び掛合分校が出場する競技の会場に、剣道のオンライン中継も含めすべて行くことができました。三刀屋高校の校歌の最後に、「われらの三高ここにありと ひとしくともに誇るべし」とあります。三高プライド、カケコープライドを胸に、仲間を信じ、これまでの自分の努力を信じて、ひたおきに精一杯最後の最後まで全力で試合をする選手たちに胸が熱くなりました。3年生のみなさん、3年間本当におつかれさまでした。



自分ごとですが、高校総体後の6月中旬に、ここ4～5年参加してきた隠岐の島ウルトラマラソンが昨年につづき今年も中止になりました。開催を信じてこれまでトレーニングしてきたので、とても残念です。実は、今年の今頃は走る気力も失っていました。再度やる気を起こすきっかけくれたのは隠岐の高校生たちでした。中止の決定からしばらくして、隠岐の島町からカレンダーが送られてきたのです。カレンダーには、7月の「汽船場での

スタート風景」を皮切りに、10キロごとの写真で作成されており、6月はゴールシーンになっていました。その日、その月に走った距離も書けるようになっていました。ランニングのアドバイスや調整方法なども大会に向けて月ごとに段階的に書かれていました。この発案をしたのが隠岐の高校生で、町と協力して作成し、エントリーした選手全員に無料で送ったのだと知りました。その思いがこもったカレンダーに胸が熱くなり、トレーニングを再開して、この気持ちに伝えようと思ったのです。土日を含めた休日に走るだけですが、走らなかった休日はこの1年間で数日しかありません。それまでは、なにかと理由をつけて走らない休日もありましたが、この1年は違いました。隠岐の高校生や隠岐の人たちの思いに伝えようと決意が強くなったからだと思います。



右下の写真は、ゴールまで5キロほどの岬の道路で、ここに来ると眼前(奥)に西郷湾がきれいに見えてきます。ここまでがんばったご褒美の景色です。5月のマラソカレンダー(左上)にもなっています。隠岐に単身赴任していた時のランニングコース上にあり、隠岐でもっとも好きな風景の一つで、それを知る友人が町のカレンダーの風景写真に推薦し採用されたこともありました。この写真は、中止となった開催日の、おそらく私が通過したであろう夕方時刻に撮影されたものです。隠岐に初任で赴任した時の教え子が、「来年の今頃ここであいましょう」と送ってきてくれました。残念ながら、それは来年になりそうです。この岬では、前にも書きましたが、沿道の方々が、「おかえり」「よくがんばったね」と声をかけてくれます。スタートから公設だけでなく私設のエイド(給水給食所)がたくさんあるのですが、つかれた体を気遣って、岬では甘いコーヒーやおにぎりなどランナーを思って色とりどりの料理や飲み物、果物がふるまわれます。ここで食べた甘い卵焼きの味は今でも忘れません。手にゴミを持っていると受け取ってくれます。コールドスプレーを無償でいろんな人が渡してきます。気遣いの嵐です。これが延々と50キロ、100キロ続きます。いろんな人に支えられて生きていること、頑張り続けていることを実感する道のりです。



総体を終えた選手も今同じ思いではないでしょうか。思いを胸に次に向かってがんばって欲しいと思います。



○きなひ山

三刀屋高校の出入口から三刀屋城址公園を臨む⇒

夕方家路につくため学校の坂を下ると、三刀屋城址公園の看板が見えます。さらに国道54号線を宍道方面へ走ると、雲南市役所の裏山の頂上付近に「きなひ山」の文字が見えてきます。『出雲風土記』に地名が出てくる城名樋山(きなひ山)は、戦国期の山城の跡で今は公園になっています。



かれこれ20年以上も

前になりますが、島根県内の中近世城郭分布調査に関わる研修会で、きなひ山を訪れたことがありました。その時描いた縄張り図(城郭遺構図)が左の図です。なにぶんほぼ素人であったので正確性には欠けますが、素人でも遺構がわかりやすく描きやすかったのを覚えています。他の調査員の方が出雲部では一級の城郭遺構であると言われたこともうなずけました。図でA~Dとしている地点が堀や堀切を確認できるところです。堀と言っても松江城のような水堀ではありません。大きな凹みのようなものです。『木次町誌』を見ると、城跡には馬乗馬場や井戸などの跡があるととしています。

研修ではありましたが、当時の木次町教育委員会から、①城名樋山が風土記に見える城名樋山と同じかどうか知りたい。②城郭遺構の範囲を明確にすることと合わせ、遊歩道をつける際の配慮点を知りたい。の2点の要望がありました。斐伊小学校の全面改築にあわせて城名樋山を史跡公園として整備する計画があつたことだったと記憶しています。ちなみに、『出雲風土記』には、その昔、大穴持命が八十神を征伐するために城名樋山に城を築いたと出てきます。

城名樋山城は、戦国期の佐世氏の支城であったと推測されます。山陰の戦国大名の尼子氏に与していた佐世氏は、山口の戦国大名であった大内氏が1542年出雲に侵攻した際、尼子方として戦いました。対岸の尼子十旗(尼子氏にとって重要な10の城)に数えられる三刀屋城の城主であった三刀屋氏は、途中で大内方となっています(その後再び尼子方へ)。ちなみに、出雲侵攻は失敗し大内氏は敗走しました。その20年後、毛利氏が出雲に侵攻した際には、佐世氏も三刀屋氏も毛利方として戦い、尼子氏は滅亡しました。

城名樋山の地理的位置を考えると、国道54号線が斐伊川と交錯する地点でもあり、三刀屋川もここで合流するなど、交通の要衝に位置しています。木次商人が斐伊川水運などを利用して活躍していたことも考え合わせると、ここは流通の要衝であったと推察されます。そのことと雲南市役所の立地も関係するかもれません。

中学校説明会で、「三刀屋木次ICが木次三刀屋ICでないのはなぜ？」という話をしています。学びは、疑問を抱く感性と、それを深める探究力が大事で、その往還が学びの推進力となり、主体性も養われるという話をするためです。そうした疑問をもつことを、身近なところからはじめるのが地域学習、より深化させていくのが地域課題解決学習と思っています。先日、本校1年生の「未来創造」で、「なぜ焼き鯖が雲南名物になったか」を扱っていました。こうした学習を通して、探究力をつけ、生徒の感性が豊かになることを期待しています。



○たたら侍

春季写真コンクール分校生徒出品写真「快晴」⇒

オープンセットが雲南につくられ、映画たたら侍が撮影されたのは記憶に新しいところですが、私は、たたら製鉄によりつくられた鉄の運搬・商売がどのように描かれるのかに関心を寄せて観ました。劇中、鉄を馬に乗せて旅立ち盗賊に会うシーンがあります。当時は途中から斐伊川を使って杵築(大社)へ、さらに日御碕の宇竜から若狭まで船で運び、鯖街道を陸送したのち、琵琶湖を使って近江坂本などに陸揚げして京などに運び込まれていたようです。商人がたたらを求めて村まで来る話になっていましたが、このルートで来たのでしょうか。映画でも船のシーンがありました。



水運・海運が略奪の可能性が低く重いものも大量運搬できますが、時化等で海に消える危険性があります。鉄が重要品であったことは言うまでもなく、その生産と流通を掌握することは戦国期の領主にとってとても重要でした。支配、統制、領有・戦国期はその形態が複雑です。戦国期の山陰の流通を調べている中で、未解明なことが多かった掛合や私が住む平田の多賀氏を調べたことがありました。

『出雲国風土記』によると、飯石郡には7つの郷がありました。熊谷郷、三屋郷(三刀屋町三刀屋など)、飯石郷(三刀屋町多久和など)、多禰郷(掛合町多根、松笠、掛合、入間など)、須佐郷、波多郷(掛合町波多など)、来嶋郷です。分校のある多禰郷は、中心が現在の多禰(多根)から掛合に移ったことによるのか、戦国期にはしたいに掛合郷と呼ばれるようになりました。この地を掛合多賀氏や広島から進出してきた日倉山城の多賀山氏が治めていたようです。『掛合町誌』によれば、以前この日倉山城主を多賀山氏ではなく、多賀氏と記した文献が出たため、多賀氏と混同が生じたようです。そのためか、未解明なことが多くなったようです。

多賀氏の所領あるいは權益を有する地に目を向けて見ると、多禰郷、多久和郷、立原(加茂)、平田(出雲)、長田西郷(松江)・赤江郷(安来)などで、すべて流通を考える上で大事なところですが、山陰・山陽を結ぶ出雲備後路を通り多禰郷から多久和郷を抜けると、斐伊川と交錯する結節点に出ます。ここには来次(木次)市場がありました。そこを抜けると加茂町立原付近を通り宍道に出ます。宍道湖の西の結節点が平田であり、東の結節点が長田となります。また、飯梨川(旧富田川)河口にある赤江郷は、尼子氏の居城である富田城と中海とを結ぶ交通の要衝にあたり、尼子氏や有力領主にとって重要な地でした。そのためか、多賀氏は反尼子勢力のような存在だったようです。

掛合の多賀氏は、その後出雲の塩冶氏とともに尼子氏に敵対して没落。離反し没落した掛合の多賀氏と両翼をなす平田の多賀氏も、おそらく同じ頃に尼子氏から離反したと思われます。多賀山氏は、1442年の大内氏の出雲侵攻の時に終始大内方として戦うなど、これまた反尼子勢力だったようです。

その後の平田では、商人の記録として、次のような史料が残っています。「永禄12年(1569年)平田の目代(代官)等は、平田商人たちは三刀屋に出向いて商売をしているが、従来からの約束通り来次(木次)には行っていないのに、来次(木次)商人が逆に平田の海辺の村に来て商売をして困っているので、杵築(大社)の商人連合に調停を申し出た」というものです。このやりとりについて専門家は、「杵築商人連合が広域な地域経済圏の中心に位置して平田商人を統制下においていたこと。そして逆に来次商人は、そうした枠組みから離脱し成長していこうとしていた」とことがわかるとされています。

たたら侍や史跡もそんな歴史的背景を知った上で見ると、また違ったように見えるのではないのでしょうか……。



○4度目

春季写真コンクール分校生徒出品写真「木次町桜土手」⇒

1学期期末試験が終わりました。昨年度は臨時休校や総体中止など艱難辛苦とも言うべき日々でした。今年度は延期等が若干あったものの教育活動がほぼ実施できたこと、そのために感染症対策等に取り組んだ生徒、保護者、教職員、地域のみなさまに感謝するばかりです。本当にありがとうございました。



さて、マラソンに50歳になって挑戦しはじめたことは前にもお話ししました。そのきっかけは隠岐養護学校の生徒たちのがんばりでした。自分がなにかに挑戦することで、なにかのメッセージになれば…そんな思いからでした。

実は、それまでに長距離を3度失敗というか、断念したことがあります。最初は大学4回生の時。大学から室戸岬まで夜通し約90キロを歩き通すイベント「室戸貫歩」でした。挑戦したい気持ちはあったものの、卒業論文の締め切りが近いことを自分自身への言い訳に参加申し込みをしませんでした。同じアパートの友人が参加したので、深夜差入れをもって約40キロ地点の(阪神タイガースのキャンプ地で有名だった)安芸市まで行きました。がんばっている友人や他の学生の姿を目の当たりにして、逃げた自分が恥ずかしくなり、衝動的にそこから歩きました。深夜0時過ぎのことだったと思います。ゴールの室戸岬の中岡慎太郎像付近に着いたのがお昼前。その時の光景は今でも思い出すことがあります。なぜか道中水戸黄門を口ずさんでいました。しかし、思い出すたびにこみ上げてくるのは、なぜスタート地点に立たなかったのかという、逃げた自分への後悔の念です。

その後教員になり母校の女子ソフトテニス部顧問となったある年、地元で鳥取県の大山寺から一夜にして平田の鰐淵寺まで弁慶が釣鐘を運んだという伝説をもとにした弁慶ウォークというイベントが開催されました。夜出発して寝ずに歩き通し、翌日夕方頃までかかる100キロの道程です。今度は逃げずにスタートラインに立とうと、女子部員も誘って申し込みをしました。日本海テレビが日テレ24時間テレビとタイアップして、女子ソフトテニス部を24時間追い続けることになり、途中途中でインタビューをされることになりました。ある意味背水の陣です。しかし…約90キロ地点の自宅付近で足が動かなくなりリタイヤしました。途中途中でインタビューは24時間テレビの番組中に生放送されたものの、翌日ニュースで放映された総集編では、顧問は最初からいなかった設定で編集されていました。ちなみに、女子部員は全員完歩。あと2時間ほどががんばれませんでした…。

翌年再挑戦しましたが、テレビ中継もなく部員も誘わず張りがなかったからか、平田どころか東出雲でリタイヤ。これで3回連続自分に負けたことになりました。このイベントはその後大人や学生がサポートして体育館等に泊まりながら歩く小学生向けのイベントになりました。それに長女が参加し、見事完歩しました。完歩したものだけが見せる表情に、自分の弱さを重ね合わせ、いつか克服したいと思いつけ50歳を迎えた時に転機がありました。

隠岐養護学校では、隠岐の島ウルトラマラソンの壮行式をします。学校には大きな隠岐の島の地図が掲示され、スタート地点に出場する教職員の顔写真が貼られます。さらにボランティアとして参加する生徒たちや教職員の顔写真も担当する給水地点に貼られます。隠岐の島ウルトラマラソンでは、小中学生や隠岐養護学校の生徒たちが割り当てられたランナーに激励の手紙を書き、それが参加証と一緒に送られます。お礼の手紙を送ってきたり、学校にお礼に言いに来たりするランナーもいます。そんな手紙や光景が地図に花を添えます。

私は、その地図の縮小版をつくり、ポケットに忍ばせて50キロ走りました。「あの給水所にはあの生徒がいる。そこまでは走らないと…」そんな連続で気づいたらゴールしていました。その時から走る時はいつも「克己」と大きく文字の入ったTシャツを着て走っています。ゴールした瞬間、それはやっと己に克てた瞬間でした。ウルトラマラソン完走者に贈られるメダルは毎回色が違い、7回完走すると虹色レインボーとなります。50キロをあと3回、通算7回完走してレインボーメダルになったら、次は未知の100キロの道程に挑戦したいと思っています。



○花火

新潟県長岡市の花火大会の風景⇒

毎年8月初旬に開催される長岡の大花火大会が2年連続中止となりました。そもそも花火は慰霊や疫病退散が目的の催事だったことを思うと、コロナ禍にあって、それすらできないことが残念でなりません。ですが、夏に三刀屋高校の校地内を打ち上げ場所に花火大会が開催されることになりそうです。秋には研修旅行や受験旅行に普通に行けることを願うばかりです。



ちなみに写真の長岡の大花火大会をまだ観に行ったことはありません。長岡駅を降りたところにあるアオーレ長岡シアターの3D映像で観て、花火大会を観た気になったのが6年ほど前のことです。そもそも長岡に行った目的は、雁木の街並みと山本五十六記念館や山本五十六の生家を訪ねることでした。

山本五十六は、米100俵の話で有名な長岡の地で生まれた、真珠湾攻撃を計画した旧日本海軍連合艦隊司令長官であった軍人です。10年ほど前の映画では、役所広司が演じました。

米100俵の話とは、戊辰戦争で薩長連合軍に大敗した長岡藩の人たちが、食べるものにも困っているのを見かねた他藩から義援米として送られた米100俵を、「どんな苦境にあっても教育をおろそかにできない」として学校設立にあてた話です。長岡藩の生活信条で、山本五十六の座右の銘であった「常在戦場」。この言葉は、日頃から無駄を省き蓄財に心がける気風、創意工夫と斬新な行動をする気質をつくったと言われています。その精神が米100俵の精神につながっているのだと思います。気風をつくる言葉、福島県の会津若松藩で言えば、「一、卑怯な振舞をしてはなりません。一、弱い者をいじめてはなりません…ならぬことはならぬものです」などで有名な什(じゅう)の掟でしょうか。雲南で言えば、永井隆博士の言葉、「如己愛人」でしょうか…

さて、山本五十六は、父親が56歳の時に六男として生まれました。私が高56歳ということもあり、あらためて彼の著書を紐解いてみました。彼は多くの言葉を残しています。その中でも特に有名なのが次の言葉です。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、誉めてやらねば、人は動かじ」

人材育成(教育)として、「まずは先生・リーダーがやってみせる。次は説明して理解させる。そしてやらせてみる。そこでできたことはきちんとほめる。そうでないと人は動かない。」という考え方です。ただし、ほめるというのは、おだてるということではなく、共に成功や成長を喜ぶということです。

これには続きがあり、「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。」

「やっている姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」

あさって7月7日は七夕です。日本史では、この日を日中戦争のはじまりとなる盧溝橋事件の日として教えます。5月9日の国恥記念日や9月18日の満州事変勃発の日など、加害者となった歴史的な日を覚えている日本人は多くないと思います。今から10年以上前に盧溝橋に行ったことがあります。今は平和な風景の中にあるその橋で、旧日本軍が起こした事件を発端に多くの人々が亡くなったことに思うと身につまされました。

平和を愛した永井隆博士ゆかりの地にある高校の生徒として、平和の意味をあらためて考えてみる夏にしてもらいたいと思っています。8月9日が長崎に原爆が投下された日です。

平和が続いた江戸時代に、火薬の平和の使い道として発達した花火。山本五十六のふるさと長岡で花火大会が開かれていることは、決して偶然ではないと考えています。海軍軍縮条約締結への努力など、軍人の立場で世界平和と日本の安全に働いた人との解釈もされている人だからです。…「この身滅すべし。この志(平和の希求)奪うべからず。」…反対することで命を狙われたとしても三国同盟に反対するという彼の覚悟を書いた決意文の言葉です。「人間は自己の力ですべてをやらねばならぬ、人にたよってはならぬ。」…



○終業式(本校・分校では話を一部変えています。) アスバルに設置されたボランティアセンター⇒

このたびの豪雨により被災されたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。未だ不便な生活をしているご家庭もあると承知しています。一日も早い復旧を願うとともに、一人一人ができることで協力できればと思っています。学校としては、今回のことを教訓として活かしていくとともに、一日でも早く通常の学校生活が取り戻せるようつとめていきます。また、そのために全教職員、全校生徒が協力し合っていければと思っています。



大雨の翌日は本校・分校とも休校でしたが、野球部の寮生たちが、ボランティアで被災した住宅の片付けにあたったというニュースがNHKで放送されました。このニュースを見て、本校校歌の一節「われらの三高ここにありと。ひとしくともに誇るべし。」の気持ちになった人もいます。JRC部も募金を始めました。ボランティアセンターを通じて活動した生徒もいます。こうした行動は、生徒一人一人が普段から行動したり、思ったり、感じたりしていることの延長線上にあり、保護者はもちろん、学校関係者や地域の方々への感謝の気持ちを持ちながら学業や諸活動に取り組み、その活動や元気のいい挨拶で町を明るくする本校・分校生徒を代表しての行動であったと思っています。昨年度も部活動単位や個人で地域のボランティアに従事していたと聞いています。

今回ふと10年ほど前に勤務していた学校での出来事を思い出しました。1月の大雪となったある日の早朝、学校に行くど何人かの生徒達が昇降口やそこまでの坂道の雪かきをしていました。当時3年学年主任をしていたのですが、よく見るとそれは推薦で合格した生徒達でした。「これからセンター試験に向かう仲間のためにできることを考えた結果、本番前にケガをしないようにと思って誘い合ってきました。」と話してくれました。この年、後期日程の直前に東日本大震災が起きました。その翌日多くの3年生が、卒業式後にもかかわらず学校に来て、「後期日程を受けられるかどうかかわからず不安な仲間のためにできることはほとんどないが、街頭に出て募金活動することで誰かの力になりたい」と言ってきました。雨の中、急ごしらえの募金箱を持って町に出て行った生徒達の姿を思い出します。ちなみに、この年の進学成績は最終的に近年にない良いものでした。

こうした行動は、昨年香港の民主化運動で有名になった「水になれ」という言葉のような行動でした。みんなが水のように一体となって、それぞれがかかわるがわるリーダーになる主体的行動者の集団と理解しています。

ボランティアには目の前の人のためのもの、献血や募金のように見知らぬ誰かのためのもの、また未来の人のためのものなどがあります。それは「恩送り」となって広がっていきます。

ドラゴン桜を観た人もいます。ドラマの中で、桜木先生が、東大入試に出題された問題を例に、自分中心的な視点しかない人間は東大では求めていないと明言していました。広い視野を持って多角的な視点から物事を考えることは、他者を大事にすることにも通じているということだと思います。ドラマでは、自己中心的ですぐ人を見下した言動をするある生徒が、入試本番の大事な場面で、友人を助けて右手をけがしてしまい、そのことが原因の一つとなり不合格になりました。桜木先生はその生徒に、そして生徒自身も絶対に来年は合格する、できると断言していました。ドラマ全体でも東大入試に挑む生徒達が、チームとなって支え合う場面が何度も出てきます。桜木先生は、何のために東大に行くのかも幾度となく問いかけていました。

まずは一步を踏み出す、挑戦する勇気。そして助け合いや他者を気遣う意識を持つこと。なにより自分自身が確かな、大きな志を持つことができれば、夢の実現も自ずと見えてくるということではないでしょうか。

「小さな挑戦、小さな善行、確かな(大きな)志」の意味もそこにあります。

3年生にとっては就職、進学に向けて大事な夏です。1,2年生にとっても学業、部活動などで主体性を身につけいく大事な時期です。有意義な夏休みにしてください。



○長崎と永井隆博士

長崎女子高の龍踊部の演舞⇒

新型コロナウイルス感染症が全国的に拡大する前の最後の旅行先が長崎でした。この年、勤務していた教育センターの全国大会が長崎であったので、約25年前に友人の結婚式で訪れて以来久しぶりに2度も訪れました。



全国大会のレセプションでは、長崎女子高の龍踊部の舞が披露されました。長崎くちの龍踊りに、女子が舞うことへの異論もある中、熱心な取り組みからやがて地域から認められた伝統芸能を伝える部活動で、今は一番部員数が多いそうです。



ちなみに友人の結婚式は、友人がカトリック信者であったので、平和公園からほど近い浦上天主堂(右写真)でありました。司祭が執り行い、聖歌隊も登場するなど、めったに経験できない式でした。



観光で修学旅行生等が行くのは、グラバー園の入り口近くにある

国宝の大浦天主堂(左写真)です。幕末の開港にともない建設されました。隠れキリシタン達が信仰の告白をプティジャン神父にしたことで、彼らが江戸時代に信仰を続けていたこと

がわかった有名な教会です。開国後もキリスト教は禁止され、明治初期まで信仰は犯罪行為でした。ちなみに、遠藤周作の著書で映画化もされた『沈黙』は、島原の乱後の長崎での激しいキリシタン弾圧を描いています。

知っての通り、キリスト教はフランシスコ・ザビエルによって1549年に日本に伝わりました。山口市と鹿児島市にザビエル(記念)聖堂があります。残念ながら、山口市の聖堂は30年前に焼失して、その後再建されました。

浦上天主堂は、爆心地に近いことから、原爆で倒壊し、戦後再建されたものです。塔の部分が吹き飛び、そばを流れる小川に残ったままになっています。そこから再建後の浦上天主堂を見上げると、いかに爆風がすさまじいものだったかわかります。恒久平和と隣人愛の精神を発信し続けた永井隆博士の手記「長崎の鐘」は、古関裕而により歌になりましたが、そのモチーフになった鐘がそこから掘り起こされた浦上天主堂の鐘です。原爆の直撃を受けましたが、再建後の塔に戻され、今も荘厳な音を響かせています。

昔友人が浦上天主堂にほど近い公園で話したことが今でも忘れません。「ここが公園になっているのは、原爆で亡くなった方を荼毘に付したからで、住宅地にはできない。」というものです。永井隆博士の病室兼書斎である「如己堂」は、この近くだったと思います。三刀屋の永井隆記念館には複製された如己堂があります。

浦上天主堂の凄惨な歴史は、原爆だけではありません。明治初期の浦上四番崩れもその一つです。浦上四番崩れとは、江戸末期から明治時代初期にかけて起きた大規模な隠れキリシタンの摘発事件です。明治政府は、浦上信徒らを、津和野藩や萩藩に配流にし、各藩では信仰を捨てさせるために激しい拷問が行われました。浦上天主堂の境内の一角には、毛利氏の山口県萩藩に配流された信徒らが正座させられ、棄教を迫られた「拷問石」が置かれています。亀井氏の津和野藩には、153名のキリシタンが送り込まれて迫害され、激しい拷問の末36名の信徒が殉教、つまり亡くなりました。身動き取れないほど小さな「三尺牢(ろう)」に閉じ込めたり、氷の張った池に投げ込んだりする激しい拷問が行われましたが、このことを描いた小説が、永井隆博士の絶筆となった『乙女坂』です。カトリック津和野教会には、永井隆博士の原稿が展示されています。また、拷問を受けた場所には乙女坂マリア聖堂が建てられており、壁画には迫害の場面が描かれています。

研修旅行などを通じて永井隆博士の足跡に触れ、平和について考えることができればと思っています。



○始業式講話抜粋 「3K(感動・感謝・気遣い)」 日野原先生著書⇒

短い夏休みが終わり、2学期が始まりました。節目としての心と頭の整理が十分にできましたでしょうか。気持ちを引き締めて、2学期をスタートしてほしいと思います。今日は、私の印象に残っている言葉を2つ紹介します。

一つ目は、ある数学の先生の言葉、

「1の365乗は1 0.99の365乗は0.026 1.01の365乗は37.78」です。

普通のことを365日やっても同じ。ほんの少しなまけ続けると大きな損失になり、ほんの少しのがんばりを続けると大きな成果がある、という事でしょうか。もちろん日々コツコツと続けることは大切です。言われたことをきちんとやり切ることも当たり前のことです。日々、少し工夫して、少し自分の殻を破って努力すると大きな違いとなるということです。主体的であることも大事。それが、合い言葉である「**小さな挑戦**」に込めた意味の一つです。

二つ目の言葉は、日野原重明先生の言葉です。先生は105歳で亡くなるまで生涯現役の内科医として診療にあたられただけでなく、100歳を過ぎても年間100回以上の講演や小学校で「いのちの授業」をされ、多くの本も執筆されました。ここではある小学校での「いのちの授業」での言葉を紹介します。

命はどこにありますか？ 心臓ではありません。心臓は大切な臓器だけど血液を送るポンプで命ではありません。命は感じるもので、目には見えません。目に見えないもので大切なものはたくさんあります。空気、酸素、愛情、思いやり…本当に大切なものは目に見えません。命は君たちが持っている時間です。死んだら自分で使える時間もなくなってしまいます。一度しかない自分の時間、命をどのように使うかしっかり考えながら生きてほしい。さらに、その命を自分以外の何かのために使うことを学んでほしい。

この言葉を聞いて何を感じ、何を思いましたか。

自分の命、与えられた時間を大切にしているかあらためて考えてみてください。

そして自分が自分以外の命、時間のために何ができるかも併せて考えてみてください。それは小さな思いやり、気遣いでもいいのです。気持ちが大事です。それが「**小さな善行**」に込めた意味の一つでもあります。

人は、誇り高くないと人に助けを求めないと聞いたことがあります。誇り高いというのは、弱い部分がないという意味ではなく、「**確かな(大きな)志**」を胸に、弱い部分を隠さず、そのことを課題として努力できることだと思っています。弱い部分を隠すうちはそのことを自分自身が受け入れていないので、努力をおこたりがちになり、また自己中心的にもなりがちです。できないことを人のせいにすることもあります。そこでは感謝や気遣いの気持ちが薄れがちです。ちなみに、弱い部分を各自が認識し、安心して見せ合える集団では、互いが励まし助け合うので、いじめもないと思います。それはチームとしても、個人としても成長する集団です。

池江選手の復帰、オリンピックでの泳ぎに感動したことは記憶に新しいところです。池江選手が闘病のつらさを発信できたのは、彼女には確かで大きな志があったからだと思っています。自暴自棄にならず、闘い努力するとともに、助けや支援を素直に求められる人だからだと思っています。活躍する選手ほど、インタビューで感謝の言葉を述べます。出した結果が、決して自分だけの力や努力で達成できたものではないと心から思っているからだと思っています。オリンピックの野球の日本代表は、観客のいないスタンドに向かって並んで一礼しました。

感動、感謝、気遣いの3Kはセットのような気がします。

2学期は、勉強や部活動、学校行事などに集中して取り組むことができる学期です。全員が3Kと三高(掛高)プライドを胸に全力で走りましょう！皆さんの飛躍と成長を願って始業式の話とします。





○風呂敷

風呂敷のイメージ⇒

長崎の浦上天主堂で結婚式に参列したことがあると18号で触れました。この結婚式での浦上天主堂の司祭のお話しがとても心に残ったので今回紹介します。

お話のテーマは風呂敷でした。風呂敷を日常生活の中で目にするのはあまりなくなりました。簡単に表現すると巨大なハンカチのようなもので、物を包み持ち運んだりするためのものです。泥棒のイメージというと、盗んだものを唐草模様の風呂敷に包み背中を背負っている泥棒という人もいます。



話は、夫婦円満の秘訣でした。要旨は次の通りです。

「心というものは、その時々感情によって、いろんな形となります。怒りであれば□や△、とげとげた形、岩のような形。幸せであれば○。弱いときにはスライムのように形にならないこともあります。一方の気持ちが△で、片方の気持ちが○であれば、合わせた時に隙間ができます。いくら大きな○の気持ちで、沈んでいる△の気持ちを包んでも、隙間はいっぱいできます。そうすると、その隙間がわかってもらえていない感情となり、イライラしてくるものです。そんな時に、風呂敷のような心で包み込めば、相手がどんな形の心であっても隙間はできません。また、相手の気持ちやぬくもりが直接伝わってきます。」

ではどうやったら風呂敷のような心を持てるのでしょうか。その話はされたけど覚えていないのか、されなかったか残念ながら記憶がありません。

結婚式での話ではないですが、関連して山嵐の抱擁(「ヤマアラシのジレンマ」)という話があります。

「二匹のヤマアラシが体を温めようとして近づくと、とげで傷つけ合ってしまう。離れると寒い。ヤマアラシは結局、傷つかなくてすむ、互いにいちばん近い所に落ち着く。」というものです。

人間も同じではないでしょうか。互いに、それ以上は踏み込んではいけない領域があります。それを認め合うことから、真の協調関係・信頼関係が生まれます。夫婦関係に置き換えれば、いつも風呂敷の気持ちで、それを上から目線で相手を包み込んであげようと思うとうまいかないこともあるのではないのでしょうか。

風呂敷の心とは、あくまでもお互いが対等の関係であり、相手にあわせて自分の心や接する態度を、相手を気遣って変えていくことが大事で、その上で優しく包みこむ気持ちを持つことだと今は思っています。

そう言えば、小説「坊ちゃん」に、昔の三刀屋高校と同じ旧制中学の数学教師の山嵐が出てきます。正義派で、坊ちゃんに協力してずるがしこい教頭の赤シャツ、同僚の野だいこをこらしめます。この山嵐のネーミングは、坊ちゃんとの心理的距離を表現したものかもしれません…。(実際は柔道の技に由来しているようです。)

ちなみに、風呂敷に少々の穴があったとしても、よほど小さな物でなければ風呂敷からこぼれることはありません。ですが、人は風呂敷やハンカチに穴があれば捨ててしまいます。補修して使うとか、気にせず使うことはほとんどありません。でも、機能の面ではほとんど問題はないはず。これを人にたとえると、それが短所だったりすれば穴ばかりが気になります。「その穴すてきだね」というような人はあまりいません。ですが、短所は長所と表裏一体です。「決断が遅い」という短所も、「じっくり考えることができる」と置き換えれば長所です。そのようにお互いを見ることができるかどうかだと思います。

風呂敷のような心を持つにはどうしたらよいか未だに自分自身の答えは見つかっていませんが、まずは相手をしっかり評価し認めることが大事だと考えています。「よくがんばったね」とよく言います。でも「よく」は抽象的で、相手はその基準がわからず、「いい加減に評価された」ととらえることもあります。具体的に評価することが大事だと思います。そう言いながら、「今日の料理はおいしかった」すら言っていないことを反省する日々です…。



○胸突き八丁

富士山9合目付近から頂上を望む⇒

人にとって何かを成し遂げる経験は大事です。児童虐待に遭った子ども達は、「安全感の欠如」や「無力感」に悩まされ続けると言います。児童虐待における「無力感」とは、服従が強要されたことにより、自分のことが自分で決められず、そのため無気力となり、課題に向き合おうとしない、あるいはできない姿だと聞いたことがあります。

だから、虐待に遭った子ども達にとって、小さな挑戦はとても大事です。大人から見れば小さな挑戦であっても、主体的であれば、それを成し遂げることは本人にとってはとても大きなできごとです。この世界で生きていけるという自信を持つことにもつながり、無力感からの離脱につながります。

合い言葉である「小さな挑戦」には、「小さな達成感」の積み重ねが自信につながるという意味があります。

「無力感」は、誰でも感じるものです。それは失敗や挫折から来るものであり、どうせだめだからという気持ちを持つことから生まれます。多くの矛盾や失敗・挫折と付き合いながら、その中で自分を鍛えていく力が「自己教育力」ですが、それには自己肯定感が土台にないといけません。たとえ小さな挑戦であっても、成功体験の積み重ねにより自己肯定感を培っていくことが大事です。小さな達成感の積み重ねが大事なのです。

例えば、「いつも2時間しか勉強しないけど、今日から10分長くやってみよう」という小さな挑戦をし、積み重ね、少しずつ増やしていくことです。とかく「3時間しよう」と思って3日坊主になり、挫折感だけが残りがちです。

2年前に富士山に登りました。高山病予防のためにも、5合目で酸素の薄さに2時間ほど体を十分に慣らしてから登るのが良いと聞いていましたが、それを守らず30分ほどで登り始めました。その日は3,250Mの8合目付近の山小屋で1泊しましたが、すでに軽度の高山病を発症し、激しい頭痛に悩まされていました。高山病とは、標高2000m(高齢者は1500m)以上の高地で、軽度であれば頭痛に加えて、食欲低下、倦怠感、めまい、何度目目が覚めるなどの睡眠障がいなどが起こる病です。頭痛で何度も目が覚めるたびに、登頂はここで断念して下山する気持ちが固まっていきました。夜、山小屋から眺めた眼下に小さく見える湖上の花火。早朝、山小屋から見た神秘的なご来光。それで十分な気持ちになっていました。その気持ちを払拭したのが、ポカリでした。ポカリが高山病の症状改善に良いと山小屋にいた登山者から教えてもらい、1本500円という高い500mlのポカリを買って飲んだら、頭痛が少し緩和されました。そこで気持ちが前向きになり、8合目まで登ったことが自信の気持ちに変わり、決意を新たに頂上に向けて登り始めました。通常2時間で山頂に着くらしいのですが、「胸突き八丁」と呼ばれる9合目付近まで2時間、そこから山頂までさらに2時間、合計4時間と、通常の2倍もかかりました。9合目までは体力の限界と体調との闘い、9合目からは精神的な限界との闘いでした。

9合目付近から山頂までは、かなりの急斜面で、最後の難関となります。富士登山では、頂上まで残り8丁(約872メートル[1丁は109m])の、胸を突かれたように息が乱れる険しい急斜面が続く道のことを「胸突き八丁」と言います。そこから転じて、「胸突き八丁」が、物事を成し遂げる過程で、いちばん苦しいところという意味にもなったそうです。物事の一番苦しい時、正念場を指す時に、この「胸突き八丁」という言葉が使われます。

いろんな挑戦をする中で、最後の1～2割は違う質のものが待っています。挫折の多くはこの正念場でおきます。富士登山で言えば「胸突き八丁」です。途中休憩所もトイレもありません。それを乗り越えられたのは、8合目まで登れた自信。登頂を断念しようかどうか葛藤しながらも、踏ん張って9合目まで登れた自信。登山者同士の励まし。そして山頂にたどり着いた者しか味わえない景色を見たいという気持ちが、背中を押してくれました。

いよいよ就職試験や受験が本格化していきます。それぞれの胸突き八丁を乗り越えてくれると信じています。

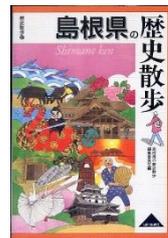




○石見銀山と温泉津の歴史

このところ原稿依頼も多く、また前回22号は教職員向けでホームページ等でも掲載をしていなかったのが、久しぶりに校長室だよりを書くような気持ちになっているところです。

今回は、10月に本校2年生の研修旅行で行くことになっている石見銀山と、石見銀山からの銀の積み出し港となっていた温泉津について、少し専門的に紹介したいと思います。先日研修旅行の事前学習で関連資料を生徒に配付した時に少したけ石見銀山の歴史について話す機会がありましたが、その続編です。



1552年頃と推定される書状に、石見銀山に「市町見世棚」の存在が確認できます。つまり、石見銀山は町として見世棚、つまり商店が立ち並び、市が開かれるほど賑わっていたことがこの書状から窺えます。

石見銀山の開発がはじまったのが1526年頃で、いわゆる灰吹法とよばれる精錬技術により銀が増産されるようになったのは1533年頃です。その後、山口の大内氏、出雲の尼子氏、川本の小笠原氏が銀山をめぐる争奪戦を繰り広げたのち、最終的には毛利氏が石見銀山を直轄地としたのが1562年です。その後豊臣秀吉が毛利氏を服属したのが1584年のことです。この頃には、世界的にも石見銀山の銀が有名になっています。町の賑わいは、銀山の開発と比例して、争奪戦を戦国大名が繰り広げる中でも進んでいたと推察されます。それだけ、人や物が集まる場所であったのでしょう。人口は最大で20万人とも伝わります。今は400人ほどです。

毛利氏にとって、石見の制圧は、石見銀山奪取と邇摩郡制圧(積み出し港としての鞆ヶ浦や温泉津の支配)の意味で最重要であったことは言うまでもありません。毛利氏の石見制圧は1556年頃からで、毛利氏の家臣が銀山に出かけた記録も残るので、石見銀山を一旦は支配下に治めたと思われます。翌年には海上から温泉津へも進出しています。毛利方の吉川経安に、川本の小笠原氏攻めがうまくいけば、恩賞として与える所領が確定するまで、温泉津での船の通航料収入の一部を当面与えるとした記録が残っています。当時すでに積出港として発展しており、船の通航料収入もかなりであったと推察されます。

しかし、その後石見銀山を再び尼子方が奪取して、本庄常光が山吹城主となりました。しかし、その後本庄常光が尼子方から離反した結果、石見国制圧が6年余を費やして終わりました。そのため直轄領となったのが1562年です。毛利氏はその後雲南を通り出雲に侵攻し、尼子氏を攻め1566年に滅亡させています。

温泉津は、石見で唯一の毛利氏が直轄する関所であることも古文書等から確認できます。1565年には、石見から出雲へ兵糧米輸送をする船に対し、温泉津での通航料免除を認め、そのことを温泉津奉行人に伝えています。温泉津奉行が、温泉津に入港する船の通航管理や勤過料徴収に関与していたことがわかるもので、毛利氏がこの頃には温泉津に奉行を置いて、港湾支配を進めていたことがわかります。

温泉津の町には、仙崎屋、木津屋、小問氏などの商人がいたこともわかっています。仙崎屋は遠隔地貿易も手掛け、木津屋は温泉津奉行に大金を貸すほどの力を持ち、小問氏は問丸(運送業・倉庫業などを手がける業者)も営んでいました。細川幽斎(その子細川忠興が明智光秀の娘ガラシャと結婚)が、1587年に温泉津へ立ち寄り宿泊した時の様子が、信憑性は疑わしいものの史料として残されています。この時細川幽斎と歓談した温泉津商人として、油屋・蕨屋・奈良屋・木村屋・高津屋など多くの商人が記されています。

長篠の戦いがあった1575年に薩摩の戦国大名であった島津家久一行が京からの帰りにわざわざ日本海ルートを進み、温泉津に立ち寄った時にも、そうした豪商のいる港町としての一端が窺えます。彼の残した日記「家久公上京日記」には、温泉に入ったとか、芸能集団(お国歌舞伎の原形とも言われる)が来ていたので見物したとか、旅館に宿泊したことが記述されていて、多数の船が来て栄えた温泉津の賑わいが窺えます。

生徒に配布した資料には、石見銀山やその積み出し港である温泉津が栄えていたという歴史の事実が淡々と書かれていますが、その根拠となっているのはこうした古文書(書状)からわかる当時の状況を積み上げていながらわかってきた事実です。歴史は、覚えるものでなく、その事実から何を学び今に生かすかを、研修旅行を通じて考えてもらうことで、ふるさとの歴史や地域の課題や現状にも思いをはせてもらいたいものです。



○ ユリノキとヒマラヤスギにメタセコイア

“故郷の「学校の木」巡り”という島根日々新聞の連載記事で、掛合分校の「メタセコイア」が平成30年6月7日の117回で、三刀屋高校の「ユリノキとヒマラヤスギ」が同年6月14日の118回で紹介されました。たまたまこの連載記事の著者が私の叔父と言うことも単なる偶然ではないのかなと感じているところです。



校長室にある『掛合町誌』をめくってみると、掛合町が高校設置運動をはじめたのが1952(昭和27)年の秋頃で、設置認可が翌年の春。開校式、入学式は同年5月1日で、農業科、家庭科合わせて26名の入学があったと書かれています。旧掛合中学校の教室を仮校舎としていたため、創設当時の校舎の写真にはメタセコイアは写っていません。

『掛合町誌』には、1984(昭和59)年頃の現在の分校校舎の写真も並んで掲載されていますが、そこにはすでに大きく成長したヒマラヤスギと3本のメタセコイアが確認できます。現在の校舎が完成したのが1957(昭和32)年1月で、第1回の卒業式が新築の独立校舎で挙げてきたことは大きな喜びであったと町誌には書かれています。それもそのはずで、「校舎建築に先だち、町の財政に余裕がなく、県からの支出も望めず、建設費の財源をどうするかが問題となったが、町民が農協へ貯金し、農協が町に貸し付ける方法で工面した」と『創立十周年記念誌』に書かれているように、地元の高校に対する熱意はひとかたならぬものがあり、教材や教具などは他校に先がけて準備されたと記念誌に書かれているほどで、地元にとって悲願の校舎完成だったとわかります。『創立三十周年記念誌』には、完成したばかりの新校舎の写真が掲載されていますが、まだ植えたばかりの人の背丈くらいのヒマラヤスギとメタセコイアが、よく見ると確認できます。校舎完成を喜ぶ地元民によって植えられた、と連載記事では紹介しています。

一方、三刀屋高校の木は、旧正門を固めるように対で立っているヒマラヤスギと、記念館「蒼雲館」の西側に高さ15メートルを超えるユリノキがシンボルツリーとして紹介されています。先述したように、ヒマラヤスギは、掛合分校にも1本だけ植えられています。ちなみに、旧正門の門柱一対には、自然石ではありませんが大理石の銘板があり、その上にあるレリーフにはどこかしら欧風的なものを感じます。旧木造校舎で唯一残っている記念館「蒼雲館」にも同じことを感じます。昔でいうハイカラな学校という印象がしたのは私だけでしょうか。

連載記事では、「三刀屋の川の水清く 夜昼流れやまぬごと 疲れず倦まず励まし 我が雲南の健男児」と歌われる昭和3年に制定された旧制三刀屋中学校の校歌を冒頭で紹介しています。これは、「倦(う)むことなく、つまり嫌にならず 勉強せよと教え導くために、幾千年も流れを止めず、ふるさとを生き育てた母なる清流に人の歩むべき姿がある」という意味だと紹介していますが、『三刀屋高等学校五十年史』にもそのように書かれています。この記念史には、「旧校舎・玄関付近」の写真があります。同じ写真は、三刀屋高校ホームページにリンク(バナー)がある卒業生会である雲南会のホームページでも見ることができます。その写真には、すでに成長したユリノキが確認できることから、当時の校舎が完成した大正末期にはすでに植えられていたと推察されますが、記念史等からはそうした記載や記録が確認できませんでした。

ユリノキは耐寒性のある落葉高木で、花言葉は「幸福」。ヒマラヤスギは、マツ科の常緑高木で、花言葉は「たくましさ」です。メタセコイアは、「平和」や「楽しい思い出」という花言葉がある、ヒノキ科(またはスギ科)の落葉樹です。

三刀屋高校は、2024年に100周年を、掛合分校は2023年に70周年を迎えます。創立記念事業を通して、これまでの歴史と伝統の重みを感じ、その誇りを力に変えていくとともに、地域とともにある学校であることを再認識したいと思います。



○400人の町で生まれた企業

→ 石見銀山の間歩

千葉望著『500人の町で生まれた世界企業 義肢装具メーカー「中村ブレイス」の仕事』(2009年)を参考にタイトルをつけてみました。今の人口は400人ほどです。

大田市大森町には、中村ブレイス株式会社の他に、ライフスタイルブランド群言堂(運営:株式会社石見銀山生活文化研究所)が本拠を置いています。“手しごと”による「まごころ」を顧客に届ける会社、町の活性化とCSR(企業の社会的責任)を強く意識した会社だと共通して感じています。世界遺産石見銀山を訪れる観光客のために会社が取り組んでおられる清掃活動からもそのことが窺えます。

中村ブレイスの創業者で現会長の中村俊郎氏、株式会社石見銀山生活文化研究所の創業者で社長の松場登美氏の講演を聴いたことがあります。今回、2年生の研修旅行で大森町に行くこともあり、印象に残ったことを紹介します。

中村氏は、働きながら苦学して短大の通信制課程を卒業。その後アメリカの義肢装具メーカーや病院で2年半の経験を積んだあと帰国し、Uターンでふるさと大森町に中村ブレイスを起業されたのが1974年、26歳の時。「ブレイス(brace)」は、装具という意味ですが、支える、補強するという意味もあります。講演では、整形外科と連携した仕事のため、3時間かけて鳥取大学医学部などがある米子に幾度となく行き営業をかけて仕事を請け負った話や島根県教育委員会委員長を務められた時も松江に何度も足を運んだ話をされました。拠点を大森に置いたからこそかかる時間と労力ですが、それでも過疎化が進む大森を盛り上げたいと拠点を移されなかったことが印象に残りました。特に印象に残ったのが、障がいがある子どもなどのためにアジアの各地を飛び回って義肢装具をつくられた話です。フィリピンでは現地の職人と協力して、竹細工の義足を開発し、日本で数十万円かかる義足を1万円もかからない値段で提供できるようにされたそうです。一時的に援助して終わりのような国際援助でなく、その後のSDGsにつながるものでした。その中で、人(社員)を育てることの大切さ。障がいがある方のための研究や工夫への努力を怠らないこと。だから患者・顧客にとことん寄り添う気持ちの大切さを学びました。慈善事業ではないので、利益も出さないとはいけません。そのために、シリコン樹脂製の足底板(シリコン)の開発を手がけ、特許申請、製造販売まで行きつく苦労話もされました。講演では、受講者全員に、ご自身の著書である『コンビニもない町の義肢メーカーに届く感謝の手紙 ～誰かのために働くということ～』が無料で配布されました。本のタイトルにあるように、講演でも感謝の手紙が紹介されました。地雷で片足を失ったアフガニスタンの少女のために義足をつくる話が描かれた2009年の映画「アイラブ・ピース」の撮影エピソードにも心が熱くなりました。

松場氏は、ご主人のUターンを機に大森町に来られた1981年に布小物の製造・販売を始められ、今では東京駅近くにショップを出されるほどに会社を育てられました。「群言堂」の反対は「一言堂」。一言堂には、人の意見を聞かず独断で行ったり、討論の場で多くの人の言い分を取り入れず自分の一存で決めたりするやり方という意味があります。

講演では、これまでの経験で学んだ、あるいは肝に銘じてきた様々な言葉を紹介されました。「失敗のない人生は失敗」、「一生の計は今日にあり」、「売り上げ目標より継続目標」、「経済力より文化力」、「竹は根っこで他の竹と手を握り合って、各自がまっすぐ立っている」、「都会は効率で勝負し経済を優先するからこそ、田舎は非効率で勝負」、「ありがとうの反対はあたりまえ」、「優柔不断とは、やさしくやわらかく接して断らないという意味」、「損か得かでなく、やるかどうか」、「知識には限界はあるが、感性には限界はない」、「消費でなく自己投資、自分を満足させるものを買うことが大事」、「伝統は革新の結果」・・・などを書き留めていました。「ものさしで測れないものが、美、豊かさ、幸せ」が特に印象的でした。

大森町には、石見銀山工房むうあの彫刻家吉田正純氏も住んでおられます。私が初任で大田高校に1年ほど勤務した時の美術の先生で、とてもよくしてもらいました。中村ブレイス、群言堂には当時の生徒が就職したので昔から知っていた会社でした。大森町にはなにかしらの縁を感じているところです。2年生には研修旅行で、観光も含め、ふるさと活性化に取り組み、全国や世界を舞台に活動し社会貢献している会社や町の思いや空気を大森町で感じてもらいたいです。





○ 島根県×埼玉県高校生交流事業 → 島根県、埼玉県の県章

島根県の県章は、「中心から放射線状にのびる4つの円形が雲形を構成して、島根県の調和のある発展と躍進を象徴し、円形は、『マ』を4つ組み合わせたもので『シマ』と読まれ、県民の団結を表しています。昭和43年11月8日明治百年記念として制定されました。」と島根県のホームページ(引用:島根県/島根県のシンボル)で説明しています。



埼玉県は、「まが玉16個を円形にならべたもの。まが玉は、古代人が装飾品などとして大切にされたもの。埼玉県名の由来である「幸魂(さきみたま)」の『魂』は、『玉』の意味でもあり、まが玉は、埼玉県にゆかりの深いものとなっている。また、まが玉を円形に配置したデザインは、『太陽』『発展』『情熱』『力強さ』を表している。県旗は県章を白地に赤く染め抜いたもので、昭和39年9月1日に制定された。」と埼玉県のホームページ(引用:埼玉県/埼玉県章)で説明しています。



勾玉(まがたま)は、天皇が皇位継承する際に大きな意味を持つ三種の神器の一つ「八咫瓊勾玉(やさかにのまがたま)」としても有名で、島根県、特に出雲地方においては歴史上のシンボリックなものの一つであり、玉造温泉の地名の由来としても有名です。島根県の県章も見方によっては勾玉に見えなくはありません。

先日オンライン方式で始まった「島根県×埼玉県高校生交流事業」は、島根県教育委員会が埼玉県教育委員会と、平成30年に高等学校教育に関する連携協力協定を結んでいることから実現し、三刀屋高校他県内4校が参加しました。

ちなみに、令和2年1月には埼玉県立総合教育センターと島根県教育センターとの間でも、「教職員研修における連携に関する覚書」が結ばれています。この覚書を受け、教育センター相互で研修をオンライン視聴するなど様々な連携において動き出す予定でした。折しも調印直後に新型コロナウイルス感染症が出現、拡大していき、オンラインが授業でも必要な時代が一気にやってきました。調印時の埼玉県側の実務担当であったのが、現在の埼玉白楊高校の校長である黒田校長先生で、島根県側の実務担当が私でした。黒田校長先生とは、平成23年に埼玉であった全国規模の研究大会に参加した時や平成26年に行った埼玉県立総合教育センター視察の時にも関わりがあり、話がスムーズに心やすくてきたのはとても大きかったと思っています。今回は、そのつながりから黒田校長先生のお声かけもあって、三刀屋高校もこの交流に参加することになりました。こうした人との繋がりやご縁の大切さをあらためて感じているところです。実は、校長室に飾っている胡蝶蘭と県名と名前の入った扇子は、黒田校長先生からお祝いとして贈っていただいたものです。

ちなみに、今回交流した児玉白楊高校は、生物資源科、環境デザイン科、機械科、電子機械科の4科を有する専門学科の高校です。児玉高校は、室町中期に築城された城跡にあり、2001年に創立100周年を迎えた学校で、普通科の普通コースと体育コースがある学校です。オリンピック女子柔道で金メダルに輝いた新井千鶴選手の母校です。

研修旅行や部活動の遠征で県外に行くことは、今はほとんどありません。ですが、コロナ禍で、これまでに経験したことのない学校生活を送る高校生にとって、他県でも、首都圏にある埼玉県においても、前向きに頑張っている高校生がいることを互いに知ることは大きな意味があり、学びも大いにあると思います。その一つが視野の拡大、視点の多様化です。今回研修旅行で本校2年生が行った島根県立大での高須准教授の講演で、「身近な地域の問題を人は過小評価しがちである。しかし、世界は数え切れない地域で構成されている。問題や事象をみる時に、解像度や距離(問題のとらえ方や見方)を固定化せず、広い視野で多角的な視点をもって評価することが大事」と話されていました。しほね留学の目的の一つと同じで、他県の高校生と交流し、多様な考えに触れることは視野を広げることにもつながります。研修旅行では、石見銀山も訪れました。地域の歴史は、これまで「郷土史」としてお国自慢的に語られることがありました。今は、地域の歴史の評価を日本史全体の中で考察していく「地域史」が主流です。石見銀山がなぜ世界遺産になったのか、その意義が何かを考えることが契機となって、物事を広い視野から捉え直したり探究したりすることにつながればと思います。



校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第27号

令和3年11月12日



○ 善行

合い言葉

「小さな挑戦、小さな善行、確かな志 ～自立した大人となるために～」

大きな志

今年度からのスローガ的な学校合い言葉の中に、「小さな善行」というワードを入れています。先日開催された掛合分校の文化祭の生徒会企画クイズの中で、合い言葉を知っているかが問題として出題されました。言い回しが多少違っていることがあったとしても、おおむねみんなが正解だったことに嬉しさを感じました。言い回しの違いとは、「小さな善行、小さな挑戦・・・」という回答が多かったことです。他者への思いやり、気遣いのことが最初に思い出されることに、さらに嬉しく思いました。

10月31日、一畑薬師マラソンに参加しました。新型コロナ感染症拡大の影響もあり、こうした市民マラソン大会の多くが中止となっていたため、ほぼ2年ぶりの大会参加でした。大会の開催には、主催者をはじめ多くの方のご尽力があったと思います。当日は多くのボランティアの方が大会を支えておられ、前日の駅伝大会に出場した平田高校の選手達も手伝っていました。沿道の民家の方々も応援で盛り上げてくれました。

当日は、久しぶりの大会参加で張り切りすぎたこともあって、名物の1000段の階段登りが終わった直後足がつかない、足を引きずり歩きながらのゴールとなりました。それでも10キロの平坦コースの記録とほぼ変わらないタイムでのゴールでした。年齢を重ねても努力に比例して結果の出るマラソンの楽しさを再認識しました。

しんどさと痛さから、ゴール直後はうつむきながら歩き始めていたら、高校生ボランティアの生徒が「お疲れ様でした！」と大きな声でねぎらってくれ、ゼッケンについているタイムチップをはずしてくれました。そこではとなり、振り返ってゴールに向かって帽子をとって一礼しました。いつもゴール後は一礼するようにしているのですが完全に忘れていました。まだまだ意識しないと一礼すら忘れてしまうことに反省する日にもなりました。

男子ゴルフのアジア・パシフィックアマチュア選手権が11月初めにUAEでありました。日本の中島啓太(日体大3年)選手がプレーオフを制して優勝しましたが、優勝の歓喜に浸った直後、ゴルフコースにおかかって一礼したことに、「これぞ日本人」と称賛の声が現地です。私たちは、いつも誰かに支えられて、誰かとつながって生きていることを忘れてはいけないし、だからこそ他者への気遣いや思いやりはとても大事です。「感動、感謝、気遣い」の3Kをいつも意識したいとあらためて思ったところです。

あるテレビ番組で、「愛とは何ですか」と年配の方に聞いていました。ある方は、「最大限の思いやり」と答えていました。ちなみに、マザー・テレサが「愛の反対が無関心」と言ったことはあまりにも有名です。

富山県の日本海の浜辺を起点に北アルプス、中央アルプス、南アルプスの山々を走り抜け、静岡県の太平洋の浜辺まで全長415キロを8日以内に自らの足だけで駆け抜ける日本一過酷な隔年開催の「トランスジャパンアルプスレース(TJAR)」という山岳レースがあります。山々の中には剣岳も含まれています。剣岳は、明治時代に初登頂を争ったことが新田次郎の小説「剣岳 点の記」に描かれたことでも有名な登山自体が難しい山です。そんな山々を走り抜け完走するためには、睡眠も1日2時間程度です。その睡眠もテントで寝たり、道ばたに倒れ込むように寝たりするだけの睡眠です。そんな過酷なレースが今年開催され、テレビ放映もされました。選考会などがあり出場できるのはわずか30人ほどです。しかし、台風の影響で大会史上初めてレース中盤で中止となりました。中止の連絡をスタッフから受けた選手の一人は、2年間の準備と努力やレースの過酷さからか「なんで中止にするのか？」という不満の声を上げていました。しかし、トップを走る選手は違いました。「中止の理由は事故ですか？天候ですか？」が第一声。「天候(台風)です。」との回答に、「それなら良かった。」と答えたあと大会関係者への感謝の気持ちを述べていました。こんな状況下にあっても、またトップを走り一番しんどく悔しいはずなのに、最初に一緒に走る選手や大会関係者に気持ちが向くことに感動しました。



やさしい日本語

非常口をあらわしているピクトグラム⇒

土足厳禁。これを日本語があまりわからない外国人にわかりやすく伝えようと思うと何と伝えればいいでしょうか。避難所。これならどう伝えればいいでしょうか。ピクトグラムではどう表現されているのでしょうか…



先日、掛合交流センターで開催された「災害時外国人サポーター」養成研修に参加しました。災害が起きると、スマホを持っていないことが多いとき技能実習生をはじめ外国人住民の方は情報が届かなかったり、届いていても「難しい日本語」で意味がわからなかったりして困ることがあるそうです。このため、災害時外国人サポーターが避難所等に出向いて、情報を「やさしい日本語」にしたり、外国語に翻訳したり、困っていることを聞き取ったりされています。

災害時のボランティア(被災者支援)には、がれき撤去などニーズに応じた国籍を問わない支援と、言語等を支援する外国人支援とがあると今回の研修で認識しました。私たちは、ストック情報とフロー情報で、災害時の適切な行動判断につなげます。ストック情報とは、今まで得た知識や経験に加え訓練などで蓄積された情報です。フロー情報とは、災害時の危険情報やそれに伴う避難などの対応情報です。この両方の情報を使って、少しでも適切な行動につなげようとしています。それでもバイアスがかかってしまうことがあります。バイアスとは、例えば災害が生じ危険が身に迫っている状況下において、多くの人は何となく「自分は助かるだろう」と思ってしまうような先入観のことです。外国では避難訓練を日本のようにしない国もあるし、訓練を受けていても日本の災害に対応した訓練を受けていないこともあります。それに加えフロー情報がわからないと災害時の不安はとてつもなく大きくなります。

本研修は、日本語以外の言語が話せなくもよいとされていたので参加しました。その意味が研修を通じてわかりました。災害時、外国人にとっての3つの大きな壁がより高くなります。言葉の壁、こころの壁、制度の壁の3つです。外国人の母国語でなくても、やさしい日本語で伝えようとするのが、つまり言葉の壁を低くしようとするのが気遣いにつながり、こころの壁を低くすることになるとわかりました。研修で、避難所に外国人が避難していると仮定した模擬演習がありました。現在雲南市に来ておられる技能実習生の方に、困っていることを聞き取るものでした。講師の方からは、なによりも安心を届けてくださいと言われました。しかし、実際は質問攻めにしたかったです。「名前は何ですか?」「どこの国から来ましたか?」「避難所生活で困っていることはありますか?」…。まず自己紹介をすること。立っていたら椅子等に誘導して座ってもらうこと。やさしい日本語で話すこと。…いろんな気遣いに欠けていたことにあとで気づかされました。質問の内容がよくわからず不安そうな目をされていたことが印象に残った演習でした。

20年以上前に韓国旅行に行った時のこと。ホテルの近くで百貨店の倒壊事故がありました。町は騒然とし、テレビも報道一色になりましたが、流れる映像には更地にがれきあるようにしか見えず、韓国語もわからないから何が起きているかわからず不安になったことを覚えています。当然日本でも報道され、日本から安否確認の連絡があっはじめて事の重大さを知りました。これが地震などで被災者となって海外にいたら、不安は相当のものだったと思います。

今回の校長室だよりでは、少し文字を大きくし、読みやすくすることに少し気持ちを置いてみました。ほんの少しの気遣い、善行…できること、気づいていないことはまだまだ多そうです。



○本物

内モンゴルのイメージ(草原のゲル)⇒

令和3年も終わろうとしています。2年前には、これほど新型コロナウイルス感染症が社会生活、ひいては人生そのものにも影響するとは考えてもいませんでした。三刀屋高校生、掛合分校生が楽しみにしていた台湾旅行も、中止、変更を余儀なくされました。実施した県内研修旅行では、県内の魅力の新たな発見、気づきがあったものの、より視野を広げる意味でも、一日でも早くふたたび海外に気軽に行ける日が戻ることを祈るばかりです。



20年以上前に中国の内モンゴルに一週間ほど旅行で行ったことがあります。といっても、観光バスで観光地や名所旧跡を巡るわけではありません。一週間、馬に乗ってモンゴル高原の草原とゴビ砂漠を横断するというものでした。宿泊はゲルという遊牧民の伝統的な移動式住居。そのゲルも自分で建てる体験をするというかなり変わったツアーでした。砂漠で建てたゲルは真夜中の砂嵐で倒壊し、砂の上で夜を明かしたことありました。

ちなみに、内モンゴルに興味を持ったのは、山崎豊子の小説『大地の子』の主人公である陸一心が、文化大革命の時に送られた労働改造所のあるところだったからです。そこで、残留日本人孤児であった彼が羊飼いをしながら日本語を学んだ草原に一度は行ってみたいと思ったのが発端です。NHKでテレビドラマ化された時も、モンゴル高原の草原風景は壮大であり印象的でした。

内モンゴル旅行での最初の夜。草原はまさしく満天の星空でした。高原だからか、星空も近く、杞憂という言葉のごとく、満天の星が地面に落ちてくるかの錯覚を覚えたことを今でも忘れません。また、翌朝「地平線」に登る太陽を見たのもこの時が最初で最後です。

このツアーで衝撃だった体験はほかにたくさんあります。例えば、休憩で馬から降りた際にふと手綱を離したために、馬が草原の彼方に向かって逃げ出しました。ガイド役の遊牧民の方に、「追うな！」と制止されました。理由は、山などのランドマークのない広い草原では、慣れていないとすぐ自分の位置がわからなくなって迷い、探すこともできないからでした。また、途中休憩させてもらった現地の遊牧民のゲルで、羊の血の入ったチャイ(ミルクティーのようなもの)を振る舞われました。血には塩分があり、海がなく川が少ない高原では塩や水が貴重だとあらためて実感しました。当然トイレは水洗ではありません。日本のあたりまえとの違いにとまどいました。夕食に、生きている山羊を旅行者が処理して食する経験もしました。と言っても、食べることは感傷的になってできませんでした。内モンゴル遊牧民のナダム草原観光祭に参加し、モンゴル相撲で張り切りすぎて指を骨折したことも忘れられない思い出です。旅行の途中で草原から砂漠までの移動にバスを使いましたが、15時間以上かかったバスでは、車窓の風景がまったく変わらず、つまりいつまで経っても同じ草原の風景が広がっているだけで、バスが先に進んでいるのかどうか不安になりながら、時間の流れの違いにとまどったこともありました。

このような体験は、決してオンラインやVRでは味わえないものです。その土地に行かないとわからないことや空気感があります。ICT化が進むことで様々なことが便利になってよいのですが、それでは決して得られないことやわからないことがあることは忘れないようにしないといけないと思っています。

授業での話し方を勉強しようと、40代の時に落語や漫才を聞くことに少しはまったことがあります。そこで、「間(ま)」や「場の空気を読む力」、そして「観客を取り込む力」の大切さを感じました。同じ話家の同じ落語をテレビで聞くのと、実際に寄席で聞くのとはやはり違います。観客の雰囲気や観客との間をうまくつかんだ寄席だと自然に笑ってしまうことも、テレビだとそこまでということもままあります。コミュニケーションも同じです。対面でしか伝わらない、SNSでは誤解してしまうことがあることも、コロナ禍だからこそ強く考えていく必要があると思っています。



○終業式講話(抜粋) 「気遣い」

令和3年もあとわずかとなりました。今年も新型コロナウイルス感染症に振り回された1年でしたが、悲観するだけでなく、その中でどう生き抜いていくかをそれぞれが考え行動した1年でもあったと思っています。(中略)

先日地域の方から、挨拶の良さについて、お褒めいただくお葉書をいただきました。挨拶は、小さな善行でもあります。他者を気遣う第一歩です。これからも挨拶の励行を心がけていって欲しいと思います。

さて、2学期、2年生の研修旅行がありました。行き先の一つに石見銀山がありました。石見銀山のある大森町には、中村ブライスという、義肢(義足義手)などをつくっている全国的にも有名な会社があります。本校では校長室だより等で紹介するのみとなりましたが、分校では訪れる機会に恵まれました。中村ブライスは、大森町の古民家改修などを長年かけておこなって町並みを整備し、若者の雇用だけでなく、移住・定住にも大きく貢献したことで、地域活性化という意味でも有名な会社です。本校のPTA会報で紹介したパラリンピックの車椅子テニスに出場した三木選手も、この会社のサポートを受けています。会社を訪れた際に、生徒からの質問に答える形で話された中村社長の話がとても印象的だったのでここで紹介します。

質問は、「中村ブライスで働く上で大切なことは何ですか」というものでした。「手先が器用で、障がい者福祉に関心があること」と回答されると私は思ったのですが違いました。社長は、「ものづくりに興味があればもちろんいいが、大事なのはコミュニケーション力。患者さんに心から寄り添って話を聞き、丹念にやりとりしながら、体の一部となる義肢を本当に患者さんが納得できるものに仕上げている患者さんへの思いや使命感」という内容の回答でした。手先が器用かどうかよりも、そこに思いがなければだめなのだと思います。料理も同じで、料理が好きで包丁使いが上手でも、食材や食べる人への思いがなければいい料理は作れません。勉強ができて、スポーツが得意でも、そこに思いがなければ、志がなければ自己実現にはつながっていきません。そのことをあらためて思いました。中村ブライスの主な仕事先は、出雲や松江、遠くは米子や広島にある病院です。地域活性化のためにあえて仕事先には遠い大森町に会社があります。患者さんとの物理的な距離よりも、心理的な距離がとても大事だと思っているからこそ、大森町で会社がやっていると社長のお話からもわかりました。

仕事には相手があります。工場での仕事であっても、その先に製品を手にする消費者がいるし、働く仲間がいます。人の役に立たない仕事はないと思っています。直接的か間接的かの違いだけです。だからこそ、仕事でもなんでも他者を気遣う気持ちを持つことは大事です。これは学校生活でも同じです。

合い言葉を「小さな挑戦、小さな善行、確かな(大きな)志」としました。相手や仲間を気遣うことが善行でもあります。照れくさい時もありますが、小さな勇気、挑戦で相手を気遣えばお互いが幸せな気持ちになります。その時もらえる感謝の言葉は、自分の進むエネルギーにもなります。3K つまり、感動、感謝、気遣い…という言葉で、校長室だよりなどでこしたことを話したこともあったと思います。相手を気遣うことは自分の成長にもつながります。年末年始で人と会う機会が多い中、人とのつながりを大事にしていくことに思いを寄せてみましょう。(後略)



○3学期始業式講話(抜粋)

〈前略〉新学期のはじまりにあたり、「謝」という漢字について話をしたいと思
います。感謝、謝辞(を述べる)や謝罪、陳謝の謝です。

謝

「言」+射撃の「射」から成る漢字です。「射」は矢を放つことです。矢を射れば弓の緊張は
解けます。つまり、言葉に出すことにより、心の緊張が解け、和らぐことをあらわしています。

謝罪という言葉からこのことを考えてみましょう。謝罪を相手に伝える言葉は、「ごめんなさい。
すみません」。英語では、I'm sorry。中国語では不起と言います。ポルトガル語では「Me
desculpe(ミ・ディスクウピ)」。ドイツ語では「Entschuldigung(エントシュルディグング)」、イタリア語では
「Scusi(スクーズイ)」です。韓国語では、ミアナムニダです。

次に感謝を相手に伝える言葉は、「ありがとう」です。英語はもちろん Thank you。中国語では、
謝謝。ポルトガル語では「Obrigado(オブリガード)男性」、ドイツ語では「Danke schon(ダンケ・シェ
ーン)」、イタリア語ではグラッツィエ(Grazie)です。韓国語では、カムサハムニダです。

ハワイでは、親指と小指を立てて、手の平を見せる「ハングルース」にもその意味があり、挨拶
代わりに使われるそうです。

世界を旅行する時に、「ありがとう」「ごめんなさい」「愛している」の3つの言葉が話せれば
だいたいなんとかなると外国航路の船員さんが冗談で言っていたことを聞いたことがあります。
その時、妙に納得したことを覚えています。

なにが言いたいかという、すべて相手を思いやる言葉なのです。終業式では挨拶が気
遣いの第一歩という話をしました。

3つのうちどれか1つだけすべての言語を、それこそドラえもんのかで覚えられたとしたらどれを
選びますか…やはり、「ありがとう」ではないでしょうか。「ありがとう」は、他の国の言葉も知って
いる人が多かったのではないのでしょうか…。

挨拶に加え、素直に「ありがとう」や「ごめんね」が言え合える仲間とはお互いの信頼が強ま
ります。子どもの頃から最も口にした言葉の一つではないでしょうか。

謝罪は、自分が原因で相手の負担になっていることを自ら認めることです。つまり、「ごめん
なさい」は、自分の言動で相手が傷ついたことを自ら認め、相手の心の溝を自分のエネルギー
で少しでも埋めようとするための言葉とも言えるのではないのでしょうか。

一方「ありがとう」は、言った方も言われた方もエネルギーが増す言葉だと考えます。だから、
「ごめんなさい」と言われた相手が、「あやまってくれてありがとう」と言えば、お互いが幸せな気
持ちになれます。〈中略〉

コロナ禍での生活だからこそ、「謝」の感性を大事にしていきましょう。

最後に、さきほどハングルースの話をしました。意味は、「アロハ」「じゃあね」「気楽に行こう
ぜ」「ありがとう」といった使い方をするそうです。

少しハングルースの手の形を試してみてください。あまり力が入らないはずですが、今までがんば
ってきたのだから、今日はリラックスして行きましょうという感じです。「頑張れ」は素敵な言葉で
すが、これから共通テストに臨むみなさんは、このハングルースの気持ちも持って、これまでの
努力の成果を十分に発揮してください。〈後略〉



○インドの旅(1)

タージ・マハル⇨

島根県でもはじめてのまん延防止等重点措置が適用され、全国的にも感染者の急増が収まらない日が続いています。各種会合なども中止や変更を余儀なくされ、部活動も9月に続き制限されています。まさしく混沌とした状況が続いています。



混沌とは、『広辞苑』によると「物事の区別がはっきりしないこと。また、そのさま。もやもやしている状態。」となっています。事態が流動的で、どう結着がつくかわからないさまとも言えます。このような混沌とした状態がもう2年あまりも続き、閉塞感を持つ人も多いと思います。

かれこれ20年以上も前にインドを旅したことがあります。一週間あまりインドを旅した印象を一言であらわすと、同じ混沌。違う表現をすれば、カオス、無秩序でしょうか…。インド旅行をした人は、何度も行きたくなるか、全くその逆かの両極端だと聞いたことがあります。たかのてるこ著『ガンジス河でバタフライ』を読んだ時、私自身が旅した時の光景やその時々印象を何度も思い出しました。ぜひ読んでみてください。

私は、秩序がしっかりしていないと落ち着きません。仕事や机、そして部屋も整理整頓されていないと落ち着きません。先が見えないと不安になります。多くの人がそうかもしれません。道ばたに牛が横たわり、人が沐浴し、そこを車やオートリキシャ(三輪タクシー)がけたたましくクラクションを鳴らしながら我先にと走っていくインドの街の風景は、カルチャーショックそのものでした。マックバーガーにチキンバーガーしかなかったことも、カレーはチキンカレーばかりだったことも、知識として理解しているのと、体験して理解するのは違うことを実感しました。

海外旅行に行けない状況が続く中、少しでも視野を広げたり、本を読んだりする契機になればと思います。インドでの旅のエピソードを何回か紹介したいと思います。もちろん、20年以上も前のことなので、経済状況も含め変わっていることがほとんどだと思います。ステレオタイプに陥らないよう読んでいただければと思います。

写真はタージ・マハルです。ムガル帝国のシャー・ジャハーンが愛する妃ムムターズ・マハルのために建てた廟(お墓)です。白大理石の美しい建築で、ペルーのマチュ・ピチュと同時期の1983年という早い時期に世界遺産に登録されています。

大理石の白さを守るため、つまり排気ガスなどから守るためという理由でバスの駐車場はかなりタージ・マハルから離れていました。駐車場からは乗り合い自転車に乗り換えました。川岸に建つタージ・マハルですが、離れてはいたものの対岸に煙を出す工場が見え、間近に見るタージ・マハルは少し黄色くなくなっていました…。

いよいよタージ・マハルの敷地に入るというところで、現地ガイドの発言に耳を疑いました。「敷地内では、スリもいて危ない。ひどい例では握手を求められ応じた観光客が、手のひらに忍ばせていた麻酔針で眠らされた上に売り飛ばされたこともあった。ガイドとして付き添い観光客の安全確保のための行動をとると、次私が来た時に報復を受ける。トラブルに巻き込まれたくないからゲートから先は個人責任でお願いしたい。」というものでした。真偽のほどはわかりません。ガイドが怠けたかただけかもしれません。しかし、一緒にいた観光客のうち数人は、ゲート入場前に受付で預けるように言われたかばんが、帰る際に紛失していました。受付の人は預かっていないの一点張りでした。私も、話しかけてきたインド人らしき人が、勝手に英語でタージ・マハルの説明をはじめ、説明を聞いたからと高額なガイド料を請求されました。日本でもまったくスリがないわけではありませんが、日本の観光地は、いや日本は治安が良いのがあたりまえの感覚になっているので、自分の身を自分で守らないといけないと感じたタージ・マハルでの約1時間はとても長く感じたことを覚えています。日本の中世(鎌倉～戦国時代)も混沌とした世だったと考えています。無秩序ゆえの自由があり、だから惣村が発達するなど、農村は団結して安全を確保していました。今の混沌とした時代も、助け合いという団結が重要と感じているところです。



○インドの旅(2)

町の風景⇒

今回は、インドの旅の続編として、「あたりまえと思っていたことがあたりまえでなかった」ことに気づかされた出来事についてです。

海外旅行に行った時、現地の空港に着いてまず私がすることが両替です。ツアーの場合、添乗員や現地ガイドさんが、現地通貨でしか買えないものがあった時のために少額(1万円程度)両替してくれることが多いのですが、レートが悪い場合もあるため、時間があれば空港の両替所で1万円程度両替することになっています。例えば、100円=1.1\$が空港のレートで、現地ガイドさんのレートが100円=1\$だった場合、空港での両替がよいことがわかんと思います。しかし、空港などの両替所では現地のお金を基準に表現されているため、「1\$ = JPN91.000」などと表示されています。つまり、1万円を換金すると、1万円÷91=109.8\$ (100円=約1.01\$)になるということです。頭が回らないので、①現地の町の両替所、②空港の両替所、③現地ガイドさん等による両替、④日本の空港等であらかじめ両替、の順番に勝手にレートのよい順を自分で決め、②が安全安心でレートも悪くないと決め込んでいます。



デリー空港でも②を選択しました。1万円両替すると、渡されたのはインドルピーの札束。しかも、日本のように紙の帯封でなく、なぜか巨大なホッチキスで何十カ所も留めてありました。ホテルに着いてから、ホッチキスはずすのに1時間以上かかりました。でも穴だらけのその紙幣を使うことはほとんどありませんでした。なぜかという、現地ではドルや円での支払いを求められたからです。免税店ではカードで払うこともありました。現地が一番信用されている通貨が必ずしも現地通貨ではないということです。子どもに片言の日本語で「千円ちょうだい」と言われたこともありました。こうした状況では、インフレが起きることもあります。アフリカのジンバブエでは100兆ジンバブエドル紙幣が発行されたことがあります。最終的には日本円に換算して1円にも満たない価値となり、今ではもう使えなくなっています。話は戻りますが、インドのホテルでは、入口には機関銃等で武装した警備員がいて、一見紛争地の大使館のような感じでした。町で売られているもの、例えばペットボトルなども、水道水や井戸水を入れてふたをただけのもが売られていることもあるから注意するようにとガイドさんに言われていました。そんな中、町の屋台で買い食いすることは、日本のお祭りで買い食いするのとは状況がまったく違っていました。

余談ですが、同じ頃にトルコ旅行に行った友人が、出発前の添乗員の話、トイレに行っていて聞き漏らし大変な目に遭ったことがあります。それは、「今日本の空港で数千円をドルに換金しておいてください。現地の空港で、帰国の際に空港使用税を一人一人に払ってもらう必要がありますが、トルコリラは使えません。ドルで払うことになっています。現地での両替は難しいです…」という説明でした。聞き漏らした友人は、現地での両替の困難さは想像以上だったと話してくれました。日本で日本円を使うことはあたりまえではないことだと認識しました。

これも余談ですが、現地の水を飲むと腹を壊すと聞いていたので、日本から2リットルのペットボトルを2本持って行きました。現地で買った水は歯磨きなどで使っていました。ですが、腹を壊しました。ガイドさんには、「サラダには水で洗った野菜も入っている。アイスクリームなどにも現地の水は使われている。」と後で言われました。もちろん日本から薬は持って来ていましたが効きませんでした。でも不思議とガイドさんからもらった現地の薬を飲んだらききめ抜群でした…。

学んだことは、あたりまえをあたりまえと思わず、感謝し、なにがあたりまえの要因となっているか物事を第三者的に俯瞰して見られるようになることが大事であるということです。そして、「郷に入れば郷にいたがえ」ということ。

最後に、これは20年前の状況であり、訪れた場所でたまたま出くわしただけということもあること。つまり、ステレオタイプに陥らないように読んでいただければ、それこそが多角的複眼的に物事を見ることかと思っています。



○令和3年度卒業式式辞(抜粋) 「向かい風をつかめ」

(前段および一部略)今日がお子様の卒業式に立ち会うのが最後になる保護者の方もいらっしゃると思います。義務教育と違って感慨もひとしおかと思えます。そういう意味でも、今日のような形での卒業式となったこと、心よりお詫び申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与した卒業生のみなさん、卒業おめでとうございます。みなさんは本校所定の全課程を修了しました。この3年間は、これまでの高校生が経験したことのない日々でした。苦難の連続だったと思いますが、それを乗り越えるため、あきらめず日々努力されたことに心より敬意を表します。そして、その姿で学校や地域を盛り上げ勇気づけてくれたことに感謝します。ありがとうございました。

門出に私から言葉を贈ります。「自立した大人になるために」という言葉を今年度の合い言葉に添えました。自立した大人とは、この3年間のように、苦難の道でありであっても、自身の力で、時には仲間と助け合って、前に進むとする意欲がある人になってもらいたいという思いも込めていました。

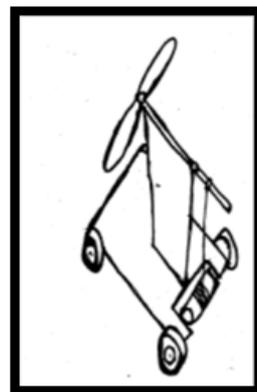
ヨットは、風上に向かってまっすぐは無理ですがジグザクなら進めます。向かい風も推進力に変えているのです。「ウインド・カー」って知っていますか。小学校理科の「風やゴムの動き」の時間などで作った人もいるかもしれません。正面からの風、つまり向かい風を受けてまっすぐ風上に向かって走る車です。飛行機も向かい風で飛び立ちます。苦難も発想や考え方を変えれば、大きな力になるのです。

威風堂々しっかり前を向きこれからの道を歩んで下さい。「向かい風をつかめ」。これを贈る言葉とし、式辞といたします。

→ウインド・カーのイメージ図

※ウインド・カーの原理

「前方からの風で風車が回り、風車の軸の回転がゴムにより駆動輪に伝達されることで、車を前方に進めようとします。しかし、車は風を受けて後ろ向きに押されています。このため、駆動輪と床の摩擦抵抗力が風の抵抗力に勝ると、前に進みます。」





○令和3年度終業式講話(前段及び一部略)

「満つれば欠ける」

日光東照宮を知っていますか。日光東照宮は、元和3(1617)年に徳川初代将軍家康を祭神としておまつりした神社です。日光東照宮の観光ハイライトと言えば本殿入り口の陽明門です。1日中日暮れまで見ても飽きないことから、別名日暮らし門とも呼ばれます。12本の柱で支えられていて、すべて曲線の文様が施されています。陽明門をくぐり終わるところ、よく見ると柱の一本だけが逆さになっているのに気づきます。なぜ逆さなのでしょう。諸説あるようですが、不完全な柱を入れることで戒めにしたのではと言われています。つまり、完成と思えばあとは満足感から努力をしなくなるということです。そういう意味では、陽明門は未だ完成されていません。

私自身のことですが、校長室だよりを月3回ペースで発行し、年間36号を目指していましたが、35号で終わりそうです。約2年前、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止となった隠岐の島ウルトラマラソンに再度出場できるまで、休みの日を中心に月間100キロは走るという目標も、先月20か月目で途切れしました。しかし、達成できなかったからこそ、反省や振り返りをして、その課題を認識し、その克服に向かって新たな意欲が沸いているところです。

校長室だよりで、富士山登山の「胸突き八丁」について触れたことがあります。挑戦をする中で、最後の1〜2割は違う質のものが待っているというものです。挫折の多くはこの正念場でおきます。しかし、挫折とするか、意欲に変えるかは自分次第です。挑戦は何度でもできます。

高校生活も思いどおりにいかないことが多いと思います。今は、新型コロナウイルス感染症の影響で、自分の努力ではどうしようもないことで思いどおりにいかないことが多いからなおさらです。社会ではうまくいかないことや理不尽なことがたくさんあります。そこで逃げたり、つぶれたりしないためにも高校生活の中で様々な経験を自ら選んで、挑戦して欲しいと思います。自分の限界を少し超えた目標設定、大きな志を確かにもって、高みを目指し、自分ができることは最大限やってみましょう。ただし、頑張ることと無理をすることは違います。自分から助けを求めることも大切な勇気、そして能力であることも忘れないでください。達成感は大事ですが、満足せず、自分に負けず、コロナに負けず、弱音も吐きながら頑張りを続けてください。



○令和4年度 1 学期始業式講話(抜粋)

*写真は加茂町のしだれ桜です。

小さな挑戦、小さな気遣い、大きな志、～自立した大人となるために～

＜前段略＞桜も満開です。新年度を迎え、みなさんには、気持ちも新たに宮沢賢治の「雨にも負けず、風にも負けず…」の気持ちでがんばって欲しいと思います。この詩には、忍耐だけでなく、人への思いやり、気遣いの意味も込められていると思っています。

コロナ禍では、大きな声を出すことやマスクをはずしての会話は自粛が求められています。このため、相手の言うことが聞こえにくいことはしばしばです。しかし、聴覚障がいがある人に思いをはせてみてください。声が出せない人もいます。インクルーシブ社会、ダイバーシティの意味を考えるとともに、コロナ禍にあっては、思いやりや気遣いがとても大事ではないでしょうか。

そのこともあって、今年度のスタートにあたり、合い言葉を少し変えました。

「小さな挑戦、小さな気遣い、大きな志 ～自立した大人となるために～」です。

「小さな挑戦」はそのままで。昨年度より、いや昨日より小さな挑戦、小さな変化に取り組んでください。先生方にもお願いしています。本当に小さいこと、些細なことでもかまいませんから、昨年度より、昨日よりここを変えよう、このことに挑戦してみようと思っております。学習でも、部活動でも、家庭での生活でも何でもいいです。それを考え、じっくり取り組むことがそれぞれの自立につながると信じています。

変えたのは「小さな善行」です。「小さな気遣い」に変えました。思いは同じですが、行動がすべてではなく、まずは自分の心に少しの余裕を持つこと。その余裕を、相手を思いやる気持ちにもつなげて欲しいという意味を込めました。気遣いを行動に移せばベストですが、必ずしも直接的な行動でなくてもいいのです。例えば、手話を少し覚えてみる。それは聴覚障がいの人に思いをはせた気遣いで、すぐには役に立たないかもしれませんが、思いやりや気遣いの気持ちを育むことにつながり、結果的に自分の成長にもつながります。教室で人に呼ばれて立つとき、椅子を机にしまう余裕を持つ。エレベーターで閉まるボタンを押さない余裕を持つ。それは自分の心に余裕も持つことになるし、見えない誰かの事故防止にもつながります。

心の余裕を持つには、心を整えることが大事です。昔サッカーの長谷部選手の本に題名にもなりましたが、もの事に向かう時には、心が整っていなければ決していい結果は得られないし、何かを吸収しようとする時にも心が整っていなければ入ってきません。部活動の勝負の場面ではよく言われますが、決してそこだけではなく、授業、集会・式典、家庭学習でも一緒です。その意味もあって最初に心を整えてもらう時間を設けました。

最後に「確かな志」、「大きな志」です。私も使うときに言葉が揺れていましたが、「大きな志」で一本化します。札幌農学校のクラーク博士の「少年よ！大志を抱け」の言葉にも込められたように、コロナ禍で先が見えにくい状況だからこそ、見失わない大きな志をもって、自分の限界を少し超えた目標を定めて、努力を積み重ねていく過程を大事にして欲しいと思います。

みなさんの可能性は無限大です。私たち教職員は、みなさんの可能性を高め、広げるための努力を惜しみません。これから1年間「チーム三高／チームカケコー」でがんばりましょう。





○令和4年度入学式講話(抜粋・一部改変)

小さな挑戦、小さな気遣い、大きな志、～自立した大人となるために～

歴史と伝統のある学校の生徒として、本日その第一歩を踏み出すわけですが、ここでの三年間で、社会のどこかを支える、なくてはならない自立した大人へと成長していくこととなります。

そこで今日は、「小さな挑戦、小さな気遣い、大きな志～自立した大人となるために～」という言葉を送り、式辞としたいと思います。これは、昨年度から学校の合い言葉としているものです。

毎日少し成長した自分に出会うのが楽しみになるような小さな挑戦・取り組みを日々繰り返してください。勇気を少し出して小さな挑戦をし、取り組みを続けてください。挑戦に失敗はつきものですが、努力の過程や失敗から学ぶことで人は成長します。三百六十五歩のマーチという歌にも「三步進んで二歩下がる」とあります。小さな一歩の積み重ねが人を成長させます。千里の道も一歩からです。

小さな気遣いという言葉をつけたのは、人を思いやる気持ちを持つことで、心にゆとりができ、自身の生活や取り組みが充実したものとなるからです。その逆もかりです。自己中心的にならず、他者を気遣ってください。気遣いにあふれる学校は、「安心して失敗から学ぶことができる学校」とも言えます。誰かの役に立ちたい気持ちや人を大切にしたい気持ちは人を確実に成長させます。

道ばたのゴミを拾う…なんでもよいのです。それは、誰かが気持ちよく道を歩くための気遣いであり、自分以外の誰かを大切にすることでもあります。マスクの着用や挨拶も同じです。マナーや挨拶は、他者を気遣うふるまいです。

小さな挑戦、小さな気遣いは、自分の限界を少し超えた目標設定とそのための大きな志を持つことから始まります。それが努力の過程を充実したものとし、大きな志だからこそ、結果以上に、努力の過程で自分に手応えを感じます。その過程で失敗や挫折があっても、その都度達成感が生まれ、次への意欲が沸くはずで、未見の我、成長していく自分との出会いが何度もあるはずで、

求める生徒像は、本校「志をもって粘り強く努力し、自らを高めようとする生徒」・分校「何事にも志をもって意欲的かつ誠実に取り組むことのできる生徒」です。みなさんならできると信じています。

最後に、ここにいる新入生が、三年後に自立した大人として卒業していけるよう、保護者や地域と連携しながら教職員一丸となって尽力することをここにお誓い申し上げ、式辞といたします。



○笑顔でノーサイド

県総体が近づいて来ました。三刀屋高校だより『蒼雲』第137号にも書きましたが、県総体では「笑顔」の効用を大事にしてもらいたいと思っています。「笑顔」は、試合において、心を落ち着かせる効果、体をリラックスさせる効果、相手に自分には余裕があるという思いを抱かせる効果、チームメイトに安心感を与える効果等々、本当に多くの効果があると思っています。気遣いは、心に「余裕」がないとできません。「笑顔」は心の「余裕」を生みます。何かに結果を残すためには「余裕」が必要です。ギリギリの状態では自分の持っている力を十分に出すことはできません。「心技体」すべてにしっかりと準備が整い、ある程度の「余裕」があることが結果につながることは間違いありません。そういう意味でも「笑顔」を大事にもらいたいと思います。



先月審判の判定に苦笑いを浮かべたプロ野球ロッテの佐々木朗希投手に対する球審の対応を巡る問題が報道で取り沙汰されました。スポーツ競技の多くに審判や係員、補助員の方などがいて、試合が成立しています。この問題を通して、敬意を払うことの大切さをあらためて感じました。

子どもの頃、「ラグビーは得点を挙げても喜びを表現しない。審判にも抗議をしない。それは走り過ぎて疲れているからだ。」と聞いたことがあります。もちろん間違った解釈です。その後TVドラマ「スクールウォーズ」などを観る中で、ノーサイドの精神を知りました。今は、相手に対する敬意からだと思っています。試合が終了すれば、敵と味方、勝者と敗者の区別はなくなり、お互いの健闘をたたえることがノーサイドという言葉に込められています。そして、試合は相手があって成立することを忘れてはなりません。

実際にラグビーの試合を観ると、試合終了後は両チームの選手が握手をしたり、笑顔で話していたりというシーンを見ます。身体コンタクトが激しく、お互い熱くなる場面が多いラグビーだからこそ、お互いの健闘をたたえ合うという精神が尊重されていると理解しています。ラグビーのユニフォームに襟があるのは、そのふるまいや精神を忘れないためと聞いたことがあります。ラグビー発祥の地であるイギリスでは、試合後に両チームが集まって健闘をたたえ合う「アフターマッチファンクション」というお酒を飲みながら試合についてあれこれと語らうパーティーがあり、そこでは正装で出席するのが決まりとなっていたためという説もあります。ラガーシャツの上からブレザーを着てネクタイを締められるよう、ドレスシャツと同じように首元までボタンを留められるように作られているということらしいです。チョコちゃん風に言えば、諸説あるということでしょうか。

大リーグの大谷選手の大活躍に勇気をもらっている人も多いと思います。大谷選手も時折喜びの感情を爆発させることがあります。でもよく見ると、三振を取った時などのガッツポーズは相手に背を向けてしています。テニスの錦織選手なども、ガッツポーズは相手に背を向けるか、相手を見ずに自分自身を鼓舞し褒めるかのような感じでしています。相手に威嚇的にするようなことはしていません。

いろんなスポーツで、試合前に礼をしたり、握手をしたりします。ボクシングでも、グローブタッチの握手をしてから試合が始まります。日本発祥の柔道も、試合後は握手しています。いろんなスポーツで相手への敬意を忘れないようふるまいがされています。

今はコロナ禍にあって、握手は自粛の競技がほとんどです。しかし、県総体が様々な人のおかげで成立すること、なによりも競い合う相手があるから勝ち負けが決まることを忘れず、そしてそこで最高のパフォーマンスができるよう、笑顔でノーサイドの精神を忘れず、がんばって欲しいと思います。



○猿は文化的か？

「多文化共生」、「多様性」・・・今私たちが生きている「社会」で大切な考えであることは言うまでもありません。例えば「多様性」という言葉を耳にする時、LGBTQ+や障がいがある人などマイノリティに関することが話題になっていることがあります。それは、これまでも社会に存在していたにもかかわらず、社会からの十分な理解を得られず苦しい思いをしてきた人たちに、社会の目が向けられるようになってきたこととも言えます。



「一部の人を閉め出す社会は、もろくて弱い社会である。」と、1979年の国際障害者年行動計画で言っています。多様性には、こうした面と、価値観や宗教、趣味や食文化、言語やコミュニケーション・関係性の取り方など生活様式等に関わる面があります。前者の問題は、教育はもちろん権利保護や法律等も解決に向けた手段の一つとなりますが、後者におけるすれ違いや争い、誤解・偏見等は、人間性の育成や他文化理解など教育に係る比重が大きいと思っています。



人間は、歴史や地域、文化によって異なった社会をつくります。一方、猿はいつでもどこでもほぼ同じです。人間は、複雑なことや現実の出来事を、記号化するなどして共通のものとして認識することができます。例えば炎を見て漢字で「火」と記号化・言語化することができます。だから会話が成り立ち、コミュニケーションが活発化し、お互いの理解も深まります。

極端な例えですが、魚市場などでは専門用語が飛び交い、魚の専門知識のある人が売り買いをします。スーパーなどでは、魚の説明が書かれていることはあっても、店員と客がお互いに専門知識を持って買い物をするのが前提になっていないことが多く、会話は市場ほどありません。コンビニでは、買い回りする際に商品について店員と会話することはほとんどありません。会話が、文化や技術の発達とともに少なくなってきました。私が高校の頃にウォークマンが登場しました。猿がウォークマンを聴くCMが人気でした。今はスマホを高校生ならほとんど持っています。自分だけの音楽・世界に浸れます。昔はTVも家に1台しかなく、子どもも大人の演歌を聴かされました。今は自分の好きな世界に閉じこもることができ、それが他者への理解力やコミュニケーション力の低下につながる可能性があります。

文化には、一段高いところにあるという意味のハイカルチャーと、生活様式等をさすポップカルチャーとの両方の意味があります。前者は「文化人」、後者は「食文化」という例が適当でしょうか。

芸術に例えると、文化は共通の記号で書かれた台本(シナリオ)、社会はそれをもとにした演劇、人間はその演技者とも言えます。社会では、それぞれが思い思いの演技者になることは、台本がある以上制約が発生し、それぞれに社会から役割が与えられることがあります。「○○らしく」という言葉で、あいまないで異質な役割を与えられることもあります。例えば「女らしくなさい」・・・それは抽象的であり、個々で受け止め方も違ってきます。演歌などで女性は花によく例えられます。それは、動かない、つまり受動的な存在の裏返しとも言えます。大枠のイメージ・役割があるから余計に苦しくなります。そうした社会的・文化的につくられた性の役割を打破するのがジェンダーの考えです。

猿と違って、人間はコミュニケーションができ、文化を持ちます。しかし、多文化共生社会でなく、多様性が認められない社会だと、共通化が行き過ぎ囲い込み的になり、差別や戦争などが起こります。

明治維新时期に隠岐で島民革命(隠岐騒動)がありました。そこから見えるのは、隠岐の人が人情を大事にし、異質なものを受け入れ、共に生きていこうとする精神です。流人を受け入れてきた隠岐。逃げ場のない島だからこそ、対立ではなく、対話を重ね、意見が違っても認め合い助け合っていこうとする精神が、隠岐騒動を収束させた要因です。差別や偏見、戦争の抑止力は、このような精神、コミュニケーション力、他者のことを理解する力、気遣いです。小さな気遣いを積み重ねていきましょう。



○「～切る」

沢庵という和尚を知っているでしょうか。3年生で日本史を学ぶ生徒は、江戸時代の紫衣事件で聞いたことがあると思います。一休和尚や千利休のお寺として有名な京都にある大徳寺の僧です。大根の漬物の名前としてのタクアンは、多くの人を知っていると思います。諸説ありますが、沢庵和尚が考えたとも、江戸に広めたとも言われています。



この沢庵和尚の書物である『不動智神妙録(ふどうちしんみょうろく)』に、武士に説いた言葉として「前後裁断」が出てきます。「前(過去)と今、今と後(未来)の際(きわ)を切り離して今を生きよ」という意味です。

プロ野球・阪神タイガースの元投手、下柳剛選手がグローブに縫い込んでいた言葉として、阪神ファンの間では有名です。(打たれた)過去をくよくよ引きずっても何も生まれない。(打たれるかもしれない)未来を憂えても消極的になるだけである。(今投げる一球に、)つまりこの時この瞬間だけに集中して生きよ(、全力を尽くせ)・・・という意味です。「過去」を今更変えることはできません。同時に、来てもない「未来」を心配しても仕方ありません。私たちができることは、「過去」のことにくよくよせず、「未来」に向けて「現在」を一生懸命に生きることです。

この格言にも関係しますが、「○○切る」の○○にはどんな言葉を思い浮かべますでしょうか。

「出し切る」「やり切る」「思い切る」・・・他にも「振り切る」など・・・野球でポテンヒットとなった時に、解説者が振り切ったからヒットになったと言うのを聞くことがあります。大事なことは、積極的な姿勢、前向きなプレーであったかどうかを言いたいのだと思っています。

私は大学までソフトテニスをしていて、今は趣味で時折硬式テニスの大会に出たりしています。試合で、マッチポイントが自分のレシーブだった時は、いつもすごく心が揺れ動きます。レシーブは、サーブと違って自分のリズムやタイミングでプレーを始めることができません。特に負けている時のマッチポイントはとても葛藤します。負けているから強気に行くべきか、負けているからこそ安全に確実にレシーブを返して慎重に行くべきか・・・。答えはその都度変わりますが、大事なことは弱気な自分を捨て切れているかどうかだと思っています。

スポーツでも受験でも、私たちが後悔するかどうかは、自分の持っているものをすべてつぎ込んだか、出し切ったかどうかだと思います。

NHKの「ランスマ」という番組をよく観ます。先日の放送で、86歳のランナーが長野マラソンに挑戦して4時間余でゴールされたのが特集されていました。毎日12～13km、月間で400kmは走り込んでいるそうです。80歳代後半でサブ4、つまり4時間切りが夢だそうです。ちなみに私の目標はサブ5です(笑)。1km6分ペースでもサブ4はできません。夢があるから、高い志があるからがんばれるそうです。年を重ねるごとにできないことや衰えることはあるけど、あきらめるのではなく、毎日毎年が夢への挑戦の積み重ねだそうです。その年齢でできるすべての努力をやり切っているからこそ、4時間余で走り切ることができたのだと思います。努力は走り込みだけではありません。食生活を含めて生活全般に及びます。この番組では女子マラソン 60～64歳の世界記録を持つ弓削田(ゆげた)さんがコーチとしてよく登場されます。記録は驚異のサブ3で、61歳の時より62歳の時の方がさらに記録を伸ばされています。コーチをされている時に、「全力を出し切ったかどうか」をよくランナーに問いかけて叱咤激励されています。

その時できる最大限の努力、挑戦をしているかどうか。自分にも問いかけていきたいです。



○合格体験記

県総体が終わりました。多くの3年生は受験モードへの切り替え(ステップ)となります。このあと大会やコンクール等がある部活動の人も含め次の最終切り替え(ジャンプ)は学園祭後です。ちなみに最初の切り替え(ホップ)は今年1月の共通テスト後でした。それぞれ飛ぶ間隔や距離は違えども、いい切り替えをしながら夢の実現に向けて頑張りたいと思います。



三刀屋高校の『合格体験記』が発刊されました。そこで切り替えについて触れている卒業生がいました。「吹奏楽コンクールが夏にあり、多くの仲間が受験勉強一色になっている中で焦る気持ちもあったが、思い切って部活動に振り切って頑張った。やり切ったことが、自信やモチベーションにつながり、残り期間を受験勉強一色に振り切って全力投球できたから合格できた。」というような内容でした。

挫折をバネにしたと書いている卒業生もいました。「総合型選抜は不合格だったが、この時受験を通して定めた目標(志)が、高いモチベーションをもたらし、気持ちを切り替えて受験勉強に取り組むことができたことが、国公立大の前期試験での合格につながった」というような内容でした。

入学式等で次のような話をしました。「小さな挑戦、小さな気遣いは、自分の限界を少し超えた目標設定とそのための大きな志を持つことから始まります。それが努力の過程を充実したものとします。大きな志だからこそ、結果以上に、努力の過程で自分に手応えを感じます。その過程で失敗や挫折があっても、その都度達成感が生まれ、次への意欲が沸くはずです。未見の我、成長していく自分との出会いが何度もあるはずです。…」

これまでの校長室だよりで、富士山登山の「胸突き八丁」について何度か触れました。挑戦をする中で、最後の1~2割は違う質のものが待っているというものです。挫折の多くはこの正念場でおきます。しかし、挫折とするか、意欲に変えるかは自分次第です。挑戦は何度でもできます。

昔担任していた時に、推薦入試への挑戦が受験勉強からの逃げたと感じる生徒に会うことが少なからずありました。そんな中ある生徒が「推薦入試を受けるのは、勉強以外の部活動を含む学校生活、そして学校外でのボランティア活動など自分が高校時代頑張ったすべてのことを活かしたいから」と言っています。今の本校・分校生なら、部活動だけでなく、探究学習や体験学習などから得た成果や学びなども、学校生活で培ってきたものとして活かせるはずです。

私は1年間浪人して大学に入りました。正直に言えば高校時代、受験勉強を本気でしませんでした。不安をやる気に変えられないまま共通一次試験(今の大学入学共通テスト)が終わりました。そんな時に担任が難関私立大の受験を勧めました。偏差値が20近くも離れていたのでもちろん不合格でした。しかし、その大学のキャンパスで受けたことで、また他の受験生と違い、高いお金を出してもらい東京まで受験に来たのに勝負すらできない自分の情けなさを感じました。同時に、来年は絶対に勝負できる学力をつけて大学受験をしたいという気持ちが沸き上がりました。浪人してからの1年間はいわゆる「4当5落(4時間睡眠で勉強するなら合格できるが5時間睡眠なら…)」で頑張りました。朝は5時から起きて記憶もの中心に勉強。その後早くから学校(補習科)に行って勉強。行き帰りの電車では苦手な国語克服を兼ねて読書。テレビはニュース以外見ませんでした。夜は1時頃まで机に向かっていました。平日は1日8時間以上勉強したと思います。人間やる気になればできるものだと思います。気づけば偏差値も落ちた私立大が合格レベルになるところまで伸びていました。唯一の楽しみは、早見優のラジオ英会話の時間。合格して大学に旅立つ前の3月、奇跡の出来事が…出雲に早見優がコンサートに来て、最前列で観られたのです。神様からのごほうびだったと今でも思っています。



○「～切る② 切り替え と 区切り」 総体の一コマ (男子バスケット) ⇒

県総体が終わり、多くの3年生は受験モードへ「切り替え」となります。「切り替え」という言葉を使いましたが、気持ちに「区切り」をつけることとは同じでしょうか。やり切った、後悔はないと思える人は、総体を区切りとして切り替えがしやすいかもしれません。しかし、なにをもってやり切ったとするか、思えるかは人によって様々です。



私たちは、日々の生活の中でいろんな区切りをつけながら前に進んでいます。6月6日から本校では家庭学習時間調査がはじまりました。日々の振り返りをする中で、3点固定(起床時間、学習開始時間、就寝時間)の時間を同じにして、生活にリズムをつけることが大事であることに気づかせる。そうしたことも調査目的の一つです。

しかし、無理に区切りをつける必要がないこともあるのではないのでしょうか。総体後の気持ちの区切りもその一つです。区切りをつけることと、そのことを忘れることとは違います。自分の中で無理に、満足できなかった結果や消化しきれない思いにふたをすることが区切りをつけることではありません。

これまでの練習や総体での結果に満足している選手とそうでない選手、レギュラー選手とそうでない選手、団体で出場した選手と出場せずに終わった選手、自分のせいで負けたと思い込んでいる選手や劣勢でも粘れた選手、強気でいけた選手と弱気で守りに入ってしまった選手、初心者ではじめた選手と中学校から続けてきた選手…総体後の思いは一人一人違っているはずです。

昔部活動の顧問をしていた時に、優勝候補と言われながら、団体戦の初戦で思わぬ相手に負けたことがありました。全国総体に行くことを目標に厳しい練習を乗り越えてきただけに、選手の落胆ぶりは言葉にできないものでした。あとで保護者に聞いた話ですが、帰宅後もう一度会場につれて行って欲しいとキャプテンをしていた子どもに言われ、日が暮れるまで会場を見つめたまま涙を流し、声をかけることもできなかったことがあったそうです。もう一度会場に行くことで、自分の気持ちに折り合いをつけようとしたのだと思います。この敗戦は、準決勝や決勝だけを想定して練習してきた顧問の責任だと今でも思っていますが、生徒にとっては誰の責任かが大事でなく、がんばってきた結果とその過程、その両方が自分の目標としてきたレベルに到達できたかどうかが大変であり、過程が満足であっても結果が不満足なら、なかなか気持ちに折り合いをつけにくいと思います。結果は変えられないし、過程も変えることはできません。でも、これからのことを変えていくことはできます。

総体や部活動に残した思いがあるのなら、無理に思いにふたをして、区切りをつけたことにして前に進もうとすると、逆に前に進むにくくなることがあります。思いは、時間と共に、思い出に変わったり、より強い思いになってそれが意欲に変わったりもします。大事なことは「区切り」をつけることでなく、目の前にある次にすべきことに、きちんと取りくんでいけるように「切り替え」られるかどうかです。

私は、高校からソフトテニスをはじめ、最後の総体では団体戦の初戦でシード校に思わぬ勝利をしました。はずかしながら、公式戦で勝利したのは個人戦も含め団体戦でのその時の1勝のみです。練習もいい加減で、キャプテンでありながら楽しければいいくらいの感じでした。なので、大会前に勝ち負けを語れるレベルではありませんでした。でもその1勝で人生が変わりました。もっと練習をすればもっと勝てたのではないか。練習がいい加減だったのは、負けた時の口実が欲しかったからではないか。つまり、一生懸命やって報われないことがあることに最初から逃げたり避けたりしていたということです。そのことに気づいたのは大学受験に失敗した時です。受験勉強がいい加減だったのは、一生懸命やって失敗することを避けたからだと思っています。つまり部活動も勉強も最初から言い訳や逃げ道を用意していた気がします。

挑戦しなければ、失敗もしない。でも成長もしないし、志が低ければ努力もしない。つらい気持ちや悲しい気持ちに、無理に区切りをつける必要はないと思っています。いつか腑に落ち、自分の気持ちに折り合いが付き、そのことが意欲につながる時がきっとあります。大事なことは目の前のことに志を高く持って取り組むことです。



○「手書き」

「山」という漢字の書き順はわかりますか？…私は、小学生の頃から漢字が苦手で、書き順にもまったく関心がありませんでした。

そのせいか文字を書くことがとても嫌いでした。教員になって黑板に文字を書くようになってからは、嫌いではすまされなくなりました。そこで意識するようになったのが書き順です。ある時生徒から書き順が違いますと指摘を受けたことがきっかけでした。日本史の教員なので、1学期の最初に授業で飛鳥時代をやります。「飛」という漢字がうまく書けず変な形の字になった時のことだったと記憶しています。

本屋に行き、小学生用の書き順が書いてある辞書を買って、それ以来うまく書けない漢字がある時は書き順を確認するようになりました。「飛」の書き順を意識して書いたら、自分なりに納得のいく形の良い字になった時のうれしさを今でも覚えています。

これまで自分の名前の一文字である「山」は、おそらく何万回というレベルで書いてきました。辞書で調べたら書き順は正確でした。自分の名前くらいはきれいな文字で書きたいという気持ちからか、自然と正しい書き順になっていたのかもしれませんが。「山」という漢字は、山の美しい姿、つまり主峰となる山があってその左右に山容が連なるという形の姿をあらわした文字だと言われています。富士山や大山も美しい山ですが、山脈的なイメージが山の語源となっています。そもそも漢字のルーツが中国にあるためでしょうか。

日本の古代信仰では、山には神が宿るとされてきました。奈良県の三輪山は、大神神社の神体山となっており、出雲大社のような本殿がありません。西洋では悪魔の住む山は征服するものとされ登山が発達。日本では修行する場とされ修験道が生まれました。日本の寺には寺号と山号があります。修験道場で有名だった三刀屋の峯寺は寺号、山号は中嶺山です。

今年度の1年生から一人一台端末となり、学校教育のICT化も進んでいきます。パソコンやスマホも普及し、文字(漢字)を手書きする機会はめっきり減りました。校長室だよりもパソコンで作成しています。

最初に教頭になった時にご一緒させてもらった校長先生は、手書きの文字で校長室だよりを発行しておられました。今でもお手紙をいただくときは必ず手書きの文字です。万年筆を使われるのですが、校長室だよりの中でそのことについて触れておられました。

「思いを込めて文章を書く時は万年筆を使います。紙との摩擦が大きく、ゆっくりと字を書くことができます。頭の中で生み出した言葉が、時間をかけて点や画(漢字を構成している一つの点や線のこと)になり、やがて一つの文字になっていきます。ゆっくり、ゆったり筆触が味わえる万年筆が好きです…思いを手で書いて伝えることの意味を考えています…」

そう言えば私も、就職、進学のための調査書や推薦書は万年筆で清書していました。

メールで打鍵された文字を見ることには違和感はありません。しかし、手紙では打鍵された文字で読むのと手書きの文字を読むのでは思いの伝わり方が違って来る気がします。

キーボードで打鍵し、「Y・A・M・A」と打ち込み変換キーを押すと一瞬のうちに変換された「山」という文字が現れます。「打ち言葉」には、書き順や文字になっていく過程がありません。

山を眺めるときに、時折「山」という漢字を無意識に頭の中で浮かべています。同じ山を見ている、その時の精神状態によって、丸文字になったり、角張った字になったり、崩し字になったりもします。でも、その文字には三次元的(空間的)広がりや時間的広がりがあります。

私たちは、「書き言葉」と「話し言葉」の世界で生きています。主体的・対話的で深い学びが学習指導要領の肝となっています。ともすれば、対話的という言葉から、それが「話し言葉」によって成立し、それをICT活用による「打ち言葉」で効率的に深めていくかのようにも聞こえます。

「打ち言葉」の普及による便利さと引き換えに、「書き言葉」が持っている広がりや書き手の個性や思いが失われていくことがないようにしないといけなと思っています。





○「進路ガイダンス」

県総体女子バスケットの様子⇒

6月7日(火)に三刀屋高校3年生保護者対象の進路ガイダンスを開催しました。分校は、PTA総会の折りに企画していましたが中止となりました。本校も昨年度はガイダンスを中止しています。

冒頭挨拶では、次のようなお話を私からさせていただきました。

「特別支援教育は、障がいのある生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、一人一人の教育的にニーズを把握し、その持てる力を高め…とされています。これを進路指導になぞらえると「就職・進学のための受験を通して自立した大人となるよう、自己実現に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、一人一人の進路希望を把握し、その持てる力(学力・社会力・人間力)を高めるため、適切な指導及び必要な支援を最大限おこなっていく」となるでしょうか。先日お子様に配布した『進路の手引き』でも、進路指導とは、「在り方、生き方に関する指導」と三刀屋高校は考えています…としています。そのためにも保護者との連携が重要と考えています…」



3年学年主任から総体後の3年生の様子などが伝えられたあと、就職担当教員からは、「新卒者だけが持つプラチナチケット」をキーワードに、就職への心構えなどに関する話がありました。

「会社は、新卒枠を設けて採用しているケースが多い。高校や大学などを卒業する新卒者を対象に求人を出してくるということ。新卒者に対する求人は多いが、転職の場合は同じ状況とはならない。(高校3年生の有効求人倍率が約2.4倍[高校生1人に対して2.4社の求人]に対し、一般の有効求人倍率は約1.2倍)高卒で入社すれば40年以上勤めることになるが、残念ながら早期に離職するケースが少なからずある。離職すれば新卒での就職というプラチナチケットはない状況での就職活動となる。自分なりの就職することや社会人になることへの覚悟や心構えがあるかどうか、就職希望者にはしっかり考えて欲しいと思っている。求人票は7月1日から解禁となり、採用する生徒の学校を指定して求人を出す会社などは、7月中に応募前見学を課している場合がある。8月上旬には応募する会社が決まり、中旬からは応募書類の作成がはじまる。9月16日からは就職試験がはじまる。あと3か月後と時間はさほど残されていない…。新卒者だけが持つプラチナチケットを、高卒段階で使うのか、上級学校進学後に使うのか今一度しっかり考えてもらいたい…。ちなみに、公務員試験などは、新卒枠を設けているケースがほぼないが、それだけ関門が狭くなる。」

私は、大学4年生の時、最初は企業入社を考え就職活動をしていました。プラチナチケットをここで使うつもりでした。総合商社に入り海外で働くのを夢見ていたのですが、文学部で経済のことには疎く、英語ができるわけでもなく、なにか理想があるわけでもなく、ただ商社マンはカッコいいくらいの気持ちでした。当然面接でそのあたりを見透かされ、なかなか内定をもらえませんでした。やっと決まった商社も、学歴重視が見え隠れするので、努力が評価されないことへの不安から内定を辞退し、教職の道を選びました。結局プラチナチケットは使いましたが無駄にしました。そして教員採用試験にも失敗。社会人になることへの心構えと覚悟のなさに気づくとともに、就職先がないまま卒業を迎えることで絶望感を覚えました。就職先の選択をファッションの一つくらいの感覚で選んでいた自分を深く反省しました。

進学についての話では、大学入学共通テストなどの入試制度や学費や受験に係る経費の話、行きたい学校をきちんと調べる大切さなどが話されました。学費などは、「三刀屋高校進路だより」などでも詳しくお伝えしています。

最後に「進路を考える」として、進路(学校)選択の際に、なにを優先順位として高く持つかという話がありました。なにを学びたいかで選ぶのか。つきたい職業を意識して、どの学部・学科がよいか、どんな資格をとりたくて選ぶのか。どの地域に行きたいか、例えば東京に行きたい気持ちを最優先させるのか。学費の面から奨学金制度の充実度や自宅通学できるかどうかで選ぶのか。今の学力でいけるところにするのか、これからがんばって学力を高めても行きたいところにするか…いずれにせよ、自己実現に向けた主体的な取り組みにつながる進路選択をしてもらいたいと思います。



○「ありがとうディスタンス」

隠岐の島ウルトラマラソン 2022 ⇒

「ありがとうディスタンス」を今年のスローガンに、隠岐の島ウルトラマラソンが2回の中止・延期を経て3年ぶりに開催されました。今回で15回目の開催。私にとってはボランティア1回を含め連続6回目の大会でした。隠岐に縁があるマラソンランナーの川内優輝さんも毎回出場されています。コースのほとんどが標高差 100m~200m の山々が連続するコースで、近年は高温・多湿にも悩まされながらの過酷なレースです。川内選手もあいさつで、「この大会でゴール直前に倒れて救急車で運ばれたことがあります。絶対に無理はしないでください。」と注意喚起していました。私も後半は軽い熱中症のような症状となりました。かなりペースダウンしたものの、なんとか50キロの部5回目の完走を果たしました。



しんどくて走れなくても、走ってしまうのが隠岐の島ウルトラマラソンの良さでもあります。数キロごとにある給水・給食所(エイド)を、中高生をはじめとしたたくさんのボランティアの方が運営し、選手が近づくとゼッケンから名前を確認して、遠くから「〇〇さん、ナイスラン。おつかれさま。」などと声援を送りながら、給水所では一生懸命おもてなしをしてくれます。沿道では子どもからお年寄りまでたくさんの人が応援してくれます。各家庭に配られる選手一覧と旗を片手に、ランナーの名前を呼びながら声援を送る人。看板や横断幕をつくって応援する人。太鼓を叩いたり、踊ったり、音楽を流したり奏でたりして応援する人・・・なかでも隠岐の島ウルトラマラソンは私設のエイドが多いのが特徴です。ランナーを上げまし、もてなそうと思いいのものを用意してランナーを待っています。飲料水、飴、パン、おにぎり、果物、チョコ、ゼリーなどをはじめ、絞った果物ジュースやケーキ、たこ焼き、焼き鳥もこれまでにありました。ラスト10キロの岬コースは、夕方で海風も吹くことから肌寒く感じることもあります。そのため暖かいコーヒーをふるまうエイドが出てきます。疲れた身体を気遣った甘い卵焼きに暖かい味噌汁をふるまってもらったこともあります。エアサロンプラスもあちらこちらで差し出されます。

ラスト10キロほどになると、声援が「頑張れ」から「おかえりなさい」に変わってきます。長く続く山道の連続を走りながら隠岐の島を一周し、ゴール会場近くまでよう頑張って帰ってきたねという意味です。

今回は、感染症対策で、声を出しての応援やランナーに近づきハイタッチする行為などは禁止とされ、ランナーもエイドではセルフサービスとなっていました。もちろん私設エイドは禁止。しかし、隠岐の人はそれを守りながらも、できる最大限の工夫や配慮をして応援をしてくれました。そういう意味では応援などは例年よりさみしさを感じることもありました。これまでの大会より温かい気持ちがより伝わってきました。物理的なディスタンス(距離)は感染症対策からも大事ですが、心の距離は感じませんでした。

毎回ランナーには島の小学生から手書きの激励メッセージが届きます。加えて今回は完走者に手作りメダルがありました。私のメダル裏面はろうそく岩の絵。もちろん一人一人絵は違います。

ある新聞でも、100キロの部で2位に入った雲南市の方の「拍手が力になり、歩こうと思って歩けなかった」という沿道の応援に感謝するコメントが紹介されていました。

ボランティアの方々がランナーの走りやすいように草木を伐採され気持ちの良い道路脇を、沿道の応援やふるまいをはじめ隠岐の人のやさしさや温かさに触れながら、また隠岐の景色の素晴らしさを堪能しながら走ります。山越えばかりでかなり過酷ですが、最後はもう少し走っていたい気持ちになっていきます。ゴール付近では、中学校や高校の吹奏楽部が祝福演奏してくれます。残念ながら試験期間中の時期で例年17時過ぎまでなので、私は1回も聴いたことがありませんが……。こうした中で、感動が島を一周し、ゴール会場で気遣いに対する感謝の気持ちとともに心が一つになっていきます。

最後 2 キロの町中に入った時、久しぶりの大会ということもあって交通整理にとまどい大渋滞が起きていました。しかし、誰一人いらだつようなこともなく、私も走りながら警官に「暑い中大変ですね。お疲れ様です。がんばってください！」と声をかけたら「ありがとうございます。がんばります。」と返してくれました。言葉かけが逆かなと思いつつながら心がほっこりしました。途中足が痙攣しうずくまっているランナーを少し介抱しました。あなたが遅れては申し訳ないから先に行ってくれと言われ走り出したのですが、途中で「ありがとうございました。元気になりました！」って追い抜かれました。そんな光景があちらこちらで見られます。励まし合い、支え合い、助け合いの中で大会が盛り上がっていきます。

私は2回隠岐に赴任しました。教え子や元同僚、友人や知り合いなどと数秒間の再開を果たしながら走りました。「先生おかえり！来年も待っているよ！」というメッセージに胸が熱くなる一日でした。



○「7月7日」

盧溝橋⇒

旧暦では、7月15日の夜には祖先の霊が戻ってくるとされ、その際に着せる衣服を機織(はたおり)して棚に置いておく習慣があったそうです。棚に機で織った衣服を備えることから「棚機(たなばた)」という言葉が生まれたとも言われています。



その後7月15日が仏教上の行事「盂蘭盆(うらぼん)」となり、棚機(たなばた)は盆の準備をする日とされ、1週前の7月7日に棚機は繰り上げられました。これに中国の伝説が結びつけられ、天の川を隔てた織姫(おりひめ)と彦星(ひこぼし)が年に一度の再会を許される日とされるようになり、7月7日が七夕と言われるようになったそうです。

天の川から川が連想されることから、7月7日が「川の日」となったり、二十四節気の「小暑」つまり夏らしい暑さがはじまる頃でもあることから、「冷やし中華の日」にもなったりしています。

明るいイメージの多い7月7日ですが、この日が盧溝橋事件の日であることを認識している日本人はそこまで多くないと思います。

盧溝橋事件とは、日中戦争の発端となった事件で、1937年(昭和12年)の7月7日、北京郊外の盧溝橋で起きた日本軍と中国軍との衝突事件です。夜、日本軍が盧溝橋近辺の河原で演習していたところに銃撃があり、兵士が1名行方不明となりました。その後発見されましたが、散発的に銃撃があったことから、翌朝日本軍が中国軍を攻撃したことが、日中戦争のはじまりとなりました。銃撃が中国軍によるものかどうかは不明です。

1945年8月6日広島市に、同月9日長崎市にアメリカ軍が原子爆弾を投下しました。犠牲になった人々を慰霊するため毎年8月には平和記念(祈念)式典があります。また、8月15日は太平洋戦争の終戦の日であり、毎年全国戦没者追悼式も行われています。

一方、中国では、国恥(記念)日というものがあります。数年前に、国恥日はいずれも日本に関係しているとする記事を中国のメディアが取り上げたことがあります。

1つめは5月9日。1915年(大正4年)に日本が中華民国の袁世凱に対し屈辱的な21か条要求を突きつけ、その要求を受け入れさせた日です。2つめは9月18日。1931年(昭和6年)に柳条湖事件がおきた日です。これに端を発し満州事変がはじまりました。当時日本の首相は、島根県出身の若槻礼次郎でした。3つめが、7月7日の盧溝橋事件の日で、4つめが12月13日です。日中戦争により1937年首都南京が陥落した日です。翌日から日本軍による中国人の虐殺、いわゆる南京大虐殺がおきたとされています。

盧溝橋は、この地を訪れたマルコポーロが、著書『東方見聞録』で「世界中のどこを探しても、匹敵するものはないほどのみごとな橋」と記録したことから、「マルコポーロブリッジ」の別称もある橋です。約15年前にこの地を訪れましたが、今でもマルコポーロの言葉を彷彿させる橋でした。それより前の2001年10月に小泉純一郎首相がこの地を訪れ、現職の首相として初めて中国の国民の前で頭を下げるという歴史的な出来事がありました。この約1か月前の9月11日にアメリカで同時多発テロがおき、多くの人々が犠牲になった直後でした。

2016年5月、オバマ大統領が広島に訪問し、広島記念公園で献花したことは記憶に新しいところです。ちなみに、12月8日は太平洋戦争の開戦記念日ですが、アメリカにとっては真珠湾攻撃を受けた日、「リメンバー・パールハーバー」として戦争の合い言葉にもなりました。

被害者はそのことをずっと忘れません。逆に加害者側はその出来事を同じようには覚えていないことが多いことは否めません。いじめもそうです。三高生、掛高生には、相手を傷つける人でなく、相手を気遣うことができる人になって欲しいと強く思っています。



○「1学期終業式講話」

隠岐養護学校公式インスタグラムより転載 →

この1学期、みなさんの高校生活の大切な教育活動が、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を少なからず受けました。こうした状況がもう2年半も続いています。過酷な状況の中にあっても、自分を律して、大変落ち着いて学習や部活動に取り組んでくれたことに感謝しています。

学校というのは、決まった時期に学校行事や式典、また部活動の大会や発表会などが行われることで、時の移り変わりを感じ、社会生活がきちんと送れていることを認識する場であり、また自分が社会の一員であるということを実感する場でもあります。

また、高校時代は、自立した大人となるために、家族や親戚以外の、同年代との付き合いや地域を含めた大人との関わりを通して社会性を身につけていきます。学校は、みなさんにとって大切な場所であるということ、今一度しっかりと感じるとともに、その場をみんなで守って欲しいと思います。端的に言えば感染症対策をしっかりとやっていくということです。

人は、とかく見えない不安や恐怖にとらわれたとき、同じ人間をおやみに脅威に感じたり、攻撃の対象と考えたりすることがあります。いらだちを人にぶつけてしまうこともあります。でもそういう時だからこそ助け合うことができるのも人間です。「人間性」を良い形で発揮できるかどうかは自分次第です。ぜひ気遣いの細やかな素敵な高校生になってください。

校長室だよりでも書きましたが、6月に3年ぶりに開催された隠岐の島ウルトラマラソンに参加しました。今回ボランティアを含め6回目の参加でしたが、私がウルトラマラソンに参加したのは、当時勤務していた隠岐養護学校で働く先生たちが、素敵な大人の姿を生徒に見せることが特別支援教育のひとつだと考え、いろんなことに挑戦する姿、何事にも真摯に取り組む姿、こまやかな気遣いをする姿を生徒に見せておられたことに感銘を受けたからです。

当時私は教頭だったのですが、特別支援学校にこれまで勤務したことがなかった自分に、そして授業をするわけでもない自分に何ができるのかと考えた結果の一つとして、ウルトラマラソンへの挑戦、苦手なマラソン克服に向けて練習をしっかりと積むことへの挑戦を決めました。

2年前に大会が中止になってから、自分で決めた大会が再開されるまでの練習ノルマが、年明けからの感染拡大などの影響もあり5月中旬時点で達成がほぼ難しい状況になっていました。練習ノルマは休日中心に年間1200kmとしていました。ほぼあきらめ、自分への言い訳を考える日々が続きました。しかし、5月下旬から思い直し、平日早朝練習をするようにし、なんとか大会直前でノルマを達成できました。あきらめず挑戦しようと思い直したのは、県総体で見た生徒のみなさんの熱いプレー、あきらめない姿勢、やり切ろうと挑戦する姿、はげまし助け合う姿を見たからです。自分はずかしく感じ、思い直しました。自分に課したノルマを達成できなかつたら、完走率の低かった今大会では完走できなかったかもしれません。

3年生の皆さんは、受験・進路決定に向けた「本気の夏」を迎えています。努力を重ねる素敵な3年生の姿を1・2年生に見せてください。2年生は、部活動や学校行事などの中心的な役割を担っていきます。素敵な姿を1年生に見せてください。1年生は高校生になり自立していく姿を地域の方や中学生に見せてください。そして全学年その素敵な姿を保護者に見せてください。きっと応援団が増え、仲間も増え、自分の力となって返ってくるはずです。リーダーとは人に良い影響を与える人です。みんながリーダーとなる学校であって欲しいと思います。

みなさんにとって、この夏休みが有意義な日々になることを願って、終業式の話とします。

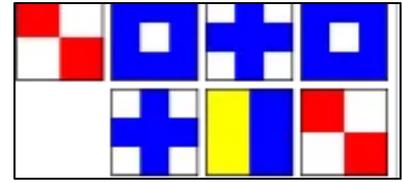
※写真は、隠岐養護学校の先生です。今大会、隠岐養護学校ののぼり旗を背負って50キロを完走されました。在校生はもちろん、卒業生や保護者も勇気をもらったと思います。地域の方やランナーの方たちは、きっと学校の応援団になってくれたと思います。部活動なども同じだと思います。その活躍や取り組みは、きっといろんな人に勇気と感動を与え、学校やそれぞれの応援団を増やすことにつながっています。





○「英雄ネルソン」 船から船への送る信号旗で「DUTY」と読む ⇒

これまで校長講話は何回聴いたことでしょうか。私は、教員になってからも含めるとおそらく300回以上だと思います。一番印象に残っているのが「ホレーショ・ネルソン」に関する講話です。彼は、トラファルガーの海戦で勝利した、ナポレオンからイギリス



を守った海軍提督です。彼が、信号旗を使ってイギリス艦隊の水兵に送った言葉が、「英国は**各員がその義務を尽くすことを期待する**」(England expects that every man will do his duty)で、イギリスの故ダイアナ元王妃の地雷撤去運動にも影響を与えたとされる「ノブレス・オブリージュ」の考えにもつながっているとされます。日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を破った東郷平八郎もこの言葉に影響を受けたとされ、「**各員一層奮励努力せよ**」と信号旗(Z旗)で激励しました。

「高校生として努力せよ」という講話がされたわけではありません。校長先生は世界史の先生で、彼の生い立ちから、功績、歴史的背景などを長々と話されました。「この講話から校長先生が言いたいメッセージはなんだろう」と、長い講話の中で自分なりに思考を繰り返しました。おそらく20分近くたった最後に言われた言葉が、「言いたいのは、受験生は寝ると損(ネルソン)だということです。」でした。メッセージとネルソンの功績等とはほぼ関係ありませんでした。

なぜこの講話が印象に残ったのか。落胆と疲れが一気にやってきたからだと言えませんが、一番は長時間講話が続く中で、自分なりにこの講話に込められたメッセージを思考し、話の中から探ろうとしていたからだと思います。また、思考の方向性と最後の言葉とに大きな差があったからだと思います。話は違いますが、高校の時数学が苦手でした。そんな中高2年の時に教えてもらった先生の授業がとてもわかりやすく、定期試験でも高得点がとれました。しかし、模擬試験での成績は一向に伸びませんでした。

学習には、「知る」→「わかる」→「深める」の過程があると思っています。先生の授業はわかりやすいというのは一見良さそうですが、「知る」から「わかる」過程で思考が深まっていないと、つまり教師がわかるまでを丁寧に導きすぎると学力向上にはつながりにくいと思っています。また、「知る」から「わかる」過程を公式化して自分の中で「わかる」状態にした場合、公式にあてはめることで思考を最小限にとどめているため、わかった時の感動も少なく、そこから新たな疑問や問いも沸いてきません。「知る」から「わかる」過程で、どれだけジレンマ(葛藤)を味わい、思考をしたかが大事です。そうでないと学びが暗記的になってしまいます。「わかる」から「深める」過程、探究にジャンプするには、「わかる」過程での思考の量と質が大事です。

探究や、思考・判断・表現というような言葉が、今の教育のキーワードになっています。学びには感性が大事だと考えています。感性は、探究や思考を繰り返すことで磨かれていきます。「なぜだろう」という疑問から、調べたり、深めたり、考えたりしていくことで学力が身につけていきます。あたりまえのことをあたりまえと思わず、感性をさらに磨き、主体性を養ってください。

「あたりまえ」の反対は、「有り難い」です。あたりまえでないことに気づけば、感謝の気持ちにつながります。人生や学びを豊かにしていくには、いかに「あたりまえ」のことが、「あたりまえでない」ことに気づけるかだと思います。2学期が有意義なものになることを期待しています。

*「ノブレス・オブリージュ」とは、財産、権力、社会的地位の保持には義務が伴うという考え。



○「謙虚」

秋桜（コスモス）の花言葉は、謙虚、調和 ⇒

「感動、感謝、気遣い」、「健康管理、換気、気遣い」など、Kの頭文字で始まる3つの言葉を使って、これまで講話や校長室だよりなどで話をしたことがあります。



以前顧問をしていた高校のソフトテニス部の部旗には、「感動、感謝、謙虚」とありました。勝っても負けた相手に「敬意」を払い、負けても言い訳したりせず「謙虚」でいることが大切だという意味と理解していました。

三刀屋高校の校歌には、「われらの三高ここにあり。ひとしくともに誇るべし。」とあります。自慢は、単に相手に対して行う行為。誇ることは、他人から見て価値があることを、自分自身も讃えながら「謙虚」な姿勢で示すことだと思っています。

最近、「**謙虚さは慎重さにも通じる**」と感じることがあります。うっかりミスが増えたからです。ミスをするのは、単なる集中力の欠如に加え、特性や障がい、病気や加齢などが原因の場合もあります。しかし、私の場合ふと自分自身を見返すと、あたりまえのことをあたりまえと思い感謝の心を持っていなかったり、少し高飛車だったり…謙虚さが薄れ慢心している自分に気づくことがあります。

人は生活をして行く上で、人、物、環境などにおいて、良いことも悪いこともあります。全てのことをあるがままに受け入れることは難しいものです。ですが、これを受け入れていくことが、「感謝」すること、「謙虚」な気持ちでいることにつながると思っています。誰かにぶつけたり、言い訳を考えたりすることでないと考えます。

個人データの流失などの人為ミスが報道等で見聞きすることがあります。もしかしたら、個人や組織の「謙虚さ」が薄れていたから起きるミスかもしれません。

3Kではないですが、人は、「かきくけこ」を意識すると豊かな人生を送れると言う人がいます。「か＝感動・感謝、き＝気遣い、く＝工夫、け＝謙虚、こ＝克己、向上心」です。

始業式の講話で話をした「感性」が、こうしたことの土台にあると思っています。謙虚さがなくなるのは、いろんなことがうまく行っていたり、満たされた生活をしていたり、年を重ねて物事になれたり年下が多くなったりするうちに、それがあたりまえになり慢心してしまうことから始まると考えます。楽な道や近道ばかりを追い求めると、「有り難さ(ありがたさ)」を忘れ「感謝」の気持ちが薄らいでいきます。そして「感性」が衰えていくと、美しいものを美しい、醜いものを醜いと感じられなくなります。人を傷つけても感じなくなり気遣いもしなくなります。物事を追求したりもしなくなります。向上心に乏しい自分の価値観がなによりも優先するようになり、その価値観を人に押しつけるようになりたりもします。そうなってくると、危険が身に迫っていても、それを察知する力が失われていき、人も離れ、結果的に自分が不幸になっていきます。

隠岐の島ウルトラマラソンを走る時は、必ず背中に「克己」と書かれたTシャツを着て走ることにしています。己に克つ。自分自身に勝つ。それは、人に勝つことよりも大事なことは、傲慢にならず慢心せず謙虚でいることの裏返しと思っています。



○「お疲れ様」

分校体育祭の様子 →

本校の学園祭が終わった時に、「お疲れ様」という言葉をあちらこちらで耳にしました。分校の体育祭は、1学期の終業式前でしたが、この時も「お疲れ様」という言葉をあちらこちらで耳にしました。



「お疲れ様」という言葉を私たちは日常よく使います。校内教職員間の公用メール文頭には、定型句的に「お疲れ様です」というのをよく使います。教頭時代に、校長先生あてメール文頭に、この「お疲れ様です。」という言葉を使っていいのか迷ったことがあります。少なくとも「ご苦労様」ではないなどは思いつつも、文頭にはどういう言葉が適切か悩んだことを覚えています。

ある新聞で、50代の編集委員のコラムに次のようなことが書かれていました。

「20代前半の記者(部下)に『今朝からがんばっておられましたか、なにかめ切が近いですか。』とエレベータで声をかけられた。なにか違和感を覚えた……。』というものです。一見なにげない、問題のない普通の会話のようにもみえます。丁寧語も使っています。でもしっくりこない……。という筆者の感想に共感しつつも、その理由がはっきり浮かんで来ませんでした。おそらくは「がんばる」という言葉だという筆者の感想から少し考えてみました。

例えば、社員が社長に「今日はがんばっていますね」というのは適切でしょうか。社長が社員に使う言葉としては違和感はありませんが、社長と社員の関係性から考えると、その逆は少し違和感があります。がんばっているのを評価するのは社長の方でないかと思うからです。この会話では、社員が社長を評価する感じにはなっていないでしょうか。編集委員と若い記者の会話も同じだと考えます。今の時代、相互評価も必要かもしれません。また、そのような微妙なニュアンスまで考えていたらコミュニケーションが活発化しないと思う人もいるかもしれません。しかし、昭和生まれの私にはやはり違和感が残るのは否めません。

「ご苦労」という言葉を、昔時代劇でよく耳にした覚えがあります。だいたい、殿様的な人が、家臣に言う言葉だったと思います。「苦労をかけましたね」という意味合いのある言葉で、頼んだ側、命令した側の言葉ということでしょうか。教頭時代のある時、校長先生が「先に帰るね」と声をかけられた時、「ご苦労様でした」と言いかけて、「お疲れ様でした」と言い直したことを覚えています。しかし、宅配便の方に荷物を届けていただいた時に、まれに「ご苦労様でした」と言うことがあります。日本語はむずかしいなと思います。

山陰中央新報のこだま欄に2回にわたって分校生徒のコラムが掲載されました。コミュニケーションの重要性の話、友人の言葉で救われた話がありました。広辞苑をひもとけば、言葉にはいろんな意味があることがわかります。すべて覚えて使い分けることはまず無理です。差別的な用語も一緒に、すべて覚えて使わないようにすることには無理があります。相手を思い気遣って言葉を選ぶことを心がけるとともに、その場にあった言葉かどうかの判断ができる感性を磨きながら、コミュニケーションを通じてお互いに元気や勇気がもらえるようにしたいものです。



○「掛合中学生徒さんの学校訪問」

⇒講話スライドの一部

9月14日に掛合中学生徒さんが三刀屋高校を訪問してくれました。校長室だよりを読んだのでいろいろ話を聞きたいというものでした。関心を寄せてもらったことに感謝感謝です。講話の中で使ったスライドの一部が、山形県の山寺の風景です。

ここはどこでしょうか？



この風景から「閑さや 岩に沁み入る 蝉の声」という句がつかれる感性のすごさの話をしました。先日聞いた講演の「これからの社会で必要な武器の一つが感性だと思っています。」という話の紹介で、このスライドを使用しました。

講話は、掛合中学生徒さんから事前にいただいた 11 個の質問について答える形で進めました。とても真剣に約 40 分間講話を聞いてくれるので、申し訳ないと思いつつも5分も延長してしまいました。

質問の一つに「貴校として地方創生、島根(雲南)の形成者育成の視点での取り組みを教えてください。」というのがありました。

講話では「地域に関わる学習を通して、あたりまえのことがあたりまえでないことに気づき、島根や雲南に、そして働くことに誇りをもつようになっていくと考えます。まずは気づける感性を磨くことが大事。だから授業や探究学習を大切にしたい。また、こうした学習を深めていくことは、地域貢献にもつながっていくので、JRC部を中心にボランティア活動に参加する生徒が増えつつあります。地域の方々にその活動や活躍を応援してもらったり、認めてもらったりする中で、自信をつけ、コミュニケーション力だけでなく、主体性が養われていく生徒も多くなります。」というような話をしました。このことは分校生徒にも大いに言えることです。

中国の王羲之の言葉に、「非人不佞」というのがあります。私は、「人権意識の希薄な人にふるまいを語っても意味がない」と解釈しています。これになぞらえて、「あたりまえのことをあたりまえとしか見えない人、あたりまえでないことを有り難いことだと考えて感謝ができないような人に感性を磨けない」と考えています。

学校で、報告・連絡・相談を徹底することは大事であり、あたりまえのこととしがちですが、報告しなさい、相談しなさい、それがあたりまえの姿勢だと逆にそれが徹底しないというようなことも講話で話しました。報告・連絡してくれてありがとう。相談してくれてありがとうという気持ちを持つことが、徹底にもつながるということです。

この講話の最後に、先日聞いた講演から、自己肯定感を高めるための話をして終わりました。「やる気を出すために、人との比較でなく自分との比較をすること。クラスで何番でなく、自分が前よりどれだけ成績が上がったかの視点が大事。私はマラソンを通してそれを特に実感しています。」

今年の12月、久しぶりに国宝松江城マラソンがあります。第1回目の目標は完走。へろへろになりながら制限時間内になんとかゴールできました。第2回目の目標はサブ5(42.195kmを5時間以内で完走すること)。なんとかぎりぎり達成できました。全体順位や年代別順位で見たら全然だめですが、目標を達成できたことに自信がつかれました。年齢をどんどん重ねていますが、今回の目標はサブ4.5として努力を重ねたいと思います。



○「四国の魅力①」 ひょうたん島周遊船から徳島市の眉山(びざん)を臨む⇒

10月に本校2年生が四国に行きます。台湾研修旅行の予定でしたが、コロナ下のため今年も実現することができませんでした。しかし、一昨年度は全面中止、昨年度は県内の日帰り2日間での実施であったことを考えると、県外2泊3日の研修旅行ができること、尽力いただいた関係教職員や何度も調整していただいた旅行者の方、生徒、保護者の皆様の理解に深く感謝するばかりです。



私をはじめ四国に足を踏み入れたのは大学受験の時でした。旅行が今ほど盛んでなく、中学校の修学旅行で新幹線に乗って感動した時代で、高校では研修旅行もなく、少なくとも私は県外と言えは都会地に行くことがほとんどでした。

出雲から高知までの道のりは長く、岡山まで列車で4時間、そこから宇高連絡船の出る港のある宇野までさらに1時間。連絡船に1時間乗ったあと、高松から高知までさらに列車で4時間、合計10時間以上かかりました。1日かけてやっと到着する感じてした。それが、今や高速道路を使えば、高知までその半分の時間もかけず行くことができます。本当に便利な時代になりました。

はじめて四国の高松に着いた時は、空が高く感じたことを覚えています。また、高松駅が最終終着駅で一畑電鉄の大社駅のような感じてあったこと、讃岐平野の山々が出雲平野で見る山並みの感じと違うことなど、受験の緊張感も忘れ、見るものすべてに関心が行き、最初だけは10時間以上の道のりも長く感じなかったことを覚えています。

今回の研修先一つでもある香川県の琴平町にある金比羅宮に行ったのは大学4回生になった時でした。夜明け前に高知を出て、金比羅さんに着いたのが朝8時くらいでした。「こんぴらさん」で有名な金刀比羅宮は、古来より海の神様、大漁祈願・商売繁盛などの神様として信仰をあつめてきた神社です。参道口から御本宮までは785段、奥社までは1,368段の石段があることでも有名です。お金を出せば駕籠舁(かごかき)さんが御本宮まで運んでくれます。その駕籠に○が3つ、4つ書いてあるのを見てなんだろうと思いました。答えはすぐわかりました。朝から何回お客を上まで運んだかの印だったのです。私はといえば、785段で疲労困憊。2度目に訪れたのがコロナの広がる直前の令和2年1月。その時はじめて1,368段登って奥社まで行きました。

四国と言えは、お遍路さんも有名です。阿波(徳島県)の1番札所を最初に、弘法大師(空海)ゆかりの八十八ヶ所の霊場を旅する人のことです。四国ではあちらこちらで目にします。お遍路さんがかぶっている菅笠(すげがさ)には、「同行二人」の文字が書かれています。一人で歩いている人もいるのにどういう意味だろうと不思議に思っていました。一人は自分、そしてもう一人は弘法大師ということの意味すると知ったのは教員になってからでした。弘法大師様と二人で巡礼の道を歩く、それがお遍路なのです。4回生になって卒業論文や就職活動・試験の合間に気分転換をかねて少しずつ八十八ヶ所巡りをしましたが、結局半分もいかず、もう35年以上中断中です……。



○「イノベーション」

徳島の夏の風物詩「阿波踊り」⇒

10月の本校2年生の四国研修旅行の行き先は、徳島と香川です。中学校の修学旅行や高校の研修旅行の行き先は、これまで多くの学校で企業や大学、歴史・文化遺産、遊興施設などが集中する都会地に設定してきました。コロナ下で、県内や地方に目を向ける学校や人も多くなり、その魅力や価値が再発見されてきています。



そもそも、現代社会においては、他者による評価、つまり社会が創り出した価値尺度によって、自己実現の達成度を評価してきた部分があると思っています。例えば、大企業の社長になることで成功したと自他ともに思うことなどです。他者評価が柱であり主体であるがゆえに、社会的に価値が高いとされるものが多く集中する都会地を人々がめざしてきた側面があるのではないのでしょうか。「東京で成功したい」という言葉を昔よく耳にしたのは、成功の尺度や要素、機会が都会地に多くあることの証左だと思っています。

しかし、これからの情報化社会では、人工知能(AI)により必要な情報が必要な時に提供され、その情報を上手に使いながら課題や困難を克服していく社会となっていきます。その社会において大事なことは、どこにいるかよりも、情報を正し的確に得て使うことだと思います。また、主体的に様々な分野のヒト・モノ・コトに関わりながら、分野を超えて様々な知識や情報を横断的に共有する人々がチームとして協働し、新たな価値を創出できるかだと思います。その中で見出した価値により、各個人が自己実現の判断ができるようになることが大切だと思います。

言いたいことは、既存の価値のもとで動くのではなく、これからの社会では、自らが、あるいはチームで価値を創り出して行こうとする姿勢が大事だと言うことです。必ずしも都会地でないと価値の創造ができないことはないこと。つまり、場所でなく人が大事だと考えています。

先日島根大学材料エネルギー学部が正式認可されました。物理や化学を学ぶ生徒が進学先に考える工学部系です。これは、島根から価値を創出して行こうとする強い姿勢のあらわれと思っています。島根大学のHPIには『エネルギー問題を解決するカギは「材料・素材」が握っていることを、あなたは知っていましたか？例えば飛行機。エネルギー効率のいい航空機エンジンが生まれるには、少ないエネルギー消費で高い性能を持つエンジン用の素材が開発できるかどうかにかかっています。「イノベーションの創出は材料が握る」と言っても過言ではないほど、材料の研究開発には、社会を大きく変える力があります。』と説明されています。

イノベーションは技術革新と訳されますが、モノ、しくみ、サービス、ビジネスモデルなどに新たな考え方や技術を取り入れて新しい価値を創り出し、社会に大きな革新をもたらすことです。

来月からノーベル賞が発表されます。ノーベル賞は、科学技術の発展や平和に貢献した人に贈られます。青色発光ダイオード(LED)の開発でノーベル物理学賞を2014年受賞された米カリフォルニア大の中村修二教授は徳島大学の出身で、地元企業の日亜化学工業で研究をされたことが開発のスタートとなっています。地方からの価値の創出です。生徒のみならずもいろんな価値を、再発見し、イノベーションを創出する人になってもらいたいと思います。



○「四国の魅力②」

徳島ラーメン「いのたに本店」にて撮影⇒

四国と山陰とは似ているところがあります。例えば、新幹線が通っておらず、寝台特急が未だに残っていることもその一つです。サンライズ出雲・瀬戸は東京から岡山まで連結運行しています。バブル期前後、高知県は国民休暇県構想を打ち出していました。リフレッシュリゾート島根だったと思いますが、同じような構想が島根県にもあったと記憶しています。高齢化率も上位を争ってきました。



バブル期の地域活性化は、箱物と呼ぶような美術館を建設して、著名な芸術家の作品を集めることで観光客を誘致するようなことが少なからずあったと記憶しています。その後の収益等を考えない、公共施設の建設に重点を置く政策を批判して箱物行政という言葉もありました。

今回2年生が研修旅行で訪れる徳島県名西郡神山(かみやま)町で活躍する認定NPO法人グリーンバレーは「日本の田舎をステキに変える！」をミッションに、ワーク・イン・レジデンス、サテライトオフィス支援事業、コワーキングスペースなどの事業を展開されています。

神山型と言われるワーク・イン・レジデンスとは、仕事を持ち、仕事を創り出してくれる人を誘致することに重きをおきます。例えば、一時的にでも制作活動に訪れる芸術家を呼び込む。そこでの滞在満足度を上げる。つまり、場の価値を磨く。そのために自費滞在する芸術家への支援策を講じる(お試し滞在施設の整備など)。やがて芸術家のつながりで様々なジャンルのクリエイターがやってくる。クリエイターたちが互いに知り合い、顔の見える関係を築くための新しいコミュニティづくりをしていく。このようなコンセプトで町づくりをし、町の発展をめざすのです。つまり、神山町では町の将来にとって必要となる「働き手」や「起業家」を逆指名しているのです。

神山町はIT企業の呼び込みでも成功しました。これが、サテライトオフィス支援事業です。IT関連企業を中心にサテライトオフィス設置だけでなく、本社を移転した企業もあります。iPhoneが発売された2007年には全国に先駆けて光ファイバー網が整備されたことによります。小川のせせらぎの中で普段着のままパソコンを開き仕事をする風景が神山スタイルです。来年度起業家たちが創る新しい学校、神山まるごと高専ができることもメディアで話題になっています。

グリーンバレーの理事、大南氏の講演を徳島であった研究大会で聴いたことがあります。演題は「『神山プロジェクト』～地域に誇りを持ち、創造力豊かな子どもを育てる～」の中で、創造的過疎という言葉が使われました。過疎を克服するのではなく、多様な働き方を実現できるビジネスの場としての価値を高める。過疎化問題とは、少子高齢化、人口流失の克服としてだけ捉えるのではなく、「雇用がない、仕事がない」課題の克服と捉えることだと理解しました。

「Café on y va」(カフェオニヴァ)」という店の話も印象的でした。丁寧に暮らすをモットーに、週休3日で年間60%が休み。休みは個人のプロジェクト(趣味等)に挑戦し、そこから新たなビジネスを創出していく。ワーク・ライフ・バランスとは、時間と仕事(夢)のバランスと認識しました。

図書館も独創的。借りる図書館でなく預ける図書館。人生で影響を与えた3冊を厳選して町民が収蔵する。収蔵した人のみ図書館の鍵がもらえるというもの。預けるのは人生の転機となる3回のみ。卒業、結婚、退職の時とのこと。隠された図書館とも言われるそうです。

「人は見たものしか信じない。神山は、問題だらけで成り行きの未来だが可能性を感じる場所、上がりのない双六をしている感じ。」とは大南氏の言葉。神山で学びがありますように…。



○「四国の魅力③」

鳴門の渦潮→

「北の風3ノット、潮流は南向き2ノットの中で船が航行していたとする。風向きと潮流(潮の流れ)の説明で正しいものを選びなさい。」という問題を、掛高基礎力テストで出題しました。

解説では、危険なことの察知として向きを考えるというような話をしたと思います。具体的には次のとおりです。

*風はどの方角から吹いてくるか → なにかが飛んで来る方向、(ヨットが風を受ける方向)

*潮流はどの方角に流れていくか → 流されていく方向

ちなみに、海流は広い海を常に一定の方向に流れる大きな流れ。潮流は、鳴門の渦潮のように潮の満ち引き(潮汐)により、海水が周期的に変わる流れ。海水浴場での事故につながるのが離岸流で、海岸に打ち寄せた波が沖に戻ろうとする時に発生する強い流れです。

昔ヨット部の顧問をしていて、瀬戸内海であったレースに引率したことがあります。潮流が早く、スタートしてヨットが風を受けているのに、進行方向が潮流と逆だったため、スタートラインから後退していったことがありました。結局レースは不成立となりました。関門海峡では、「E7↓」のような海上標識を見ることができます。「E:潮流が東向き、7:流速7ノット、↓:流れが次第に遅くなる」という意味です。1ノットは、1時間に1マイル(約1,852m)航走する速度です。水産高校で見ると手こぎのカッター(大型のボート)は、こぎ手にもよりますが、約4ノットの速さが出るそうです。少し頑張って歩く速さくらいでしょうか。7ノットなら、一生懸命漕いでも後退することになります。源平合戦の壇ノ浦の戦いで、潮流を味方には源義経が勝利したことは有名な話です。潮流の早さは10ノットにもなるという瀬戸内海の難所は、「一に来島、二に鳴門、三と下って馬関瀬戸(=関門海峡)」と昔から船乗りたちに恐れられてきたそうです。

私が大学時代を四国で暮らした時期は、瀬戸大橋も、明石海峡大橋も、尾道今治ルールの来島海峡大橋も開通しておらず、必ず船で四国と本州を行き来していました。鳴門大橋はたしか大学2回生の時に開通しました。橋をはじめて渡った時、その橋の大きさに感動したことを覚えています。橋にばかり関心が行き、渦潮をきちんと見たことは正直ありませんでした。約10年前にはじめて渦潮観光船に乗り、間近で渦潮をみました。自然の偉大さを目の当たりに、ただただ感動しました。

徳島と言えば、鳴門の渦潮が有名ですが、一番は阿波踊りではないでしょうか。約10年前にはまってコロナ下となるまで毎年観に行っていました。江戸時代から約400年続く伝統芸能で、「踊る阿呆(あほう)に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損々」と言ってグループで踊ります。

他には、「すだち」や「鳴門金時(さつまいも)」なども有名です。すだちは研修旅行で行く神山町で商業生産が盛んになったことがはじまりで特産品になったようで、全国の生産量の9割以上を占めます。また、研修旅行の時期は、ちょうど鳴門金時の収穫期です。歴史の教員としては阿波藍にも関心がいきます。藍染めの青い色は、「JAPAN BLUE」として世界的にも有名な日本を代表する色で、サッカー日本代表のユニフォームも「ジャパンプルー」です。吉野川の氾濫を逆に利用する形で、江戸時代徳島藩主蜂須賀氏が奨励して盛んになりました。

他県のことを知ることは、ふるさとの再認識、再発見する契機にもなると思っています。





○「地形図」平成25年度島根県高校入試→
毎年島根県の高校入試社会科の地理問題で地形図が出題されています。右は(※裏面参照)、平成25年度高校入学者選抜の問題です。徳島市を題材にした出題で、「阿波おどり会館」に訪れる設定で問題が作成されています。

これまで多くの地域の地図が入試問題に使われてきました。行ったことがある場所もあれば、見知らぬ場所もあります。見知らぬ場所が出題された時は、その場所へ行ってみたいくなる時もあります。

その一つが、さくらんぼ東根駅のある東根市です。果物が駅名になっていることに惹かれたからで、ここではマラソン大会も開催されています。いつか大会に出場することで訪れてみたいと思っています。

受検生は、地形図から読み取れることから一生懸命問題を解くのですが、中には地図を眺めながらそこに広がる景観を再構成する読図能力が必要となる問題もあります。徳島市眉山の問題や、数年前の函館山の問題などは、行ったことがあるので、景観を思い浮かべながら地図を見て解いてみることができました。その逆は…。

最近では、スマホで地図を衛星写真やストリートビューで見ることができます。また、カーナビでは立体的、つまり3次的に地図を見ることもできます。このため、2次元の地形図から3次元の景観をイメージすることができる力が、難しく言えば想像力や推理力が弱くなっている人もいるかもしれません。そういう意味でも地理の学習は大事です。

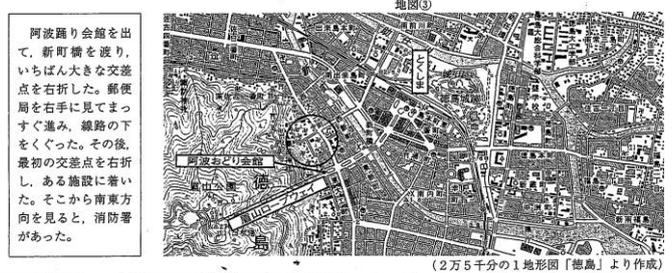
若い頃に車で出かける時は、今のように出発時にカーナビに行き先をセットしてから出発するのではなく、ドライブマップで行き先までの道を下調べしてから出発したものです。マップではわからない便利で大きな道があったり、近道があったりします。その発見もドライブの醍醐味の一つでもありました。また、道を間違えて思わぬ発見をしたりすることもありました。

家族旅行や受験旅行などで県外に列車で行く時は、時刻表などでスムーズな乗り換えや最適な路線などを調べてから出発しました。乗り換え時間がどれだけあればいいかわからず、乗り換えに失敗することもありました。それが旅のおもしろさでもありました。今は、スマホですぐ最短で最適なルートを検索することができます。時間の短縮、失敗のない旅行にはつながりますが、それでよいのか考えてしまうこともあります。行く先の立ち寄り先も同じです。いろいろ調べてから行かないと、昔は今ほど簡単に情報が手に入りませんでした。今は、関心がある場所だけでなく、インターネット等でみんなが良いとするところをなぞっていく感じにもなっています。

研修旅行に行く際も、事前にどれだけ行く場所に関心をもつか、また自分なりに調べていくかで学びや思い出も全然違ってきます。登山も、頂上に立つことだけが目的ならヘリコプターで連れて行ってもらえばそれで終わりですが、それでは感動はあまりなく、思い出にも残りにくいと思います。「景色がきれいだな～」くらいで終わると思います。登山の準備、登山のしんどさなどを含めた頂上の景色なら、雲が多くて景色が十分に楽しめなくても思い出に残るはずですよ。

学習、部活動、旅行…なんでも主体的に、つまり自分で取り組んでいく姿勢が大事です。簡単さや便利さだけを追い求め、結果だけを重視して過程を軽視すると、得るものは少ないかもしれません。研修旅行が良い学びや思い出につながることを願っています。

問9 下線部(α)について、みなさんは発表後、実際に徳島市にある「阿波おどり会館」を訪れてみた。地図③はその時に使用した地形図である。これを見て、次の1～3に答えなさい。
2 「阿波おどり会館」を訪れたみなさんは、「眉山ロープウェイ」に乗った。頂上に向かう車窓から○印の地域を見たときの写真として最も適当なものを、次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。(写真省略)
3 みなさんは、「阿波おどり会館」から「とくしま」駅に帰る途中、ある施設に立ち寄った。次の説明文は、その道順を示したものである。みなさんが立ち寄った施設を答えなさい。(正解は、図書館)



〔地図③〕は、実際の掲載地図の上下各1/3程度を割合し、問題文等のレイアウトは、適宜変更している。



○「豊かさとは？」

研修旅行先ホテルでの夕食の風景⇒

第46回島根県高等学校演劇発表大会で、本校、分校がともに最優秀賞をとり、アベックで中国大会出場という快挙を達成しました。分校の演目は、「走れ！山月記」。キャストは分校の演劇同好会1名という一人芝居でしたが、スタッフである舞台監督、照明、音響、舞台の各係は本校演劇部10名が担う本校・分校のコラボ作品でもありました。そういう意味でも意義深い演劇となりました。



本校の演目は「ローカル線に乗って」でした。この演目では、豊かさとは何かを、木次線の存続と存在意義を昭和・平成へのタイムスリップを通して考える内容でした。

先月本校2年生の徳島・香川への研修旅行が終わりました。徳島県神山町がメインで、神山町で暮らす人・働く人との町歩きやワークショップ「神山町研修プログラム」で“自分らしい働き方とは？暮らし方とは？”について考える契機となることを期待した研修でした。

神山町は、都市圏のIT企業等がサテライトオフィスを置くパイオニアの町として有名です。しかし、見方を変えれば、スマホを含むITを使う環境が大きく変化しただけだとも言えます。スマホ等をあたりまえに使うIT社会から逃れることはできない前提があるとも言えます。その中で、ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)を最大限重視した町とも言えるのではないのでしょうか。

先日、伊豆に移住したある女性のドキュメンタリー番組を観ました。都会の広告会社で働いていたが、スマホを四六時中気にしていないといけな仕事だったため心身ともに疲弊し、休養のため伊豆の海に潜りに行ったそうです。その時スマホから完全に遮断された時間がとても心地よくて、そうしたら伊豆の自然が素晴らしく映って移住を決めたというものでした。

公演や講演等でよく「スマホの電源をお切りになるかマナーモードにしてください」と言われます。今回の演劇発表会では、「スマホ等の電源はお切りください」とアナウンスがありました。なにかとてもほっとした気分となり、上演中は完全に劇に没頭できました。マナーモード中に振動があると、その内容が気になり、かといって確認することもできず、目の前の公演等に没入できないことがままあります。しかし、完全に電源を切るには勇気がいることも確かです。だから主催者側から電源を切るという一択が示されたことは、スマホ社会に生きる自分にとっては、別な安心感を覚えたのだと思います。平たく言えば、即座に対応しなかったのは自分のせいではないという言い訳ができたということでしょうか。

最近、ある全寮制の高校の校長先生と話す機会がありました。学校の立地状況からスマホ等がつながりにくいこともあり、生徒のほとんどはスマホがないことに不自由していないとのこと。全寮制でもあることから、会話は直接することがあたりまえとなっているということでした。

演劇の場面では、スマホを持つ令和の女性が、昭和や平成時代のスマホを知らない乗客の乗る木次線の列車に乗り合わせるところから本題に入っていきます。知らないことがわかったり、知らない誰かとつながったり、スマホの生み出す世界は無限かもしれません。一方で、見えるはずの世界が見えなくなっていたり、深くつながっていきけるはずの関係が希薄のままだったりすることもあります。そこから、人間関係のトラブルがおきることもあります。

私たちは、普段言いにくいことをスマホ(SNS)で伝えることがしばしばあります。電話や会話はリアルタイムなので相手の事情に関係なく相手の時間を確実に使うことになりませんが、SNSなら相手の都合のよい時間に自分の考えを伝えることができます。そのため、遠慮がなくなることもあります。本校では、8日に人権・同和教育の1年生のLHRで、SNSを題材に「様々な価値観を尊重できる人になろう」というテーマを扱いました。気づける感性は養われたでしょうか……。



○「続 豊かさとは？」 椎葉村-仙人の棚田 (宮崎県観光協会HPより) ⇒ 「日本三大〇〇」というように、代表的なものを三つであらわすことがあります。例えば、日本三景。松島(宮城県)、天橋立(京都府)、宮島(広島県)は有名です。昔はインターネットもなかったので、趣味の切手収集などで日本三景を知り、切手を眺めては本物を見たいという気持ちになり、図書館で旅行雑誌や写真集を探したこともありました。サザエさんのエンディングで素敵な場所を知り、いつか行きたい気持ちになったものです。今は、インスタ映えという言葉があるように、スマホなどで容易に日本や世界の素敵な場所を共有することができます。日本三大夜景というのがあります。多くは、札幌市大倉山、神戸市摩耶山、長崎市稲佐山から見る夜景とすることが多いようです。それが世界三大夜景となるとなぜか、香港、函館、ナポリとなるようです。人の感性はまちまちだということでしょう。残念ながらナポリの夜景は見たことはありませんが、個人的には香港よりも函館の夜景が日本三大夜景と比べてもかなり素敵だと思っています。



先日、分校2年生研修旅行の事前学習で「島根を元気にする活動に取り組む視点とは」と題して県教委教育魅力化特命官の岩本悠氏の講演がありました。「海士町や隠岐島前高校の魅力化に取り組んだ際に、最初は自然があるとか、都会にないものがあるという点をアピールしてきた。実際来てみると思ったほどでないと思う人もいて、期待と実際に対する感覚の違いからうまくいかなかった。しかし、“ない”ことを売りにしたらそれがなくなった。発想の転換で見方は全く違ってくる。」という話がありました。「知名度が低く訪問者が少ない場所も、秘境と銘打てば人の見る目が変わるようになる。これも発想の転換。」という話もありました。ちなみに、日本の三大秘境は、合掌造りの集落が残る岐阜県の世界遺産の白川郷。清らかな溪谷にあるかずら橋で有名な徳島県の祖谷(いや)。最近知った場所でぜひ行ってみたいと思っている焼畑農業が世界農業遺産に認定されている宮崎県の椎葉村(しいばそん)の3か所です。

フリーアナウンサーの河野景子氏の講演を聴く機会がありました。相撲部屋である貴乃花部屋のおかみさんもされていた方です。貴乃花部屋は2010年から椎葉村で合宿をされました。景子氏の恩師が退職してこの村で教員のための心の教育をする塾をされていたことがきっかけだったそうです。日本人として、力士としてどんな生き方をしていけばいいのかを話して欲しいという依頼をしたそうです。条件は、東京で力士に話すのではなく、なにもない不便な椎葉村で話すこと。宮崎空港から大きい力士を車に乗せて狭く険しい山道を何時間もかけて行ったそうです。携帯もつながらないこの村で、自分や相撲と向き合う時間がとても有意義で、仲間同士の絆も深まり、力士は不満どころかまた行きたいと口々に言ったそうです。

本校演劇部が上演した「ローカル線に乗って」で、みんなで坂本九さんの「上を向いて歩こう」を大合唱するシーンがありました。私の初任地は隠岐でした。20代前半だったこともあり、また瀬戸大橋の架かる前の四国で大学時代を過ごしたこともあって、自分の力では本土に行けない不自由さや、フェリーが欠航するとスーパーから物がなくなるなどの不便さなどから、最初はカウントダウンカレンダーをつかって過ごす日々でした。一人で歩いて帰るような時に、よく夜空を見上げながらこの歌を口ずさんでいました。今でもスマホの朝のアラーム音楽にしています。ですが、隠岐での4年間は教員人生で大事なものをたくさんもらいました。隠岐に赴任した時に出版された岩波新書『豊かさとは何か』。今読んだらまた違う感想になるかもしれません。



○「自立とは？」

先日、海老原宏美さんの最期の講演を録画映像で視聴する機会がありました。映画「風は生きよという」の主人公でもある彼女は、映画の出演者紹介によると「1977年神奈川県出身。生後1年半で脊髄性筋萎縮症と確定診断を受ける。小学校から大学まで地域の学校に進学し2001年の韓国縦断野宿旅で障がい重度化、02年より人工呼吸器を使い始める。01年より東京都東大和市で自立生活を開始…」という方です。脊髄性筋萎縮症とは、体幹、腕、脚などの運動をつかさどる脊髄の細胞に異常が生じることで、筋力低下と筋肉萎縮が生じる病気で、乳児期の発症が重症化しやすく、自分の力で呼吸ができなくなるため人工呼吸器が必要となるそうです。この人工呼吸器からの風が生きよと言っているという意味での映画タイトルです。



人生の礎とはなにかという話の中で、「かわいそうな子でなく、少しでも社会の役に立つ子になってもらいたい。少しでも自立した人生を歩める子になって欲しい。」という親の願いや期待もあって、自立のためにがんばったことが人生の礎となったという話がありました。それは、自分にかける期待そのものが、自身の存在の肯定にもつながったという意味だと理解しました。

就職や進学面接や志望理由書の中で、「人の役に立ちたい」というフレーズをよく見聞します。ここで使う「人の役に立つ」の意味は、人に助けられている面と人の役に立っている面があるとすれば、人の役に立っているとの実感が大きい状況をイメージされているかもしれません。また、「ありがとう」と言ってもらえる仕事などがイメージされていることも多いと思います。仕事によっては、「人の役に立つ」が、「社会の役に立つ」とか、「ふるさとの役に立つ」というフレーズになることもあります。一方、人に助けられている迷惑をかけているという実感が大きいと、自己有用感や自己肯定感が低くなりやすいと思います。

しかし、役に立つことに大小はなく、またそれが誰かの助けを借りてなしえたことでも意味や意義はあると思っています。そもそも一人ですべてをなしえたり、誰かの役に立ったりすることはほとんどなく、組織やチーム等で取り組んでいることがほとんどです。

海老原さんの話を聞きながら、役に立っている実感があることも「自立」していることにつながると思いました。それは、必ずしも大小の問題ではないということも…。人の手を借りてできることがあれば、それはそれで意義があること。人の手を借りられる勇気をもっていること、それも自立の形の一つであるとあらためて思いました。人の手を借りるには勇気がいります。例えば、道を尋ねることも勇気がいります。でも、尋ねられたり、助けたりすることは、その人の自己有用感にもつながります。見方やとらえ方を変えれば、いろんなことや行為が人の役に立っているのではないのでしょうか。「〇〇してあげている」というような感情を持たず自然と助け合っている。それがお互いのエネルギーになっていくのが共生社会かもしれません。

文部科学省のHPIによれば、共生社会とは「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障がい者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。」としています。海老原さんは、「ここにいて良い条件をつくらぬ社会」と定義されていました。条件をつくと、条件にあてはまらない人を排除する社会になるということです。その意味を考えかみしめているところです。



○「自立とは？(つづき)」

国立教育政策研究所の所長をされていた徳永保氏による講演「グローバル社会を生きる力をどう育むか」を聴く機会が10年ほど前にありました。

内容を、理解した範囲で言葉を変えたり足したりしながら要約すると…

企業が売り上げの大半を海外に求める時代であり、そのため世界の国々の間でグローバル人材の育成と人材獲得競争がおこなわれている。人材評価の国際化もすすんでおり、米の飛行機メーカーではグローバル人材の共通評価がすでに導入されている。国際バカロレア資格もこうした流れの一つである。



アメリカの大学での学びは実践的なものが多く、大学でどれだけスキルや能力を身につけたかが就職での採用基準となっている。一昔前の日本は、労働力の質の高さを、スキルや能力でなく学歴や勤勉性に求めている、世界的にも勤勉性が高く評価されてきた。実際は、若年人口が多く、玉石混交でもやっていける時代で、スキルや能力のある人が評価されてきた一面もあったと思われる。今は、国内に就職しても海外で働くのがあたりまえの時代である。そのため、実践力のあるグローバル人材の育成が求められている。見方を変えれば、人材育成をしっかりとしないと、少子化のため、玉石混交ではやっていけない時代でもある。しかし、企業には昔ほど人材育成にける体力がなく、学校教育でも育成が求められている。こうした情勢の中で、日本の子どもたちの表現力は上がってきているものの、子どもが少なく、まわりの大人が様子を気遣ってくれるので、コミュニケーション力や自己決定力が低下している現状がある。例えば、「お腹が痛いから保健室に行きます」と言わなくても、顔色見て先生が「大丈夫？」と言ってくれたり、「保健室行きなさい」と言ってもらえたりするのが今の子どもたち。体調が悪くて学校に行こうか迷っていても、親が「体調が悪そうだから学校に欠席の連絡を入れておくね」と先走ってしまうことが多く、自己決定力がなくても過ごせてしまうのが今の状況。コミュニケーション力のないまま大人になると、親が会社に欠勤の連絡をする時代である。またこれに加えて子どものリアリティ(実体験)不足も関係しているのか、就職で重要視される論理的思考力やコミュニケーション力がないことを露呈する大学生が多くなっている。こうした状況の解決方法の一つとして、科学的根拠に基づく学習方法の研究である学習科学が注目されている。例えばある学校で、パソコンの文字を見せるのではなく、自筆の文字でプリントを配ることで、ミラーニューロンが刺激された例がある。ミラーニューロンとは、他人の考えていることがわかったり、他人と同じ気持ちにさせたりする脳内細胞のことである。ヘテロジニアス(異質なものを意識し提示することで、教育の本質である「まねぶ(真似る)＝学ぶ」ができるようになるのである。こうした学習科学の考えがこれからは重要となる。学習科学は、認知心理学や脳科学の知見を基礎にしつつ、効率的な学習のあり方などを研究する学問である一方で、学習者の主体的な取り組みを重視するものである…

このような内容でした。グローバル人材の育成をめざした国際バカロレアは、生徒の主体性を養う教育で、国際的視野を持つ人材の輩出をめざす国際的な教育プログラムとして、世界各国の大学入学資格を得ることができる国際バカロレア機構(本部:スイス)が提供するものです。鳥取県立倉吉東高校が山陰初の認定校に今年10月になったばかりです。

自立している人の特徴の一つに、頼まれたことだけをやるだけでなく、必要なことを自分で考えて主体的に行動できているかがあると思っています。それを磨くのが学習や部活動です…



○「道楽」

「道楽」を『広辞苑』でひもとくと、「①本職以外の趣味などにふけり楽しむこと ②ものずき ③酒やかけごとなどの遊興にふけること」とあります。その意味から道楽者、道楽息子という言葉もあります。あまりいい意味では使われていないようです。「道」がつく言葉はいろいろありますが、ここでは柔道、剣道、華道、茶道、武士道のように日本の伝統文化に関わるものに注目したいと思います。



この場合の「道」は、『広辞苑』の「道」の意味の中の、おそらく「方面、分野、そのむき、(使い方の例)その道の達人」になるのでしょうか。また「(道のりが転じて)人が考えたり行ったりする事柄の条理や道理」という意味もあるので、そちらも混じっているかと思います。

「道を究める」と言った場合の「道」も、修行や修練がともなう柔道、茶道などの「道」のイメージかと思います。修行や修練には「守・破・離」という段階をあらわす考えがあります。「守」は、師や流派の教え、型、技を忠実に守り、確実に基本を身につける段階。「破」は、師や流派にこだわらず良いものは取り入れて発展させる段階。「離」は、流派から離れ、独自の新しいものを生み出し確立させていく段階。

そういう段階を経ながら、つらく厳しい修行や修練の末に到達することを「道を究める」というのでしょう。厳しい道のりだったからこそ、やり抜いたからこそ見ることのできる新しい景色。それを楽しむ感動こそが「道楽」だと思っています。挑戦し、考え、努力を重ねたからこそその感情です。

学問や勉強もそうだと思います。「ローマは一日にしてならず」「学問に王道なし」…学校での勉強も、勉強道です。知識の習得だけでなく、主体的に思考したり判断したり表現したりすることを重ね探究していく中で、悩み苦しみながら努力を重ねていくことで、本当の意味で学んでいて楽しいと思える時がやってくるのだと思います。部活動も同じです。

サッカー日本代表の監督だったオシム氏は、考えて走るサッカーで日本サッカー界に旋風を巻き起こしました。サッカーは足でやるスポーツではなく、頭でするスポーツとし、ただ走るのではなく、試合で起きる様々な状況の変化に応じて、選手個々がどう考え判断するかが大事なスポーツとされていました。今のサッカー日本代表の久保健英選手も、スペイン留学で常に主体的に考えていないとついていけない練習で上達したという話を聞いたことがあります。何事も「待ち」の姿勢でなく、挑戦していく主体性、究めたいという志が大事だということです。

昔のイタリア映画に「道」というのがあります。はじめて観たのは40年近く前ですが、映画にかつてないメッセージ性を感じました。そのメッセージが何か見るたびに思いが変わる映画です。貧しいイタリアの沿岸部で暮らすジェルソミーナが、口減らしもあって旅芸人のザンパーノに売られるが、怒鳴られながらも芸人の仕事を覚えていく。そして、粗暴で酒好き、礼儀も優しさもないザンパーノに尽くすも、あることをきっかけにジェルソミーナが心を壊していく。そんな物語です。「道」の映画の音楽は、フィギュアスケートの高橋大輔選手がバンクーバーオリンピックで使っていた曲なので聞いたことがある人もいます。高橋選手は、銅メダルを獲得するまでのこれまでの厳しい道のりを思い出しながらこの曲で踊ったと思います。映画のタイトルがなぜ「道」なのか知りません。しかし、どんな道も前を向いて歩いていけば何かが見えてくるはずですよ。

先日国宝松江城マラソンに出場しました。いろんな選手のTシャツの言葉にも励まされながらなんとか完走しました。一番印象に残った言葉が「しんどさはやがて消える。あきらめた気持ちは一生残る。」という言葉でした。30キロ過ぎから何度もこの言葉が頭をよぎりました…



○2学期終業式講話「命の尊さ」

令和4年もあとわずかとなりました。コロナ禍の生活も3年が経ちました。そんな中、我慢強く感染症と向き合ってくれていることに感謝するばかりです。2学期は、学校行事や部活動ではつらつとした姿を見ることができ、研修旅行では楽しそうな顔を見ることができ、本当に嬉しく思います。一方で、毎日のように新規患者数が発表されていて、その数の多さに麻痺すら覚えることもあります。亡くなられた方はすでに5万人を超えました。



今年9月に本校で広島市在住の三浦さんを講師に「命の大切さを学ぶ教室」がありました。これまでこうした講演を、本校・分校で定期的に行っています。今回は、斐川町にお住まいの江角さん夫妻の講演でした。約3週間前の山陰中央新報でも取り上げられていました。江角夫妻は、1999年12月次女の真理子さん(当時20歳)を相手の飲酒運転による交通事故で突然亡くされ、それからの長い年月、癒えない気持ちと向かい合いながら、講演活動を20年以上続けておられます。当時高校生だったご長男の3年担任をしていたこともあって、弔問に行った日の事を今でも思い出します。命の大切さを身にしみて感じた瞬間でした。先日、三刀屋高校や掛合分校の活躍を再三見聞きし、エールを送りたいと江角さんから連絡がありました。その最後に「12月は命日病になります」とありました。胸にこみ上げるものがありました。

1999年に3年担任をした時は、生徒の家が深夜火事になり焼け出されるなど、命の大切さについて考えさせられる事が他にもありました。中でも、内地留学で2年間学校を離れ、久しぶりに教壇に立った1999年4月始業式の日、生徒が自転車でトラックにひかれ意識不明の重体となった日の事は鮮明に覚えています。それからクラスや部活動、生徒会などの生徒たちと一緒に、目を覚まさない彼を励ましに病院に通う日々が続きました。3か月後彼の生きる力が奇跡を起こし、目を覚ましました。その後懸命にリハビリをして、1年遅れで卒業。1年早く卒業するみんなに寄せた手記が、当時の勤務校のPTA通信に掲載されました。数年後、彼の結婚式での幸せそうな笑顔を見て、親子の絆、友の絆、命の尊さをあらためて感じました。

校長室だより第60号で海老原宏美さんの最期の講演に触れました。その講演で、命の価値について触れておられます。「命の価値は平等という言葉に耳をすることがあるが、命にはそもそも価値はない。価値があるものは、ダイヤモンドのように価値が上がったり下がったりするのである。命に価値があると考えるのは、現代社会が価値を求める社会だからである。役に立たなければいけない、生産性がないといけないうような価値観に縛られている一面があると思う。生きているというだけでも素晴らしいことではないか。屋久杉や富士山は、ただそこにあるだけで、行けば勇気などがもらえる存在である。価値はそもそもあるものでなく、つくられるもの。命はつくるものではない。あるだけで尊い。だから大切。」と話されていました。

校長室だより第62号で触れた、映画「道」の一場面で『私は何の役にも立たない女よ』と言うジェルソミーナに、綱渡り芸人が『この世の中にあるものは何かの役に立っているよ。』というシーンがあります。命はあるだけで尊く、生きていけば必ず何かの役に立っているのです。日野原医師も言われたように、本当に大切なものは目に見えません。例えば命のように…。絵本『しょうぼうじどうしゃ じふた』のお話のように、その存在には必ず意味があるのです。

有意義な冬休みとなるように学習、読書にしっかりと時間を使ってください。みなさんにとって来年2023年が、素晴らしい年、躍進の年になることを願って、終業式にあたっての話とします。



○3学期始業式講話「自分に挑む戦い」 台湾で販売された雪姫舞→

令和4年の世相を表す漢字は「戦」でした。今年はどうな漢字の世相となるのでしょうか。未来がイメージできる漢字の1年であることを願うとともに、一人一人が夢を追いあきらめず挑「戦」する1年にして欲しいと思います。

ウクライナの児童文学作家であるオルロフ氏原作の『ハリネズミと金貨』という絵本があります。あらすじは「ハリネズミのおじさんが道で金貨を拾いました。冬眠に備えて、その金貨で必要なものを買おうとする道中、次々と出会う動物たちが必要なものを譲ってくれるので金貨は使いませんでした。」というお話です。お金本来の意味、なにより人と人が寄り添い助け合い生きることの大切さに気づかせてくれます。

ロシアのユーリ・ノルシュテイン作の『霧の中のはりねずみ』という絵本があります。「日が沈んで薄暗くなってきた頃、はりねずみが、野いちごのはちみつ煮を持って仲良くぐまのところへ行こうとしますが、その途中立ち込める霧の中で道に迷ってしまいます。しかし、いろんな動物が寄り添い助けてくれ、なんとかぐまのところまで行くことができました。」というお話です。

戦争の当時国の絵本です。絵本からは、やさしさや寄り添う気持ちしか見えてきません。

ちなみに一番好きな絵本は、『ぼくはぐまのままでいたかったのに…』というスイスの絵本です。現代社会の授業で、環境問題を扱うときなどに使ったことがあります。あらすじは「平和な森に人間がきて、木を切りたおして工場を建設。森で冬眠していたクマが目覚めて出ていくと、工場の労働者にされてしまう。」というお話です。自分のことはわかっているつもりなのに、やりたいこともあるのに、言われるがまま行動していたら、アイデンティティを、つまり熊が熊であることを見失っていきます。自分の意志にかかわらず自分が自分でなくなってしまう現実。見失わないためにはなにが大切だったのでしょうか。戦争は、人が人でなくなってしまうものだと思います。

台湾の百貨店で、分校生徒が関わった雲南の焰米(雪姫舞)が販売されました。その台湾には徴兵制がありましたが、2018年から4か月間の軍事訓練の義務だけにしました。しかし、中国が台湾に対する圧力を強めていることや、ロシアのウクライナ侵攻を受け、2024年から兵役を1年に延長すると年末に報道されました。北朝鮮では男女に徴兵制度があります。一方、サッカーのワールドカップ・カタール大会で日本が対戦したコスタリカには軍隊がありません。コスタリカの元大統領アリアス氏は、ラテンアメリカではじめてノーベル平和賞を受賞。国家予算の20%以上を教育にあてるコスタリカ。一方、日本の文教及び科学振興費は5%弱です。

ロシアの文豪トルストイ作の『戦争と平和』。1度読みましたがかなりの長編です。ナポレオンのロシア侵攻による戦争を描いていますが、戦争の中で生きがいや幸せとは何かを若者たちが考え学びながら成長していく小説です。その中の言葉に、「人間の考え方には果てしない多様性があるから、どのような真理であっても、二人の人間の頭に、同一に映ることがない」というものがあります。自分の価値観を他者に押しつけようとするのが争いの発端かもしれません。

受験戦争という言葉が昔ほど使わなくなりました。あまりいい意味では使われてこなかった言葉ですが、これを自分との戦いと考えればどうでしょう。また、戦いがお互いや自分の成長のためのものであれば、その戦いも違った見方ができます。部活動も同じです。自分がやりたいこと、めざしたいことのために挑戦し努力する。仲間とライバルと切磋琢磨する…。

3学期、令和5年がスタートします。いろいろな場面で、小さな挑戦、小さな気遣いができる人。大きな志をもって努力を重ねることができる人になってください。今年もがんばりましょう！





○「二十四の瞳」

金比羅宮の石段（四国研修旅行にて）→

壺井栄の『二十四の瞳』。小説を読んだり、映画やドラマで観たりしていなくても、多くの人がなんとなくあらすじを知っている小説の一つではないでしょうか。

小学生の頃に松江の本屋さんで『二十四の瞳』を買ってもらい、何度も読んだ事を覚えています。教員を志したのはこの頃だったかもしれません。

ある教育雑誌で「離島・へき地教育には、特別支援教育、人権教育、生徒指導、複式教育などに共通する大事な教育理念がすべて詰まっている」というコラムを読んだことがあります。

1952年（昭和27年）に刊行された『二十四の瞳』の舞台は、小説では「瀬戸内海べりの一寒村」となっているものの、2年後に木下恵介監督によって映画化された時に小豆島が舞台設定されたことで、今では小豆島に映画村まであり、食堂では昭和の懐かしい給食セットも食べられるそうです。かれこれ20年くらい前に、岬の分教場や映画村に訪れたことがあります。小学校の頃に初めて読んだ時、20年前に教員になってから映画村を訪れた時、そして今あらためて映画を観て小説を読み返した時、抱く感情や思いは違っている気がします。

1928年（昭和3年）から終戦の翌年までを描いたこの小説は、主人公の大石先生が本校の小学校から離れている岬の分教場に赴任し、12人の新入生とともに先生として育っていく物語です。やがて、軍国主義が色濃くなり、不況も厳しくなって、登校を続けられない子どもも出てきます。6年生になると秋には修学旅行が行われるのですが、小説では「（時代設定としては、犬養毅首相が海軍の青年将校の凶弾に倒れ政党政治が終わりを告げる5.15事件の翌年）…時節がらいつもの（宿泊ありの）伊勢まいりをとりやめて、近くの金比羅ということにきまった。それでもいけない生徒がだいぶいた。働きにくらべて儉約な田舎のことである。宿屋にはとまらず、（早朝出発の日帰り旅行として）三食分の弁当をもってゆくということによって父兄のさんせいを得た…こんびらは多度津（港）から一番の汽車で朝まいりをした。…石段をのぼっていきながら汗を流しているものもある。…」と描かれています。

コロナ禍にあって、この3年間台湾研修旅行は中止。昨年度本校は石見地方日帰り2日間、今年度は金比羅宮参拝を含む四国研修旅行でした。状況はまったく違うものの、どんな形であれ修学旅行の実施が、多くの生徒にとっていかに大事で、保護者や学校もその思いを大事したいかは変わらないとあらためて感じました。特別支援学校での教頭時代、1、2人の生徒のための修学旅行を引率しました。生徒も、先生も半年以上も前から長い時間をかけ、事前学習を含め入念に準備してきたからか、帰りの出迎えは成就感もあって感動的でした。

小説の最後は、終戦後に同窓会が開かれるシーンで終わります。戦争や病気で半数近くが帰らぬ人となった中で行われた同窓会では、修学旅行の思い出も語られたでしょう。中でも、戦争で全盲になった通称ソソキに、「（何を言われても）平気のへいぎでおられるようになれえよ」とマスノが言うシーンは考えさせられました。この時代は、障がいがある人自身が障がいに立ち向かっていけないといけない時代だったことがうかがえます。

採用になってはじめて赴任したのが隠岐の島にある隠岐水産高校。最初で最後、3年間卒業まで同じ生徒を担当し卒業させました。卒業生は21名。四十二の瞳です。『二十四の瞳』を読み、一番思うことは、教育や学びがいかに大事か、その後の人生に影響を与えるかということです。楽しい思い出が語れる同窓会ができる平和な日々が続くことを願って止みません。





○「クリティカルシンキング」

毛沢東による中国の文化大革命で、紅衛兵が掲げた「造反有理」というスローガン。体制に反抗することにはそれなりの理由があり、反乱者こそ正義を持っているという意味にもなります。革命無罪と並び文化大革命の有名なスローガンです。「抵抗権・革命権」といえば、現代社会や世界史で習う近代市民革命(アメリカ独立戦争やフランス革命)に影響を与えたジョン・ロックの考え方です。

造反有理も抵抗権も同じように見えますが、クリティカルシンキング、いわゆる批判的思考の観点に近いのは後者かと思えます。それは、クリティカルシンキングが自分の考えや意見に客観性を持たせるための手法であり、感情や主観に流されずに物事を判断しようとする思考プロセスだからです。クリティカルシンキングでは、「なぜ」「どうして」「本当に正しいのか」といった批判的な問いを持ち続けることが大事です。だから、自分の意見に対しても、「間違っているかもしれない」という批判的な視点を持ち続け、物事の本質を見極めようとしています。

今年の正月に、大学時代のソフトテニス部の同期とオンライン同窓会をやってみました。お互い何十年ぶりのような状況でしたが、体育会系部活動で互いを励まし高め合い4年間を乗り越えた、顔も人もわかっている者同士からなのか、いつものオンライン会議で感じる違和感を覚えませんでした。その同窓会でもっとも盛り上がった話が大学時代の寮のことでした。

私は寮の近くのアパートに住んでいましたが、夜中ストーム【storm】の音が聞こえてくるのがよくありました。ストームとは、本来暴風雨やあらしのことですが、学生寮などで寮生が集団で、寮歌を歌ったり氣勢をあげたりして騒ぐこともします。年末 NHK番組「ドキュメント72時間」のベスト10が放映されていて、北海道大学の自治学生寮である恵迪寮の回がありました。恵迪寮では今でもストームがおこなわれていると知り驚くと同時に、同期の寮生が話していたことを思い出しました。同期の寮生は、特に1回生の頃よく眠そうな顔をして部活動をしていました。寝ぼけながらコート整備をされていてケガをしたこともありました。ある日理由を聞くと、「寮は2人部屋だがドアがない。その意味を先輩に問いかけられ一晩中討論させられた。最後にはなぜトイレにはドアが必要なのか。ドアのない国が世界にはある・・・」というように討論が深まると問いの意味すらわからなくなることがある。明け方空が白んで来る頃には考える力もなくなっている。そんな討論、説教が毎夜だから疲れる・・・」と言っていました。

あたりまえのことをあたりまえとせず問い続ける場の多い学生自治寮での生活。人間的な成長はかなりあったかと想像します。クリティカルシンキングというようなカッコいい言葉はありませんでしたが、不条理なことを押し付けられたりもする中で自分の信念を磨き、物事の本質を見極める力を養う意味では、もうひとつの大学教育の場だったかもしれません。監督のいない学生主体の体育会系部活動の世界もそれに通じるものがありました。ただし、建設的で意味のある問いなどではないことも少なからずあったかと思えます。また、ロジカルシンキング、いわゆる論理的思考も十分でなかったように思います。

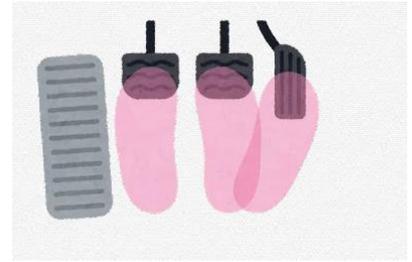
当時も今も寮費は安く、同期の寮生の一人は、奨学金で寮費や教材費を賄い、アルバイト代を時折親に送金していました。大学のHPを見ると、今でも3食付き光熱費込みで月額3万円もしないようです。今の学生は、バス・トイレ付きのアパートに一人で住むことが大半です。アパートでオンライン授業を受けることも普通のことになった昨今。私が学生時代に学ぶことができて良かったことは何かを、オンライン同窓会等を通じてあらためて考えた年末年始でした。





○「半クラッチ」

クラッチとは何か今の高校生で知っている人は少ないと思います。一方、アクセルやブレーキと言えば、車のペダルだとわかる人は多いと思います。クラッチも車のペダルの一つです。オートマ限定免許というものがなく、オートマの車を買う場合は車の値段が高くなった私の世代では、自動車学校の教習で、半クラッチがうまくできず、坂道発進がある教習ではとても緊張したことを覚えています。



教員を長く続けていると、異動ルールというものがあつたため、何度も転勤を経験することになります。転勤は、精神的な負担(ストレス)を抱える理由の一つになります。私も、大学卒業時から数えて、三刀屋高校で13回目の転勤になります。そのうち1年での転勤が4回ありました。そのうち8回が引っ越しを兼ねての転勤でした。

転勤では、それまでの慣れ親しんだ職場環境や人間関係と分かれて、全く新しい世界に身を置くことになります。引っ越しが伴う転勤だと、生活環境や日常の人間関係も新たに整えていかないとはいけません。これだけでもかなり精神的な緊張を要することになります。

大学4年間は、まだ瀬戸大橋も開通していない、フェリーで本土と行き来するしかない四国で過ごしました。隠岐への転勤も2度経験しました。陸路で歩いて本土にいけない環境のため、精神的な隔絶感、孤独感、孤立感、寂寥感(せきりょうかん)を覚え落ち込んだこともあります。

3年生が卒業して新しい環境に身をおく春はすぐそこです。高校入学時に味わつたストレスとは、また違つたストレスを感じる人がほとんどだと思つた。新しい環境にすぐ順応しようとする、その反動が例えば五月病となつて跳ね返つてくることがあります。

新しい環境にすぐ順応しようというのは、羽田空港などにあるような歩く(動く)エスカレーターに飛び乗る感じだ。新しい環境には、そのモードがあり、歴史があり、積み重ねがあり、ルールがあります。停まっているエレベーターに乗る感じではありません。なので、飛行機で言えば滑走路を長く走る意識が大事だ。新しい環境に落下傘をつけて真上から急降下して着地しようとするのではなく、自分と地面(新しい環境)との距離を少しずつ縮めながら、ゆっくりと長く滑るように着陸する感じでいく意識やゆとりが必要だ。

東京の大学に進学した高校時代の友人の何人かが、環境になじめず島根に帰ってきました。ある友人は、「(お店で)これください。」「(遊技場で)両替してください。」「(銭湯で髪を洗つと割り増し料金となるため)髪洗います。」の3つの言葉しか東京で使わなかつたと言っていました。彼は、順応しようと焦り躊躇している間に降りるタイミングを失つたのかもしれない。

半クラッチというのは、オートバイやマニュアル車を発進させる時、ギアをローに入れて、エンジンの回転をタイヤに伝えていく、初期の微妙なギアのかみ合わせをいいます。ゆっくりとエンジンの回転軸を、タイヤの車軸にかみ合わせていくことで、バイクや車が動き出します。これがうまくいかないとエンスト(エンジンストップ)してしまい、バイクや車は発進できません。坂道発進ではエンストすると後ろに下がってしまうので、補助ブレーキも使いながらの操作になります。

新しい環境や新しい人間関係になじんで行こうとする場合には、この半クラッチの状態を大事にしないとはいけません。新しい環境や相手の回転に、自分の回転をゆっくりかみ合わせていくのです。卒業する3年生のみなさん、ゆっくりゆっくりなじんでいきましょう。アフリカで言うポレポレ、車で言う半クラッチ、長い滑走路の意識で、あせらずスタートしていきましょう。



○「寄せ鍋」

冬は寄せ鍋のおいしい季節です。石狩鍋、きりたんぼ鍋、芋煮鍋、新潟の家庭料理のっぺい汁など地域によっていろんな鍋があります。“きりたんぼ”は苦手なのですが、秋田県能代市に行った時に食べたきりたんぼ鍋が最高においしかった事を覚えています。食材が地元産で違うのか、冬の厳しい環境の中で食べたからなのか、有名なお店だったからなのかその理由はわかりません。



寄せ鍋は、野菜や魚、肉などお好みの食材を加えて煮込む鍋料理のことを言うので、これが“ザ・鍋料理”というのではありません。必ずこの食材が入っていないといけない決まりもありません。スープ・出汁(だし)にもいろんな種類が見られます。もともとは、寄せ合わせ(余りもの)の食材から作っていたことから、「寄せ鍋」という名前がついたようです。なので、地域ごとに特色も異なりますし、家庭ごとに、あるいは冷蔵庫に残っている食材によっても違ってきます。ちなみに、中国地方では、しめじなどのキノコ類などを入れることが多いようです。

特別支援学校で一緒に勤務した校長先生が、特別支援学校の仕事は、おいしい寄せ鍋を作ることに似ていると言われたことがあります。おいしい寄せ鍋にするには、いろんな食材が入っていることが大事です。個性やタイプ、障がいの異なるたくさんの先生や子どもたちがいる学校だからこそ、自分の持ち味をしっかりと出し合い、それを認め合い、高め合うことが大事だと話しておられました。一人一人が自分の思いをしっかりと持ち、それをまわりに伝えていくことが大事とも話しておられました。

その持ち味がほどよい具合に混ざり合うと、“うまみ”と“こく”が出てきます。特定の食材の味だけが際立つものでなく、それぞれの食材のよさや持ち味がうまく重なり合う必要があります。

蟹(カニ)鍋は、蟹がメインであったとしても他の食材と一緒に煮込み食べるからこそおいしいと思います。これが蟹だけの鍋ならどうでしょうか。

一人一人が自分の思いを出すだけ、自己主張するだけではうまい味にはなりません。学校や職場なども一緒に、みんなで議論を進めながら、お互いの思いを重ねて、みんなでつくりあげていく過程、みんなで合意形成をしていく過程が大切にされないといけません。

「思いを重ねていく」とこと、「言い放つ」とことは違います。また、「非難する」とこと、「批判する」とことは違います。このニュアンスを意識できる感性がとても大事だと思っています。それが多様性を理解することにもつながります。非難は、一方的に責めたたり、とがめたりすること。批判は、広辞苑によると、物事の真偽や善悪を「批」評(価)し「判」定すること。人物や行為などの価値・能力・正当性などを評価することとなっています。つまり、評価が入ります。

学校の合い言葉に、「小さな気遣い」と入れています。1月末の大雪では、野球部をはじめ多くの生徒が自主的・自発的に雪かきをしたことで、地域の方からたくさんの感謝の声が寄せられました。気遣いとは、相手を思いやることでもあります。他者の気持ちに心を寄せ、気持ちをくみ取っていくことが本来の意味です。それは、自分の思いを丁寧に届けることでもあります。その時どれだけ相手の事を想像できているかが大事だと考えます。

とかく私たちは先入観や固定観念をもつため、相手のことを想像することを省略したり、おろそかにしたりすることがあります。多様性社会だからこそ、相手のことを想像していくこと、自分の思いを届けることを丁寧にしていく必要があると思っています。



○「舞い上がれ！」(卒業式式辞抜粋)

3月には弥生という和風月名があります。草木がだんだんと芽吹く月という意味です。12月の師走と3月の弥生には、10月の神有月のように月がつきません。新たな一年や始まり、そして未来を意識する月だからでしょうか。3月は夢見月とも言います。本来の意味は違いますが、夢をしっかり見据え、志を大きく、**自立した大人**として、未来に向かってしっかり芽吹いて欲しい。卒業式のある3月にいつも強く感じる思いです。



ただ今、卒業証書を授与した卒業生のみなさん、卒業おめでとうございます。みなさんは本校所定の全課程を修了しました。過去の高校生が経験したことがないような環境の中での3年間だったこともあり、業を終えた達成感のもとより、大きく成長した自分を感じているのではないのでしょうか。また、休校やマスク着用ではじまった高校生活で、ともすれば仲間との「**心の壁**」を感じることもあったと思いますが、それを乗り越え深まった**絆**の強さを今は感じているのではないのでしょうか。保護者の皆様も、新型コロナ禍の中で高校生活を過ごすお子様に、時には何もしてあげられない葛藤を感じながらの日々だったと思います。しかし、今日のお子様の凛とした姿を見て、「大事に育ててきてよかったなあ」「よく成長したなあ」「よくがんばったなあ」という感慨や安堵感に満たされていることと思います。あらためまして、お子様のご卒業おめでとうございます。卒業生、保護者の皆様が、苦難と努力の日々を重ね、そして乗り越えて、今日の日を迎えられたことに敬意を表し、教職員一同心より拍手を送りたいと思います。

在校生は、先輩と過ごした思い出を胸に、先輩の姿に自分の将来の姿を重ね合わせ、憧れを抱きながら祝福していることと思います。教職員も卒業生の成長した姿をみて「学校で働けて本当によかったなあ」と喜びを噛みしめています。

いろんな思いを重ね合わせる今日の佳き日、卒業生の成長によりもたらされた互いの喜びを分かち合うという卒業式の意義の一つを、参列者一同今年はより深く感じていると思います。

今日のように、この瞬間のように、人は自分の存在や成長が誰かの喜びとなり、誰かを支えることに結びついたとき、幸せを感じることができます。生きがいを手にすることができます。これからの人生、そういう自分を積み重ねていってください。「私が私であってよかったなあ」「この仕事についてよかったなあ」「がんばってよかったなあ」と思える瞬間を心にたくさん刻めるよう**小さな挑戦・小さな気遣い**を積み重ね、しっかり芽吹いてください。

「向かい風をつかめ！」。昨年度の贈る言葉です。今年度のNHKの朝ドラは「舞いあがれ！」です。向かい風を受けてこそ大きく飛べると信じ、何事にもあきらめずがんばるヒロインの姿を通して、明るい未来への希望を届けるドラマです。飛行機も風も逆風を利用します。向かい風により大きく舞い上がります。**大きな志**をもって未来に向かっていく卒業生のみなさんに、同じ言葉をはなむけの言葉とします。

ミニコラム 「心の壁」

先日、災害時外国人サポートボランティアの研修に参加しました。災害時、日本語のわからない外国の方は、避難所での日本人との習慣の違い(壁)、言葉の違い(壁)からくる情報収集の壁、国籍・在留資格などに起因する援助・補助の壁など、さまざまな壁を感じると知りました。しかし、お互いを理解することで乗り越えることができる壁も多くあります。だから、一番高く乗り越えないといけない壁が心の壁だと知りました。心の壁は言葉がわかれば乗り越えられるものでもありません。まずはお互いを知ろうとするかどうかだと研修を通して思いました。



○終業式講話 「学ぶということ」

令和4年度もいろいろなところでみなさんががんばってくれました。お褒めや感謝の言葉もたくさんもらいました。新型コロナに振り回されました日々もやっとトンネルの出口が見えてきましたが、引き続き私たちがすべきことはしっかりと行いながら、そしてお互いを気遣いながら、これまで以上に有意義で意味ある日々を送っていきましょう。そのためにも、進級にあたり、気持ちを高めて新年度、新学期を迎えられるよう、目標や計画をしっかりと立てて春休みに入ってください。



さて、卒業式の式辞でも触れたNHKの朝ドラ「舞いあがれ！」。2月上旬放送の第88話は、主人公(舞)の兄(悠人)が、株の不正取引、インサイダー取引で金儲けをしたことでマスコミなどから叩かれ実家に帰る話でした。悠人が心にまとった鎧を脱ぎ、家族とのわだかまりが氷解するラストシーンは感動的でした。そのきっかけが、父の遺した日記を読んだことでした。そこには、悠人の才能を父が認めていること、悠人の夢を父として分かりたいと思っていることがつづられていました。そして、「投資で稼いだお金で何をしたいのか、どういう生き方をしたいのかわからない。夢が何かわからない。だから父である自分は夢を捨てずに、子どもに胸が張れるように夢におかちあきらめずにがんばらないといけない」ともつづられていました。

「お金儲けをして何が悪いのですか？」・・・村上ファンドを率いて経済界に旋風を巻き起こし、「物言う株主」と呼ばれた村上世彰(よあき)氏が記者会見で発した言葉です。2006年村上氏はニッポン放送株を巡るインサイダー取引の疑いで逮捕されました。記者から、「法律内であれば何をしてもよいとお考えですか？」という問いかけに対して、「金儲け、悪いことですか？みんなも一生懸命働きお金儲けをしているでしょ・・・ルールの中で一生懸命に株取引をして儲ける・・・何が悪いのですか？」と返しました。記者の誰もその場で反論できなかったことを思い出します。私も未だに明確な答えが出せていません。みなさんならどう反論しますか？

「舞いあがれ！」の第88話を観て、探していた答えのヒントを得た気がしました。村上氏の発言があった頃から、例えば地歴・公民科の授業も暗記中心から変わりはじめました。『生徒会誌』でも触れましたが、1947(昭和22)年の制定以来一度も改正されることのなかった教育基本法がちょうど2006年に改正され、これにともない学校教育法も改正。学校教育において重視すべき学力の3要素が、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」と定義されました。学力は知識を身につけることだけでつく力ではありません。

五重の塔で人生を表現したとすると、土台は人間力、社会力、学力で構成されると思っています。土台の上で、心柱を支える礎石が志。その志が大きければ大きいほどたくて長い柱が建ち、立派な五重の塔になると思っています。昨今夜間中学の設置や充実が叫ばれています。土台の一つでもある学力を卵で表現すると、黄身にあたる部分が、中学校や高校までに学ぶことで身につく学力。自身の部分はそれ以後の教育や学び、経験の中で身につく学力だと思っています。学び直したいというニーズがあるのは、社会人になり、大人になり自己実現を果たそうとすればするほど黄身の部分の大切さに気づくのだと思っています。

「あの時しっかり勉強しておけばよかった」という言葉は、幅広い年齢層の人から耳にする言葉です。今みなさんは、黄身をつくる大事な時期にいます。今しかできないことをすることも大事な事ですが、今こそすべきこと、学力をつけること、それをしっかりとやってください。人生をより豊かなものにするためにも、そのことを切に訴えお願いして、令和5年度最後の講話とします。